

만주학회 제19차 국제학술회의

The 19th International Academic Conference
by the Manchurian Studies Association

동아시아의 인구이동과 문화체험

*The Population Movement and Cultural Experience in
Northeast Asia*

- ◆ 일 시 : 2010년 9월 30일(금)
- ◆ 장 소 : 연세대학교 위당관 414호
- ◆ 주 관 : 만주학회 · 국학연구원
- ◆ 후 원 : 동북아역사재단 · 연세대학교

■ 모시는 글

동북아 지역 연구의 ‘아포리아’ 혹은 동북아 역사 논쟁의 메타 히스토리라 할 수 있는 만주 혹은 중국 동북지역에 대한 학술 연구를 주도해 온 만주학회는 2010년 9월 30일 제19차 국제학술회의를 개최합니다.

저희 만주학회는 짧은 경륜에도 불구하고, 그 동안 대규모 학술대회 개최와 꾸준한 학회지 발간을 통해서 연구 영역의 확대와 그 내실을 다져왔습니다. 금번 만주학회는 국학연구원과 공동으로 “동아시아의 인구이동과 문화체험”을 주제로 국제학술회의를 개최합니다.

금번 국제학술회의는 국내외 여러 전문가를 모시고 그 동안 만주학회가 축적한 동아시아의 인구이동에 관한 연구성과와 관심을 소개하고 토론하는 장입니다. 만주학회 회원 여러분은 물론이고, 만주 혹은 중국 동북사에 관심있는 여러분들의 많은 참석을 부탁드립니다.

2010년 9월 30일

만주학회 회장 한 석 정 올림

일 정

◆ 오전회의 (09:30 ~ 12:00)

※ 사 회 : 윤희탁(한경대)

※ 등록

※ 개회사 : 한석정(만주학회회장, 동아대)

※ 축 사 : 백영서(국학연구원장, 연세대)

※ 사 회 : 윤희탁(한경대)

(1) 만주국의 인구구성과 인구추계

발표: 山中峰央(배재대)

토론: 은기수(서울대)

(2) 중국인의 동북이민과 동북사회의 변천

발표: 範立君(중국 지린사범대)

토론: 구범진(서울대)

◆ 오후 회의 (13:30 ~ 16:30)

※ 사 회 : 장세윤(동북아역사연구재단)

(1) 고종황제의 한일병합 저지계획과 노령지역 한인들의 독립운동(1909-1910)

발표 : 최덕규(동북아역사재단)

토론 : 반병률(한국외대)

(2) 일본인의 만주이민과 생활세계

발표 : 蘭信三(일본 상지대)

토론 : 서민교(고려대)

(3) 화북지역의 한인이주와 '생활체험'

발표 : 김주용(독립기념관)

토론 : 김광재(국사편찬위원회)

◆ 종합토론 (16:30 ~ 17:30)

※사 회 : 김기훈(육군사관학교)

만주학회 제19차 국제학술회의

발 표 문

- 만주국의 인구구성과 인구추계 3
/ 山中峰央(배재대)

- 중국인의 동북이민과 동북사회의 변천 17
/ 範立君(중국 지린사범대)

- 고종황제의 한일병합 저지계획과 노령지역 한인들의 독립운동(1909~1910) 32
/ 최덕규(동북아역사재단)

- 일본인의 만주이민과 생활세계 52
/ 蘭信三(일본 상지대)

- 화북지역의 한인이주와 '생활체험' 68
/ 김주용(독립기념관)

「満洲国」の人口推計と民族構成

山中峰央(배재대)

目 次

- | | |
|------------------------|-----------------|
| I.はじめに | IV. 関東州 |
| II. 「満洲国」(中国東北地区)の人口概観 | 1. 関東州人口データについて |
| III. 人口統計 | 2. 関東州の人口調査 |
| 1. 人口統計の種類 | 3. 関東州の人口推計 |
| 2. 男女別人口 | 4. 関東州の人口概観 |
| 3. 民族別人口 | 5. 民族別人口 |
| | V. 結論と課題 |

I.はじめに

本稿では1931年の「満洲国」建国から45年終戦直前までの中国東北地域（熱河省および南満洲鉄道附属地を含めた「満洲国」、および旧関東州）における人口とその民族構成を明らかにする。そのため、「満洲国」人口に関わる諸々の時系列の推計を取り上げ、民族別の推計を行う。また、旧関東州についても「満洲国」とは別に同様の推計を行う。

今回、「満洲国」の人口推計に用いるのは満洲帝國國務院統計処(以下統計処と呼ぶ)が中心となって編纂した『満洲帝國現住戸口統計』(以下「戸口統計」)の系列である。これは「満洲国」内各地の警察署や公署(役所)などへの届出による住民台帳をもとに調査した統計である。これに加え、時代が進むと『満洲帝國現住人口統計』(以下「人口統計」)の系列が発行されている¹⁾。これは『現住戸口統計』の内容に、年齢別人口や職業別人口などを加え調査したものである。さらに1940年になると「満洲国」で最初の、そして唯一の人口センサスである『康德七年 臨時人口調査報告』(以下「臨時人口調査」)が行われた²⁾。以上挙げたように「満洲国」人口統計にはいくつかの系列が

1) 『現住人口統計』発行後も『現住戸口統計』の発行自体は続いた。筆者は大同元年(1932年)から康德九年(1942年)までの発行を確認している。

存在する。しかし、それらの統計はそのまま利用するには問題があるため、「戸口統計」や「人口統計」の調査結果を利用しつつも、センサスをもとに独自の方法で推計した人口の系列を發表することにした。それらをベースにしながら、可能な限りの年次における系列を推計する。

II. 「満洲国」(中国東北地区)の人口概観

「満洲国」が存在した中国東北地区の人口は、19世紀半ばまでその大部分が無人の荒野であり、人口も300万人程度であったと推測されている。それが、20世紀初頭には1000万、1920年代には2000万人を超え、「満洲国」が建国された1930年代には3000万人、40年前半には4000万人に達した。百年に満たない期間に10倍以上に増加したことになる³⁾。

この地域はもともと狩猟を生業とするツングース系の少数民族が住み、清朝が支配した期間は支配者層である満洲族の故郷であるとされ、この地域への移住を17世紀末ごろから政策で禁止していた(封禁政策)。19世紀半ばまではこの状況に大きな変化は無かった。しかし19世紀半ば頃、ロシアの東進が行われるようになる頃から事情が変化した。ロシアとの領土問題もあり、1860年には禁令が緩和され、移民が事実上許されるようになった。

移民は主に中国本土の華北地域から渡ってきた。彼らは基本的には農民であったが、なかには商人なども含まれ、場合によってはひとつの村が丸ごと移転してくることもあった。彼らによって東北地区は南部を中心に開拓が進められ、中国式の農業・制度が持ち込まれてゆくようになった。

19世紀の終わり頃になると、ロシアの東進に次いで、日本が東北地域に進出してくるようになる。さらに1931年の「満洲国」成立後には農業開発とともに重工業の総合的な開発が行われるようになった。

1930年代前半は当時の社会情勢もあって一時移民が下火になっていたが、30年代後半にはいと労働需要の急増から人口の流入は加速し、それが40年代前半まで続いた。「満洲国」における重工業の生産高は1943年ごろにピークに達したものの、それ以降は戦況の悪化もあって振るわなかった。人口も終戦直前にそのピークに達したと考えられる。終戦になると満洲の日本人は撤退してゆき、また数多く流入していた労働者たちも中国各地へ帰郷して、東北の人口は減少した⁴⁾。

2) 1935年から36年にかけて「第一次臨時人口調査報告」「第二次臨時人口調査報告」が「国勢調査」として行われているが、サンプル調査である上、「戸口統計」と調査方法が同じであるため、ここでは取り上げない。

3) 尾上悦三[1977]「近代中国人口史」112頁。

4) 尾上[1977]111頁。

Ⅲ. 人口統計

1. 人口統計の種類

「満洲国」では行政組織が整う中で財政が問題となり、とりわけ、税金の徴収が問題視された。そのためにも詳細な人口統計が必要となってきたのである。建国前は満鉄や国民政府などがそれぞれ統計を取っていたが、それらの調査は目的や地域などが各々で異なり、「満洲国」全体の人口を把握するには極めて不十分であるため、國務院統計處が中心となって新たに「満洲国」統計を作ることとなった。「満洲国」の人口統計は同時期の日本国内や関東州などの統計などと異なり、その精度は決して高くない。統計は行政機構の整備と並行して整えられ、人口統計調査の体制は徐々に整えられていった。

「満洲国」人口統計の主なものは(1)『現住戸口統計』(2)『現住人口統計』(3)『国勢調査』の3つの系統があり、それぞれの内容は以下のとおりである。

(1) 『現住戸口統計』系列

統計處は『現住戸口統計』の各年度版に民族別および男女別人口を公表していた⁵⁾。これは各地の住民台帳を利用して地域(市・縣および省)ごとに人口を出したものである。この『現住戸口統計』については初期の頃は統計の調査時点が6月末時点であったり、12月末時点であったり地域により異なっていた。これは都市やある程度まとまった地域ごとに統計を取り、それをまとめていたからである。後に調査時期などが統一され、12月末の値が使われるようになった。1930年代は人口センサスなどが行われていないため、この戸口統計のみが人口を知る大きな手がかりとなる⁶⁾。また、30年代前半では、戸口統計の中でも「満洲国」の都市部や鉄道沿線に位置する地域に関しては比較的詳細な調査が行われているが、西部及び北部辺境地域ではあまり詳細な調査は行われておらず、地域ごとの調査精度に差が見られる。それは「満洲国」が成立したといっても初期の段階でまだ支配権が満洲地域全般に及んでいないからで⁷⁾、年が進むにつれて新しく人口が計測される地域が加わっている。したがって30年代前半の資料について、推計での使用では各年度において調査地域や精度に差があることを考慮しなければならない。また、35年から36年にかけて人口センサスの前段階としてのサンプル調査が一部の都市と農村で行われている⁸⁾。この時期になると「満洲国」の統計制度が整ってくる時期でもあり、そのことも影響してか、37年以降の『現住戸口統計』では職業別の統計や年齢

-
- 5) 人口については、民生部地方司編纂の『地方財政概要』など他にも掲載されているが、基本的には『現住戸口統計』と同じものである。
 - 6) 一部の都市・農村を調査したサンプル調査や農業統計の一部としての農村人口の調査などは行われている。
 - 7) 國務院統計處[1933]『大同元年末現住戸口統計』2頁。
 - 8) 國務院總務庁統計處[1937]『第一次臨時人口調査報告書』。

別の統計が出てくるようになる。以下に確認されている統計について述べておく。

(2) 『現住人口統計』 系列

1938年以降、新たに『現住人口統計』が発行されるようになる⁹⁾。基本的な部分には変化していないが、統計がそれまでの年末値から10月1日時点に変更され、職業及び年齢別人口が調査されるようになった¹⁰⁾。ただし、これらの統計では失業者や学生などの区別が無く、「就業者数」のなかにどれだけの「失業者」が存在するのかが不明である。また、就業者の年齢もこの統計からは見ることが出来ない。なお、『現住戸口統計』も廃止されることはなく、『現住人口統計』と平行して行われている。

(3) 国勢調査

国勢調査には1940年の本格的な調査と、それ以前に行われたサンプル調査の二つに分かれる。それぞれの内容は以下のとおりである。

① 『第一次臨時人口調査報告』 『第二次臨時人口調査報告』

日本本土をはじめ、各植民地で行われている国勢調査を満洲でも行おうという気運が高まり、そのテストとしてそれぞれ1935・36年に行われた。第一次調査は新京・奉天・ハルビンなどの都市部、第二次調査は農村を対象に行ったサンプル調査である。調査内容は『現住戸口統計』とほぼ同じで地域別・年齢別人口だが、それに加えて職業別人口の調査も行われている。

② 『康徳七年 臨時人口調査報告』

1940年、「満洲国」で初めて行われた人口センサスである。これは日本本土や朝鮮、台湾などの国勢調査と同時にされた。この調査は『現住戸口統計』『現住人口統計』などが戸籍による調査なのに対し、統計処のなかに新たに事務局を設け、調査票を配布して行う、現在とほぼ同じやり方である。そのため、調査時点が同じであるにもかかわらず、統計の数値が同年の『現住人口統計』とは異なっている。調査時点は10月1日午前0時で、調査内容は各地域ごとの男女別及び年齢別人口、そして民族別人口などの調査が行われた。しかし、日本本土などとは異なり、職業調査などは行われておらず、その意味では国勢調査というには詳細さには欠けている面がある。

2. 男女別人口

推計にはいくつかの方法があるが、本稿では基本的に1940年の「満洲国」のセンサスと当時の「戸口統計」及び「人口統計」などの人口調査に依拠し、これらを吟味して出来るだけ信頼できる数値を算出する。

この推計は、年次統計である『現住戸口統計』『現住人口統計』を参考にしつつ、センサスの

9) 筆者は康徳五年度(1938年)から康徳九年度版(1942年)まで確認している。

10) 職業統計は康徳六年度(1939年)と康徳八年度(1941年)のみ確認。

結果を利用し、時系列の、より実態に近いと思われる人口を把握する点に特徴がある。即ち、1940年に1回だけ行われたセンサスの結果をベンチマークとして採用し、他の年次に関しては、このセンサスとリンクして推計した10月1日時点の数値としている。

推計の方法として、『現住戸口統計』『現住人口統計』から各年の10月1日時点での人口数を算出する。ここでベンチマークとなる1940年の『康徳七年 臨時人口調査報告』の数値と同年の『現住人口統計』との比率を計算し(約1.05)、その比率を各年度の数値に乗ずることによってセンサスペースの各年次に於ける推計値を求める(表1)。

注意しなければならない点は、これらの数値の増減は主に中国華北地方からの流入者などを考慮しなくてはならないのと、先に述べたように精度が年を追うごとに上がっているため、最初の年ほど人口の把握が少なく、その意味では正確さが各年度によって若干異なるという点である。

なお、推計の上でもうひとつ注意しなくてはならないのが、「満洲国」における行政区画の変遷である¹¹⁾。「満洲国」成立以前、中国の東北部は東三省と呼ばれる三つの省(遼寧省・吉林省・黒龍江省)と熱河省から成り立っていた。さらに現在の内蒙古自治区の一部である興安東・西・南・北の四省が存在したが、これも「満洲国」成立と同時に編入された。しかしそのままでは行政区画としては広すぎるのと、政治的な安定を目指す目的¹²⁾もあって1934年以降、これらの省は14の省に再編された(同時に年号が大同から康徳へと変更された)。その後も何度か省の増設及び市・縣の再編や名称変更が行われた¹³⁾。本稿では基本的に各年次の統計を1940年の国勢調査時点における行政区画にあわせて再編し、推計を行っている。

11) 「満洲国」成立後、1934年には14省2特別市が存在したが、その後、1940年にはその数は19省1特別市にまで増加している。

12) 満洲国史編纂刊行会[1970]『満洲国史 総論』445頁。

13) 行政区画の変更については張在普編[1987]『中国近現代政区沿革表』を参照。

表1. 推計による満洲帝國人口(男女計) 10月1日時点 (千人)

	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年	1942年
新京特別市	139	155	164	253	280	354	419	467	555	589	632
吉林省	4,433	4,647	4,810	5,080	5,215	5,245	5,340	5,354	5,609	5,632	5,842
龍江省	1,190	1,345	1,473	1,556	1,611	1,715	1,846	1,929	2,094	2,175	2,215
北安省	1,458	1,544	1,727	1,811	1,859	1,943	2,141	2,170	2,319	2,300	2,417
黒河省	60	53	66	73	81	89	99	116	150	154	166
三江省	890	855	912	996	1,089	1,263	1,353	1,371	1,416	1,390	1,462
東安省	221	332	362	357	364	381	413	454	512	821	843
牡丹江省	314	294	296	383	437	484	500	515	688	725	754
濱江省	3,446	3,414	3,504	3,630	3,702	3,750	3,919	4,040	4,234	4,484	4,669
間島省	673	565	631	675	702	711	762	810	848	917	918
通化省	986	964	970	924	887	870	908	919	982	1,008	1,040
安東省	2,103	2,103	2,205	2,268	2,235	2,249	2,268	2,235	2,232	2,334	2,378
四平省	2,562	2,684	2,762	2,852	2,923	2,912	2,876	2,909	3,005	3,172	3,272
奉天省	6,755	6,759	6,810	6,893	6,855	6,919	7,120	7,303	7,566	7,962	8,298
錦州省	2,437	2,590	3,107	3,479	3,764	4,092	4,219	4,218	4,318	4,451	4,568
合計	27,665	28,304	29,797	31,231	32,005	32,978	34,182	34,810	36,527	38,114	39,475
熱河省	1,825	2,449	2,690	2,852	3,244	3,678	4,160	4,362	4,553	4,604	4,695
興安西省	262	330	417	483	510	552	637	717	764	810	830
興安南省	536	555	609	650	740	847	914	957	1,027	1,102	1,144
興安東省	135	106	80	88	100	118	149	179	200	238	258
興安北省	83	62	56	83	98	111	113	125	132	144	163
合計	2,842	3,501	3,851	4,156	4,692	5,306	5,973	6,340	6,676	6,898	7,090
北滿特別區	148	182	220								
總計	30,655	31,987	33,868	35,386	36,697	38,284	40,155	41,150	43,203	45,011	46,564

各年度『現住戸口統計』『現住人口統計』『臨時国勢調査報告』より作成

表1を見てみると、人口は1932年から44年に至るまで一貫して増加している。「満洲国」成立直後の32年では総人口が約3000万人、42年までの10年間で約1500万人の増加が見て取れる。これを各地域別に見てみると、まず、首都である新京特別市の増加が著しい。特に30年代の増加率を見ると34から35年にかけての約54%以上の増加を筆頭に10~20%程度の増加を見ている(表2)。これは開発によって人口が流入していることや、首都としての機能が年を追うごとに充実し、人々がより多く定住するようになっていったためである¹⁴⁾。また、その他の地域を見ると建国時点で比較的開発が進んでいた奉天省をはじめとする旧遼寧省地区や吉林省では比較的人口増加は穏やかであるが、37年以降は人口増加率が大きくなっているのが見て取れる。これは産業五カ年計画が始まったために労働者などが数多く流入したためと考えられる。

また、これと並んで特に目立つのが北方地域での人口の増加である。特に黒河省や牡丹江省などで増加が激しい。これは元々人口が少ないところへ開発などに伴って流入が起きていることが考えられ

14) 首都建設については1932年の「国都建設計画概要案」、1934年の「国都建設計画」制定で都市建設が進んだ。

る。特に黒河省は男子の増加率が高い。これは黒河省がロシア(当時はソ連)に隣接していたこともあり、鉄道敷設や軍事関連などを含め、此処が重点的に開発されていたことを物語るものであろう。

一方男女比(性比)を見てみると、「満洲国」平均では123～125程度である(表3)。旧東三省とそれ以外の地域で比べてみると、後者において32年から34年の数値が大きいが、それ以外はさほど差はない。しかしこの数値自体は、当時の外国と比べてみてもきわめて大きい数値である。また人口増加が大きい地域ほど性比も大きいという状況が見て取れる。特に黒河省、東安省、三江省、牡丹江省の北方に位置する四つの省は他の地域と比較しても際立って大きく、前二者は全人口のうち、男子が女子の二倍以上を占めている。同じことは興安各省についても言えるがこれらのことについては、もともと全体の人口が小さいところへ満洲の開発で多くの労働者が入っていったことがこのような性比に反映されているのであろう。

表2. 人口対前年増加率

	1932-33年	1933-34年	1934-35年	1935-36年	1936-37年	1937-38年	1938-39年	1939-40年	1940-41年	1941-42年
新京特別市	11.7%	5.5%	54.2%	10.8%	26.4%	18.5%	11.5%	18.8%	6.2%	7.1%
吉林省	4.8%	3.5%	5.6%	2.7%	0.6%	1.8%	0.3%	4.8%	0.4%	3.7%
龍江省	13.1%	9.5%	5.7%	3.5%	6.5%	7.6%	4.5%	8.6%	3.9%	1.8%
北安省	5.9%	11.9%	4.9%	2.7%	4.5%	10.2%	1.4%	6.8%	0.8%	5.1%
黒河省	10.7%	24.5%	11.0%	10.3%	10.4%	10.1%	17.7%	29.3%	2.5%	8.2%
三江省	3.9%	6.6%	9.2%	9.4%	15.9%	7.1%	1.3%	3.3%	1.8%	5.1%
東安省	50.3%	9.1%	1.4%	1.9%	4.8%	8.3%	10.1%	12.7%	60.3%	2.7%
牡丹江省	6.4%	0.7%	29.8%	14.1%	10.6%	3.3%	3.1%	33.6%	5.3%	4.1%
濱江省	0.9%	2.6%	3.6%	2.0%	1.3%	4.5%	3.1%	4.8%	5.9%	4.1%
間島省	16.0%	11.6%	7.0%	4.1%	1.3%	7.2%	6.3%	4.7%	8.1%	0.2%
通化省	2.2%	0.6%	4.7%	4.1%	1.9%	4.4%	1.2%	6.9%	2.6%	3.2%
安東省	0.0%	4.9%	2.9%	1.5%	0.6%	0.9%	1.5%	0.2%	4.6%	1.9%
四平省	4.7%	2.9%	3.3%	2.5%	0.4%	1.2%	1.1%	3.3%	5.6%	3.2%
奉天省	0.1%	0.7%	1.2%	0.6%	0.9%	2.9%	2.6%	3.6%	5.2%	4.2%
錦州省	6.3%	20.0%	12.0%	8.2%	8.7%	3.1%	0.0%	2.4%	3.1%	2.6%
合計	2.3%	5.3%	4.8%	2.5%	3.0%	3.7%	1.8%	4.9%	4.3%	3.6%
熱河省	34.2%	9.8%	6.0%	13.7%	13.4%	13.1%	4.8%	4.4%	1.1%	2.0%
興安西省	25.7%	26.4%	15.8%	5.6%	8.2%	15.3%	12.7%	6.4%	6.0%	2.5%
興安南省	3.5%	9.6%	6.8%	13.9%	14.4%	8.0%	4.7%	7.2%	7.3%	3.8%
興安東省	21.7%	23.8%	10.0%	13.0%	18.1%	25.9%	20.2%	11.6%	19.0%	8.8%
興安北省	26.1%	9.8%	48.7%	18.7%	13.3%	1.6%	10.9%	6.0%	9.1%	12.7%
合計	23.2%	10.0%	7.9%	12.9%	13.1%	12.6%	6.2%	5.3%	3.3%	2.8%
北滿特別區	23.1%	21.1%								
總計	4.3%	5.9%	4.5%	3.7%	4.3%	4.9%	2.5%	5.0%	4.2%	3.4%

表1より作成

表3. 性比

	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年	1942年
新京特別市	174.5	157.6	166.4	178.7	169.0	161.6	160.8	161.3	166.9	165.8	164.8
吉林省	128.3	128.1	127.2	125.7	126.3	127.1	126.0	126.0	120.8	126.1	125.0
龍江省	130.0	131.2	130.3	130.2	129.8	128.1	127.3	124.7	125.0	125.1	126.1
北安省	138.5	133.3	132.9	132.0	131.7	131.6	131.7	131.3	131.7	130.0	128.5
黑河省	176.1	209.2	233.4	241.3	252.0	255.7	279.4	301.4	327.0	320.3	329.9
三江省	179.1	181.7	181.5	184.4	185.9	188.9	193.1	188.3	151.1	196.8	197.1
東安省	185.6	210.4	212.1	202.1	191.7	189.9	192.7	182.4	190.7	204.0	188.7
牡丹江省	184.3	177.1	173.1	176.9	175.2	177.9	178.3	175.3	185.0	176.5	185.5
濱江省	122.1	118.4	118.9	117.9	116.1	116.1	114.3	115.0	127.1	111.7	112.0
間島省	124.6	119.2	118.9	118.8	118.3	120.3	117.1	120.8	122.6	120.1	118.0
通化省	152.7	149.2	157.7	158.3	157.4	155.8	157.6	157.6	159.2	151.1	151.6
安東省	115.4	117.1	115.9	115.4	113.4	112.7	111.2	110.8	110.4	109.6	108.6
四平省	119.4	118.7	119.4	119.3	119.5	119.2	117.8	118.9	118.8	118.3	118.1
奉天省	118.7	118.5	118.3	117.8	117.2	118.0	116.2	118.0	118.9	119.1	119.3
錦州省	107.3	109.1	111.0	110.0	109.7	109.2	107.6	108.5	107.8	107.7	107.4
合計	124.9	124.4	124.6	124.1	123.7	124.0	123.1	123.7	124.2	124.3	124.0
熱河省	119.8	121.9	121.4	120.0	118.4	117.7	119.0	117.3	116.4	116.6	115.9
興安西省	230.8	166.3	131.9	123.5	124.3	126.1	128.1	128.9	127.6	128.7	127.4
興安南省	141.0	160.6	148.2	132.8	128.4	129.3	132.4	129.9	130.3	132.3	131.2
興安東省	220.3	177.7	152.9	141.4	147.4	147.0	160.9	160.1	151.9	140.7	155.1
興安北省	269.6	236.7	181.9	198.5	205.2	220.2	215.8	207.8	223.2	223.9	242.1
合計	137.5	133.9	127.7	123.9	122.4	122.5	124.1	122.8	122.1	122.7	122.8
北滿特別區	178.4	174.2	176.9								
總計	126.3	125.7	125.3	124.1	123.5	123.8	123.3	123.5	123.9	124.0	123.8

表1より作成

3. 民族別人口

「滿洲国」期の中国東北には様々な民族が存在していた。滿洲族や漢民族はもとより、蒙古族、回族、それに日本人や朝鮮人(族)、あとは少数であるがロシア人や台湾人、そして欧米など海外からやってくる来滿外国人などである。センサスなど、一部の統計ではこれらを細かく分類して数値を出していたが、大部分の統計では基本的に「滿人(或いは滿洲人)」、「日本人」、「その他」、「外国人」など簡単な分け方が為されていた。これに国籍不明の者=「無国籍人」が加わることもあった。

「滿人」とは基本的に先に挙げた漢民族や滿州族、蒙古族や回族などのいわゆる「中国人」である。また「日本人」はさらに「内地人」と「朝鮮人」に分けられ、「内地」から来た日本人は前者に、朝鮮半島出身の朝鮮族は基本的に後者の中に入れられていた。台湾人は通常、「朝鮮人」の中に数えられていたが、統計によっては「外国人」の中に数えられたものもあり統一されていなかった(表4-1)。

表4-1 康德4年末(1937年)満洲帝國現住戸口統計より

(単位：人)

満洲人			日本人			外国人			無国籍人		
計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
35,533,731	19,428,415	16,105,316	1,349,920	735,642	614,278	11,666	5,842	5,824	54,655	27,873	26,782

民族別人口の推計は「現住戸口統計」「現住人口統計」を用いて各年の民族別割合を計算し、それを先に述べた男女別人口の項目で推計した人口に乗じることで算出した。その結果が表4-2である。

表4-2 各年度各民族別割合 (1932-42年)

(千人)

	中国人			日本人			朝鮮人			その他		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
1932年	29,926	16,518	13,408				478	252	226	142	82	60
1933年	31,237	17,230	14,043	40	24	16	572	304	268	102	53	49
1934年	33,027	18,171	14,856	79	49	30	683	365	318	80	41	39
1935年	34,411	18,831	15,580	133	77	56	769	412	357	73	36	37
1936年	35,533	19,401	16,133	197	113	83	897	484	413	70	35	34
1937年	36,817	20,130	16,687	407	229	178	992	533	459	69	35	34
1938年	38,465	20,966	17,500	522	301	221	1,099	589	510	68	35	33
1939年	39,228	21,373	17,811	643	398	280	1,208	660	559	70	35	34
1940年	40,894	22,322	18,572	862	512	349	1,377	752	625	70	35	35
1941年	42,373	23,092	19,282	1,051	625	425	1,518	823	695	69	35	34
1942年	43,730	23,780	19,950	1,149	664	485	1,613	874	740	72	36	36

(注) 1932、37年の「日本人」には朝鮮人が含まれる。

「中国人」とは基本的に満州族、漢民族、蒙古族、回族などを指す。

「朝鮮人」の中には台湾人も含まれる。

「その他」とはいわゆる「外国人」のほか、白系ロシア人などを含む。

(資料) 各年度版「現住戸口統計」「現住人口統計」。

32年から42年にかけての各民族別の割合をみると、全体の9割以上を「満人」が占めている。30年代初頭は98%を占めていたが、徐々にその割合は減少し、42年には約94%程度になっている。残りが日本人や朝鮮人だが、これらは30年代後半に急速にその割合が増加し、日本人は0.1%から2.5%、朝鮮族は1.6%から3.5%を占めるようになった。

IV. 關東州

1. 關東州人口データについて

ここで關東州の人口データも見ておきたい。中国東北のほとんどを「滿洲国」が占める中、その南端の遼東半島で日本が日露戦争において獲得した地域が關東州である。關東州は大連市を中心とした地域で滿洲への入り口となった。ここは日本の統治が比較的行き届いていたため、各種の調査が数多く行われている。これらの調査は「滿洲国」成立以前から行われており、「滿洲国」にもその方法が導入されていると思われるため、参考としてここで論述する。本来であれば、人口の移動などを考えれば、「滿洲国」人口推計値と統一した推計にすべきであるが、両者の統計についてはその期間、精度、内容について差異が存在するため、今回は分けて推計することにした。

2. 關東州の人口調査

關東州は「滿洲国」の人口調査とは異なり、日本国内のそれと同様、精度についてはそれなりに高いものがあつた。

關東州の人口調査は先に述べたように大きく分けて二つの系統がある。一つは日本国内と同時に行われていた国勢調査であり、もうひとつは關東都督府や關東局などの現地行政機関が中心になって行った、關東州独自の調査である。国勢調査は日本のそれと同時に、大正9年(1920年)にはじめられ、5年ごとに1940年まで調査が行われた。調査内容は基本的に、世帯数や男女別人口、民族別人口などである。調査は10月1日の時点で、關東州内を、大連市をはじめとするいくつかの地域にわけて行われた¹⁵⁾。

關東州独自の人口調査は關東州における住民台帳などをまとめたものである。基本的には常住人口調査で、調査時期や目的などは調査ごとに異なるが、本稿で取り上げている『關東局統計三十年誌』では、1905年から35年まで男女別人口とともに職業別人口や民族別人口、年齢別人口や人口動態など關東州の人口調査が詳細に掲載されている。調査時点は12月末日である。

また、国勢調査、關東州独自の調査とも關東州全域を關東州と鉄道付属地¹⁶⁾に大きく分けて掲載している。本稿では鉄道付属地の人口は「滿洲国」の人口推計に入っているため、關東州のみの人口を取り扱う。

15) 大連市、旅順市と旅順・金州・普蘭店・貌子窩の各民政署管内に分けて調査が行われている。

16) 鉄道付属地は駅や線路、操車場など鉄道に直接関連する施設だけでなく、その周辺の市街なども含んでいた。付属地内の行政は滿鉄が担当していたが、人口調査は警察を管轄する關東局などが担当した。

3. 関東州の人口推計

関東州では日本が進出した直後から関東州独自の人口統計が取られていた上、国勢調査も1920年から40年まで5年ごとに5回行われている。そのため、本稿では、これらの国勢調査と関東州の人口調査を利用してできるだけ信頼できる数値を算出する。基本的には「満洲国」の人口推計と同様に、年次統計としての『関東局統計三十年誌』を参考にしながら、センサスの結果をベンチマークとして利用し、より実態に近い人口を把握する。

センサスが存在する1920年から35年にかけては、ベンチマークとなる年と同年の『三十年誌』の数値との比率を計算し、ベンチマーク間の年の比率は直線補間を行った。この比率を『三十年誌』の数値に乗じて各年次の推計値を求めた。1905年から20年の間は20年の比率を使用し、35年から40年の間については直線補間によって人口の推計値を算出した。

以上の計算を男女別に行い、その結果を合計して関東州の人口を得た(表5)。

4. 関東州の人口概観

表5によれば、関東州の人口は1905年の約40万人から40年には140万人弱にまで至っており、35年間で約100万人増加している。人口の増加数は各年で異なり、大きく増加した年もあれば前年よりも減っている年もあるが、平均すると2万7千人ずつ増加していることになる。人口増加率も年によって異なるが、平均すると約3.6%となり、「満洲国」のそれと比較すると低いが、増加率としては比較的高い数値である。

表5. 関東州人口 (千人)

年	計	男	女	性比
1905	397	235	161	146
1906	395	231	165	140
1907	416	241	175	137
1908	441	255	186	137
1909	462	266	196	136
1910	480	276	204	135
1911	503	289	213	136
1912	522	301	221	136
1913	538	311	228	137
1914	548	316	232	136
1915	563	325	238	137
1916	579	334	244	137
1917	596	344	252	137
1918	610	353	257	137
1919	626	363	263	138

1920	674	399	275	145
1921	693	410	283	145
1922	706	415	291	142
1923	722	423	299	141
1924	738	429	309	139
1925	760	437	323	135
1926	782	447	335	134
1927	810	464	346	134
1928	844	483	361	134
1929	887	509	379	134
1930	941	543	398	136
1931	965	556	409	136
1932	981	563	418	135
1933	1,014	581	433	134
1934	1,058	608	450	135
1935	1,118	646	472	137
1936	1,159	668	491	136
1937	1,211	698	513	136
1938	1,255	722	533	136
1939	1,276	732	545	134
1940	1,345	769	576	134
1941	1,446	828	618	134
1942	1,542	886	656	135

(注) 1) 年央人口

2) 四捨五入の關係で男女計の合計と總數は必ずしも一致しない。

(資料) 1905~35年：關東局官房文書課 [1937]、關東局 [1941]。

1936~42年：關東局 [1936a~1943]。

一方、男女比(性比)を見てみると、130から150弱の数値を示し、男子が女子を30%ないし40%程度上回っている。これは「満洲国」と同様であるが、数値だけ見れば「満洲国」平均よりも若干大きい数値となる。この理由としては、日本の植民地として開発が行われ、かつ狭い地域に多くの労働者が入っていったことが、このような結果を招いているものと思われる。

5. 民族別人口

関東州でも「満洲国」と同じく複数の民族が存在していたが、基本的に統計に表れているのは「内地人」「朝鮮人」「満洲国人」「外国人」である。「内地人」は基本的に日本人を指し、「朝鮮人」は統計の初期のころには「内地人」と一緒にされていることもあった。「満洲国人」はいわゆる「中国人」を指し、この中には漢民族や満州族以外の蒙古族や回族なども含まれている。

民族別人口についての推計であるが、1920年以前の統計は欠落部分が多く、基本的に「内地人」と「満洲国人」の数値しかない上に、人口総数との数値が一致しないため今回の推計からは除外した。そのため、推計値は1920年から40年までとなっている。推計自体は『三十年誌』を用いて民族別割合を計算し、それを男女別人口の推計値にそれぞれ乗じることで算出した。35年から40年の間は直線補間によって民族別割合を算出した上で、男女別人口の推計値に乗じた。その結果が表である。

一番大きな割合を占めるのは「中国人」＝「満洲国人」であり、全体の8割以上を占めている。次いで「日本人」＝「内地人」、「朝鮮人」の順になっている。両者はともに割合は少ないが、絶対数は増加し、外国人流入が増加していることを示している。

表6. 関東州民族別人口

(千人)

	日本人	朝鮮人	中国人	外国人
1920	77	1	596	0
1921	81	1	612	0
1922	83	1	621	0
1923	87	1	634	0
1924	90	1	646	1
1925	94	1	664	1
1926	97	1	683	1
1927	100	2	708	1
1928	104	2	737	1
1929	110	2	775	1
1930	116	2	822	1
1931	123	3	838	1
1932	129	3	847	1
1933	138	3	871	2
1934	148	4	904	2
1935	161	4	950	2
1936	168	5	985	2
1937	175	5	1,028	2
1938	182	5	1,066	2
1939	185	6	1,083	2
1940	196	6	1,142	2
1941	208	6	1,230	2
1942	217	7	1,317	2

(注) 1920年以前はデータが不足しているため、民族別人口は一部を除き、不明である。

(資料) 表5に同じ

V. 結論と課題

以上、「満洲国」の一連の人口統計と関東州の人口統計を発掘・整理することによって当時の人口の実態を大まかではあるものの、把握することができるようになった。男女別人口や民族別人口な

どの重要な情報に関して、データの整理や推計などを行うことによって「満洲国」15年間及び、関東州20年間の連続情報を得ることができた。

しかし、現時点での推計作業には多くの問題が存在する。時期によってデータの信頼性や正確性に差があるため、元のデータの漏れを完全に訂正することができなかった。また、今回は人口統計のみを元に推計した数字をもって説明を行ったが、それぞれの民族が果たした役割などがはっきりせず、「満洲国」の移民政策や労働政策などに関連づけて検討することができなかった。これらについては今後の課題である。

[参考文献]

満洲移民史研究会編[1976]『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書舎。

松村高夫他編[2002]『満鉄労働史の研究』日本経済評論社。

水谷國一[1939]『満洲の人口問題』南満洲鉄道株式会社。

尾上悦三[1977]『近代中国人口史』(原覚天『アジア経済の発展構造』勁草書房)。

[中国語文献]

趙中孚[1971]『一九二〇～三〇年代的東三省移民』(『中央研究院近代史研究所集刊』2号)。

李中清 / 王楊[2000]『人類的四分之一：馬爾薩斯的神話与中国的現實』三聯書店。

張在普編[1987]『中国近現代政区沿革表』福建省地圖出版社。

[統計資料]

満洲帝國國務院總務庁統計処『現住戸口統計』1932～39、42～43年度版。

満洲帝國治安部警務司『満洲帝國現住人口統計(総編)』1939～41年度版。

満洲帝國治安部警務司『満洲帝國現住人口統計(職業別人口統計編)』1939、41年度版。

満洲帝國國務院總務庁臨時国勢調査事務局『臨時国勢調査報告』1940年(復刻版、文生書院、2000年)。

満鉄總務部調査課『人口耕地及農産物ヨリ見タル満蒙ノ大勢』1918年。

満鉄庶務部調査課『昭和三年版 東三省産業統計年報』1929年。

満鉄總務部調査課『昭和四年版 満洲産業統計』1930年。

満鉄經濟調査会『満洲産業統計』1932～33年度版。

民生部勞務司『入離滿労働者統計年報』1939～41年度版。

関東局官房文書課『関東局統計三十年誌』1937年。

関東局『関東州国勢調査世帯及人口』1941年。

近代关内移民与中国东北区域文化的变迁

範立君(중국 지린사범대)

目 次

- 一. “全部近代史上空前的大举”：近代关内移民
东北概观
- 二. 同化与异化：移民与东北区域文化的变迁
 - (一) 移民与东北区域文化变异的关系
 - (二) 移民与东北区域语言文字的变迁
- 三. “新型关东文化”：东北地区的移民文化特征
 - (一) 兼收并蓄 `宽容大度` `绝少排他性
 - (二) 东北社会没有建立起典型的传统伦理关系网络，人们的血缘观念淡漠，家族性弱化
 - (三) 文化上的进取性与保守性并存

摘要：近代以来，关内移民大批进入中国东北地区，促使东北区域文化发生了变异。一方面，汉族文化在东北少数民族中传播，被土著民族所接受，以满族为主体的土著文化逐渐被同化；另一方面，汉民族的传统文化也出现了变异。这样，东北文化开始呈现出一种多元的类别，使得原来以“民族”为主的文化特征开始向以“地方”为主的文化特征转化，并在各自原有民族特性的基础上进行自觉的融合和优化，在此基础上形成了既不完全同于关东，又不与中原地区一致的东北地区特有的富于移民特色的文化形态——“新型关东文化”，这使得东北地区的文化由民族性特色到地方性特色的转化十分明显。

关键词：近代、关内移民、区域文化、变异、民族性、地方性

近代以来，关内人口向东北的迁移，是中国历史上最大的人口移动之一，它对东北地区的历史进程产生了巨大而深远的影响。因而，东北移民问题，历来是人口史、社会史领域一个值得注意的重大问题。关于东北移民问题的研究早在20世纪初即已发端，在已有的研究成果中，学者们大多还停留在对历史事实的叙述上，对移民与社会的互动关系，尤其是与区域文化变迁的关系尚缺少深入的探讨。为此，本文转换视角，从文化学和民族学的角度，对移民与东北区域文化变迁的关系作一考察，以补充、深化这一问题的研究。

1) 以山东、河北、河南、山西、陕西人为多，而其中又以山东人为最。

一、“全部近代史上空前的大举”：近代关内移民东北概观

清代以前，东北地区人烟稀少，荒野未辟。1644年(顺治元年)²⁾，多尔袞率八旗兵入关，攻取北京，为了便于加强对全国的统治，清廷决定迁都北京，这次大规模的迁徙，据后人推算总人口当在90万人以上³⁾。这么大规模的人口“从龙入关，尽族西迁”，造成了辽沈地区人口锐减，除盛京和锦州几处有少量兵丁留守外，辽沈大地一时是野无农夫，路无商贾，“土旷人稀，生计凋敝”⁴⁾。这使本来就人烟稀少的东北地区变得更为荒凉。与此同时，关内战争犹酣，土荒丁亡，财尽民穷。为了恢复农业生产，1653年(顺治十年)，清廷正式向全国颁布了《辽东招民开垦条例》，以破格奖励和优待的办法，鼓励关内人民出关开垦。在招垦优厚条件下，燕齐穷困之民，闻风踵至，“担担提篮，扶老携幼，或东出榆关，或北渡渤海”⁵⁾，成群结队出关觅食。辽东招垦政策的实施促进了东北地区的复苏，荒芜的土地得到垦殖，人口增加，民户增多，对医治战争创伤有一定的积极作用。

然而，就在辽东招垦初见成效，大量移民涌入“龙兴之地”时，清廷出于保护对人参、东珠、黄金等资源的垄断，维护旗人生计，保持满族固有的尚武精神，防止汉、蒙民族结合，威胁清朝统治等目的，1668年(康熙七年)，废止了行之有年的辽东招垦令⁶⁾。对关内到东北的移民，实行“事先起票，过关记档，只身放行”的消极限制措施。而对已经进入东北的汉民，强令其取保入籍。不愿入籍者，限期十年，勒令回籍。到乾隆时，清廷对东北采取了更为严厉的封禁政策，坚决禁止汉族移民入境。

乾隆朝开始实行的东北封禁政策，为后来的嘉庆、道光、咸丰三朝所遵奉。然而，绝对的封禁从来没有实行过，迫于日趋沉重的生活压力和连年不断的自然灾害，越来越多的山东和直隶等省农民或泛海偷渡到辽东，或私越长城走辽西。仅康熙末年，山东到关外垦地者已多至十几万人⁷⁾。据统计，到1776年(乾隆四十一年)时，奉天地区移民人口及后裔有90万左

2) 由于本文叙事侧重于近代，故在纪年的使用上以公元纪年为主线，涉及清代的，辅之以王朝纪年。下同。

3) 参见韩光辉：《北京历史人口地理》，北京大学出版社1996年版，第272页；傅乐焕：《关于清代满族的几个问题》，《辽史丛考》，中华书局1984年版，第408页；张璇如：《清初封禁与招民开垦》，《社会科学战线》1983年第1期，第186页。

4) 徐世昌：《东三省政略》卷6，民政奉天省，长白丛书本，吉林文史出版社1989年版，第923页。

5) 刘爽：民国《吉林新志》，长白丛书本，吉林文史出版社1991年版，第166页。

6) 关于辽东招垦令废止的原因，清廷没有明确的谕令，学界对此多有探讨。多数学者认为，《辽东招民开垦条例》的取消，实际上是对东北封禁的开始，只是当时执行并不严格。少数学者则认为，废除招垦令之举，只是罢除授官之例，并没有禁止招民开垦，因而不同意辽东招垦令的废除即为封禁东北之始的说法。参见张璇如：《清初封禁与招民开垦》（《社会科学战线》1983年第1期，第182~188页）、温顺德：《清代乾嘉时期关内汉人流移东北之研究》（台湾国立政治大学民族学研究所1993年硕士学位论文，第6~11页）等。

7) 《清圣祖仁皇帝实录》卷250，康熙五十一年五月庚子，中华书局1985年影印版，第478页。

右，吉林地区有30万，黑龙江地区约有11万，东北地区的移民人数总计约有131万⁸⁾。

咸丰末年，清政府在内外交困之下，终于废除封禁政策，开始主动向东北移民。1904年（光绪三十年），东三省全面开禁，此后关内向东北移民出现了近代以来的第一次高潮。山东、河北、河南等地的人民，闻风而动，“纷至沓来”，出关人数“日难数计”⁹⁾。据1910年（宣统二年）统计，仅山东一省人民“每年春融之期，结队入东省……数额颇巨，殆有络绎不绝之势”，每年从烟台、登州、龙口到达东北者“合计共达三十五六万人之谱”¹⁰⁾。那么，清代200多年间，迁入东北的移民数量究竟有多少？历史上没有确切记载。中国著名地理学家、人口学家胡焕庸曾说：东北三省人口增长史，显示着冀鲁豫三省人口外移的过程¹¹⁾。因此，我们可以从东北人口的增长来推断移民的数量。

表1 1753~1911年全国和东北人口数量表（单位：万人）

年 代	全 国	东 北	奉 天	吉 林	黑 龙 江
1753年（乾隆十八年）	10,275	22			
1757年（乾隆二十二年）	19,034	42			
1762年（乾隆二十七年）	20,047	67			
1767年（乾隆三十二年）	20,983	71			
1786~1791年 （乾隆五十一至五十六年）平均	29,699	97	82	15	
1812年（嘉庆十七年）	36,169	124	94	30	
1830~1839年 （道光十至十九年）平均	40,322	248	216	32	
1840~1850年 （道光二十至三十年）	42,126	373	241	32	
1851年（咸丰元年）	43,189	290	258	32	
1862年（同治元年）	25,541	316	283	33	
1871年（同治十年）	27,531	330	297	33	
1881年（光绪七年）	31,247	455	421	34	
1891年（光绪十七年）	34,109	551	462	55	
1898年（光绪二十四年）	36,144	542	464	78	
1911年（宣统三年）	36,815	1841	1102	554	186

资料来源：据梁方仲：《中国历代户口、田地、田赋统计》，上海人民出版社1980年版，第10、258、262~265、269页制成。

由上表可见，东北人口，从1753年的22万人，不到60年就增长到124万人，以后不到80年就

8) 曹树基：《中国移民史》第6卷（《清 民国时期》），福建人民出版社1997年版，第481~483页。

9) 《论山东难民多往奉锦二府事》，《申报》，光绪二年八月廿四日，第1版。

10) 《盛京时报》，宣统二年三月五日。

11) 路遇：《清代和民国山东移民东北史略》，上海社会科学院出版社1987年版，第19页

超过500万，从1891年到1911年不到20年就从500余万陡增到1,841万，显然主要是由于移民的结果。据估算，在这1,841万人口中，关内移民至少有1千万¹²⁾，这是东北地区人口发展史上的一次飞跃。另据台湾学者赵中孚综合各种数据，从中得出关于东北移民最低的统计数字，即从1661年（顺治十八年）到1908年（光绪三十四）约250年间，东三省的汉族移民从5,000人增加到1,445万¹³⁾。即使这些人口数字偏低，我们也能够看出移民对于清代东三省人口增长的巨大贡献。

中华民国成立后，这种移民的势头有增无减，持续增大，成为“人类有史以来最大的人口移动之一”¹⁴⁾。20世纪20年代是关内移民东北的高峰期，史料记载称之为“移民的狂潮”¹⁵⁾。“九·一八”事变前，南开大学经济学院曾派人赴东三省进行实地调查，在被调查的1,149户移民家庭中，其离村时期“有10%，是在光绪四年（1878）至宣统三年（1911）之间，有90%，是在民元（1912）至民十九年（1930）之间”，其中20年代的移民占了民元以来移民的1/2以上¹⁶⁾。尤其是1923至1930年的7年间，移民人数逐年增加，持续增大，至“九·一八”事变前达到顶峰。“来东北谋生者，其特征一言以蔽之，就是难民多”¹⁷⁾。《海关十年报告》记载说：“多少世代以来，都有向满洲移民的——在19世纪70年代的大饥荒中，移民数量相当大——但是，从来没有像现在这样大的规模”¹⁸⁾。

此间迁来之人口，“络绎于途，势如泉涌，南满铁路以及吉长铁路搭载之旅客数目，剧烈增长，殊为空前未有之现象”¹⁹⁾。据满铁太平洋问题调查准备委员会统计，1923~1930年，关内移赴东北者约500余万人，其中1923年移入的人数为342,038人，1924年为376,613人，1925年为491,949人，1926年为572,648人，至1927年移民人数剧增，突破百万，1928、1929两年仍维持在百万以上。1930年移民人数（810,000人）稍减，但仍超过了1927年前的历年移入数。若以1923年的人口指数为100，则1924~1930年的人口增长指数分别为：110，144，167，297，330，316，237²⁰⁾。1927年是民国时期东北移民关键的一年，是年“山东、直隶、河南的人民，受了荒歉和兵匪之灾，痛苦已极，不得不逃亡东北，图谋生活，东北入境的移民人数，突然增多，为以前所未有”²¹⁾。据满铁人事课劳务股调查统计，从1927年开始，

12) 路遇：《清代和民国山东移民东北史略》，上海社会科学院出版社1987年版，第20页。

13) 赵中孚：《近世东三省研究论文集》，台北：成文出版社有限公司1999年版，第214页。

14) 《海关十年报告》（1922~1931）第1卷，第254页，章有义：《中国近代农业史资料》第2辑（1912~1927），生活·读书·新知三联书店1957年版，第638页。

15) 《海关十年报告》（1922~1931）第1卷，第254页，章有义：《中国近代农业史资料》第2辑（1912~1927），生活·读书·新知三联书店1957年版，第638页。

16) 王药雨：《山东农民离村的一个检讨》，天津《大公报》，1934年5月23日，第11版。

17) [日]满铁庶务部调查课：《民国十七年の满洲出稼者》，1929年日文版，第129页。

18) 《海关十年报告》（1922~1931）第1卷，第254页，章有义：《中国近代农业史资料》第2辑（1912~1927），生活·读书·新知三联书店1957年版，第638页。

19) 《1927年之移民与东省铁路》，《东省经济月刊》第3卷第3号，1927年，第27页。

20) [日]满铁太平洋问题调查准备委员会：《满洲に於ける支那移民に於する数的研究》，大连，1931年日文版，第6页。

关内人口流向东北的人数，由1926年的50多万人猛增至100多万人，并且持续3年之久²²⁾。“九·一八”事变后，中国东方问题研究会编写了《东北事件》一书，书中也有类似记载，“据统计家调查，民国十六年中国内地移往东北的人民约120万；民国十七年约110余万；民国十八年约130万”²³⁾。

以上这些调查统计数字虽不尽一致，略有出入，但足以说明，“九·一八”事变前关内人口向东北迁移，自1923年开始逐渐加大，至1927年达到顶峰，出现了近代以来关内向东北移民的第二次高潮。这次移民高潮，不仅数量多、规模大，而且在时间上具有连续性，呈现出逐年递增之势。

表2 1912~1949年关内移民东北人数统计表（单位：万人）

年份	迁入数	回返数	定居数	年份	迁入数	回返数	定居数
1912	25.2	8.0	17.2	1931	46.7	40.8	5.9
1913	26.0	8.0	18.0	1932	41.4	44.9	3.5
1914	27.2	8.4	18.8	1933	63.1	44.8	18.3
1915	28.0	10.0	18.0	1934	69.0	43.9	25.1
1916	25.9	6.0	19.9	1935	51.9	49.5	2.4
1917	30.4	8.5	21.9	1936	43.6	45.2	1.6
1918	27.2	12.0	15.2	1937	32.0	25.0	7.0
1919	33.0	11.0	22.0	1938	49.2	19.2	30.0
1920	33.6	11.5	22.1	1939	81.0	31.2	49.8
1921	36.2	13.2	23.0	1940	105.0	65.0	40.0
1922	36.8	13.4	23.4	1941	92.0	56.0	36.0
1923	34.1	24.0	10.1	1942	95.0	47.0	48.0
1924	38.4	20.0	18.4	1943	93.0	52.4	40.6
1925	47.2	23.7	23.5	1944	60.0	28.3	31.7
1926	56.6	32.3	24.3	1945	40.0	25.1	14.9
1927	105	34.1	70.9	1946	38.0	36.0	2.0
1928	108	57.8	51.1	1947	35.0	41.0	6.0
1929	104	62.0	42.0	1948	25.0	35.0	10.0
1930	74.8	51.2	23.6	1949	24.0	38.0	14.0
小計	899	305	594	總計	1983.9	1073.3	910.6

资料来源：据杨子惠：《中国历代人口统计资料研究》，改革出版社1996年版，第1407~1409页制成。

上表是《中国历代人口统计资料研究》一书综合各种统计资料制成的民国时期关内移民数

21) 朱家骅：《浙江移民问题》，1931年版，第19~20页。

22) 东北文化社编印处：民国二十年《东北年鉴》，沈阳：东北文化社1931年版，第1270页。

23) 《东北事件》，第294页，转引自朱玉湘等：《论“九·一八”事变后东北地区的关内移民》，《近代史研究》1992年第3期，第179页。

量表。表中显示，1912~1949年历年进入东北地区的关内移民数量多少不一，但最少也在20万以上，其中有4个年份（1927、1928、1929、1940）的移民数超过了100万人。整个民国时期东北地区的移民总数为1983.9万人，其中在东北定居的为910.6万，定居率为85%，诚可谓“全部近代史上一件空前的大举”²⁴⁾。

二、同化与异化：移民与东北区域文化的变迁

关于移民与社会变迁的关系，1928年朱倮先生撰写了《满洲移民的历史和现状》一文，认为关内向东三省移民，于中国前途之影响有五：1、解决民食问题，减少内乱之原（源）；2、解决人口问题，使内地各省不致有人口过剩之患；3、为中国民族向北发展之一新纪元——移民结果，可使东三省完全中国化；4、开垦荒地，启发利源；5、增加中国在满洲之势力，以御外侮而防侵略——进一步言之，可以强固东北之边防，而拱卫中原²⁵⁾。上述几点，都应引起注意，其中第三点虽带有某种偏见，但也说明了大批汉族移民的迁入，促进了汉族同当地少数民族之间的融合，进一步密切了中原与东北地区的关系，缩短了内地与东北之间的差距，使东三省完全“中国化”，而这一切是通过移民与当地土著民族在文化上的碰撞与交融完成的。

一) 移民与东北区域文化变异的关系

“文化——无论是物质的还是精神的——都是由人类创造的，也是依附于人类而存在的，地理环境的多样性和人类创造力的多样性使文化因地而异，因人而异，表现出强烈的地理特征”。同时，人又是文化的载体，当人口迁移时，他们所具有的价值取向、生产生活方式、语言文字、风俗习惯、宗教信仰等等，也必然随之移动，因而，“人口在空间的流动，实质上就是他们所负载的文化在空间的流动。所以说，移民运动在本质上是一种文化的迁移”²⁶⁾。因此，移民现象本身就是一种重要的文化现象。人口迁移不仅引起文化诸要素在空间上的转移，也必然导致在植入区域中不同文化的交流与融合，其结果便是某种新型文化的出现，这是移民与区域文化间复杂关系的核心所在。清末以来，东北地区的移民活动异常频繁，这种壮观的大范围的移民现象，其在文化上的影响是相当巨大而深远的。因此探讨移民活动对东北区域文化产生的影响，便成为探讨移民与社会变迁关系的一个不可或缺的重要内容。

英国文化学家马林诺斯基认为：文化既具有相对独立性的特征，又具有流动变异性的特征。前者使一种文化与他种文化相区别，后者又使文化之间有沟通性²⁷⁾。近代以来，关内人

24) [美]Walter Young：《美报之华人满洲移民运动观》，《东方杂志》第25卷第24号，1928年，第49页。

25) 朱倮：《满洲移民的历史和现状》，《东方杂志》第25卷第12号，1928年，第21页。

26) 葛剑雄：《中国移民史》第1卷（导论），福建人民出版社1997年版，第102页。

口大规模迁往东北，使东北区域文化发生了变异，就说明了这一点。就移民与东北区域文化的关系而言，笔者认为，这种变异包括两个方面。

其一，汉族文化在东北少数民族中传播，被土著民族所接受，以满族为主体的土著文化逐渐被同化。

清末民初，随着关内移民大规模出关谋生，东北人口的民族构成发生了深刻的变化，汉族已成为东北人口的主体。1931年有人估计，“今日三千余万之东北人民，汉族实居百分之八十以上”²⁸⁾。当大批汉族移民深入到东北少数民族的腹地时，不仅带来了关内先进的生产技术，而且也把自己的语言、出生地的风俗习惯、生活方式、宗教信仰等带到东北，并在文化层面上对东北土著民族进行了重新塑造。这样，中原文化逐渐渗透到东北各地，造成了中原文化对以满族为主体的土著文化的同化局面。时人评论道：“山东农夫，跋涉长途，开垦荒地，有探险之性，具沉毅之力，其质朴敦厚之风，关内农民，不能过也。至于移风易俗，使东北完全汉化，厥功尤伟”²⁹⁾。至“九·一八”事变前，满人“起居、饮食、衣服、言语，均与汉人同化。间有拘守旧俗者，殊不足左右习尚，将来满人与汉人同化，可断言也”³⁰⁾。

可见，关东土著文化在中原文化的包围之下，只能不断进行自我调适，向中原文化看齐³¹⁾，最终导致东北土著民族“渐效华风”³²⁾。整个东北，“无论在语言、宗教信仰、风俗习惯、家族制度、伦理观念、经济行为各方面，都大同小异”³³⁾。当时的调查资料指出：“汉人之文化程度比较高上，故其在边地之经济生活上亦占优势，久而久之，满人与达呼儿（达斡尔）在言语、服饰、建筑上均为之同。故现在欲分别谁为汉人，谁为满人，谁为达呼儿，甚觉困难，所有地方居民，就其外表言，宛然一民族也”³⁴⁾。赵中孚先生亦指出：“最主要的，在主观意义上，移民社会的广大成员并不因地理距离而自觉有别于故乡同胞……相对大多数的山东移民来说，东三省无非是山东省的扩大。当你同一个在黑龙江已经居留两代以上的山东农民交谈，你会发现，除了轻微的乡音变化外，在感情和意识上，他仍旧是山东人。部分移居东三省的人，在离开家乡后，也常把籍贯区别为‘山东济南’，或‘河北保定’之类的。这说明一个事实，对大多数东三省移民社会的成员来说，‘东三省’或‘东北’是一个行政和地区区分的标志，是抽象的。几千年的文化传统，才是真实永恒的存在”³⁵⁾。随着汉族人口占有绝对多

27) [英]马林诺斯基：《文化论》，费孝通译，华夏出版社2002年版，第12~13页。

28) 胡伯玄：《东北四省之建置历史与民族源流》，《新亚细亚》第3卷第5期，1932年，转引自孙东虎：《清代以来东北地区民族构成及地名的变迁》，《社会科学战线》1998年第5期，第205页。

29) 黄泽苍编：《山东》，中华书局1935年版，第112页。

30) 伯勤：《黑龙江沿岸一瞥》，《中东经济月刊》第7卷第4、5合号，1931年5月，第199页。

31) 池子华：《中国流民史·近代卷》，安徽人民出版社2001年版，第139页。

32) 郑士纯等修、朱衣点等纂：民国《桦川县志》卷5，台北：成文出版社有限公司1974年影印版，第706页。

33) 赵中孚：《近世东三省研究论文集》，台北：成文出版社有限公司1999年版，第232页。

34) 《黑河调查详志》，《东省经济月刊》第5卷第12号，1929年12月，第30页。

35) 赵中孚：《近世东三省研究论文集》，台北：成文出版社有限公司1999年版，第169~170页。

数地位的形成, 汉族的传统文化已占据了东北文化的主导地位。当时有学者即指出:“满洲人口, 汉人最多, 文字、言语、风俗、习惯, 完全为汉人的, 尤其是山东人的”³⁶⁾。

其二, 汉民族的传统文化也出现了变异。

在谈到移民与东北区域文化变迁的关系时, 以往论者往往不适当地单方面强调汉族移民对东北土著文化的影响, 而忽略了少数民族文化对汉族文化影响的一面。殊不知, 文化的交流与融合从来都是双向的, 因而影响也是互相的。同化虽是文化的融合, 但“本质上不能等同于文化交流, 相对对等、双向互动才是文化交流的本质, 同化顶多算是文化交流的一种特殊形式”³⁷⁾。我们承认中原文化对关东土著文化的影响, 但同时也应该看到, 关东土著文化对中原文化的影响, 也是不可估量的。

尽管“东三省移垦社会成员, 没有自别于文化母体的意念”³⁸⁾, 但中原文化并非也随移民而被简单地“复制”到东北, 汉民族的传统文化由于“脱离母体和环境的改变, 不能不发生异变……这就使复制到关东的中原文化与母体文化逐渐拉开距离”³⁹⁾。关东土著文化也不可能毫无保留的被全盘同化, 在汉族移民改变东北地区文化面貌的同时, 他们自己也在不同程度上被打上了当地固有文明之烙印。东北是满族的发祥地, 在这里, 满族文化的影响尤为明显。关内的汉人, 来到东北以后, 往往“再世以后, 与满洲人同化矣”⁴⁰⁾。这说明, 民族之间的融合不可能仅仅是一个民族对另一个民族的影响或同化, 而是双向的, 是不同民族间的相互影响与交流。

东北地区自古就是一个多民族聚居的地区, 汉、满、蒙古、朝鲜、达斡尔、赫哲、鄂温克、鄂伦春等民族早就在此劳动生息。这种民族杂居的局面, 促进了东北各族的文化交流。首先是来自关内的汉族, 带来富有地方特色的传统文化, 如胶东文化、豫东文化、晋南文化、江浙文化、两湖文化等等, 在这里交汇融合; 其次是散居各地的汉族分别吸收了东北各族的文化, 土著文化的合理性和中原文化的先进性相辅相承, 融铸汇合, 使两种文化在一定程度上都发生变异, 正是这种文化的相互作用, 相互交融, 使东北地区, 既接受汉族农耕文化, 又保持自己独有的地区特色。这样, 一种新型的富有移民特色的文化形态, 即“新型关东文化”逐渐形成。这种文化虽以汉文化为主, 但仍包含有各族文化的因素, 所谓“满汉旧俗不同, 久经同化, 多已相类。现有习俗, 或导源于满, 或移植于汉”⁴¹⁾, 这是东北各民族长期文化交流的最终结果。从这个意义上来讲, 移民不仅仅是文化的载体, 而且也是文化的开创者

36) 刁泥梅:《汉人移居“满洲国”之各种情形》,《中东半月刊》第3卷第9号,1932年,第20页。

37) 池子华:《中国流民史.近代卷》,安徽人民出版社2001年版,第139页。

38) 赵中孚:《近世东三省研究论文集》,台北:成文出版社有限公司1999年版,第232页。

39) 池子华:《中国流民史.近代卷》,安徽人民出版社2001年版,第139页。

40) 王树楠、吴廷燮、金毓黻纂:民国《奉天通志》卷99,礼俗3,沈阳古旧书店1983年影印版,第2280页。

41) 王树楠、吴廷燮、金毓黻纂:民国《奉天通志》卷98,礼俗2,沈阳古旧书店1983年影印版,第2256页。

和传播者。

（二）移民与东北区域语言文字的变迁

汉族移民的进入导致东北区域文化发生变异的内容是多方面的，这里以东北地区语言文字的变迁为例，来说明移民文化与关东土著文化相互冲突、碰撞、吸收、融合的过程，从中透析移民与东北文化变迁的关系⁴²⁾。

清代以满族入主中原，满文满语自然受到朝廷的特别推重，满语作为官方语言占有重要地位，是东北地区通用的语言。如前所述，为了保护清王朝的“龙兴之地”，清朝统治者对东北封禁长达200年之久。封禁东北的原因之一，是为保存满洲的固有风俗，保证自己统治全国的根本力量，维护本民族特征，而旧有风俗的核心内容是“国语骑射”。这里的“国语”即“满语”，因在清代，故又叫“清语”。清朝统治者十分重视满语文的学习和使用，对满洲故地东三省的要求尤为严格。为保存满语旧习，统治者采取了多方面的措施，限制满族人学习汉语、改用汉姓，但总的看，成效甚微。随着时间的推移，满语日渐衰微下去，最终造成了东北地区由以满语为主，向汉语为主的转变。满语衰落的原因之一，即为关内大量汉人的进入。有学者指出，“当发展水平和交际功能不等同的两种语言并存于一个社会中时，发展水平较低，交际功能受到限制的语言就有可能停滞不前，经历一段短暂的双语使用期后，逐渐丧失作为全民族交际工具的地位，完全让位于发展水平较高，交际功能较强的语言”⁴³⁾。大量汉人进入东北，和满族形成杂居之势，对东北满族的汉化，无疑是一种催化剂。在长期与汉族杂居共处的过程中，满汉之间经济文化交流日益密切，满族的固有文化受到汉文化的强烈冲击，影响涉及生活习俗、经济方式、思想观念、宗教信仰等各个方面，作为满族文化典型标志和重要载体的满语在与广大汉族的交往中，明显处于劣势，最终被汉语融合替代、几近消亡。正如嘉庆帝所说，八旗满洲所以清语生疏，在于“平日屯居，该处汉人居多，故未谙清语”⁴⁴⁾。

东三省满语的衰微，大致始于乾隆朝。此后日见明显，特别是咸丰以后，随着封禁政策的废除，关内人民携眷出关者，日益增多。东三省官员不断奏报各地“生齿日繁，旗民杂处”，满族人要学习汉族先进的生产技术，就必须学习汉族的语言文字。他们“以少数地位在汉族人海中生活，各方面都须依靠汉人，和汉人打交接，便不能不习用汉语汉文，从而满文满语就不能不渐次被放弃”⁴⁵⁾。而满族官员要管理东三省事务，处理旗民交涉事件，就不能不通汉语。“除了自己的民族语言以外，还必须有民族间的一种共同语言——这是为了交际的便利”⁴⁶⁾。于是，随着大量汉族的移入，“通国语者寥寥，满洲多能汉语”⁴⁷⁾。诚如《吉林新志》

42) 由于汉族移民与东北土著民族的文化交流主要是在满汉之间进行的，所以，以下内容主要以满汉为例。

43) 景体渭等：《试论东北民族融合过程中的双语现象》，《松辽学刊》2000年第6期，第26～27页。

44) 《清仁宗睿皇帝实录》卷113，嘉庆八年五月壬寅，中华书局1986年影印版，第501页。

45) 吕振羽：《中国民族简史》，三联书店1950年版，第67页。

所云：“乾嘉而后，汉人移居渐多，虽乡曲之满人，亦习汉语，今则操满语者已阒无其人矣。惟东北沿松花江下流及乌苏里江各地，未尽汉化之满族支裔，则间尚保存其固有之语言耳”⁴⁸⁾。

东北满族语言文字的废弃经历了一个由南向北的过程：盛京地区最早，吉林地区次之，黑龙江地区最晚，这个过程与移民的进程是一致的，也是汉族文化影响在日益加深，由近及远，逐步北上的过程。如今，除黑龙江省某些边远乡村，如爱辉、富裕等地，由于地处偏僻，人烟稀少，满族居住地集中，汉族进入时间较晚等因素，少数老年人还会说满语外，其他地方的满族一般都通用汉语、汉文了。因而，随着汉族人口的迁入，东北地区的语言环境已发生了变化，发展至今，大体上东北各族都已接受了汉语作为各族交流的通用语，有些民族甚至抛弃了本民族的固有语言，汉语已成为各民族的通用语，全新的语言地理格局已经形成。

在满族逐步放弃了自己的语言而改说汉语的同时，满语的文化走向并不是消失了或者被汉语所取代了。作为满族的集聚地，东北是满语通行时间最长的地方，因而，满语对汉语的影响也是十分深刻和广泛的，并不像有些学者说的那样：“这里（东北）不发生移民与土著语言相互取代或融合的问题，而纯粹是占据和填补，由河北和山东方言去填补东北的空地”⁴⁹⁾。这种论断未免过于简单、武断。语言相互间的影响，最集中体现在词汇方面。在满汉人民长期和睦相处、共同发展的历史进程中，汉语吸收了大量的满语词语。至今在汉语中，特别是在东北方言中，还活跃着许多满语词汇。这在相声、小品、小说、戏剧和影视等文学艺术作品中经常可以听到、见到。民国《奉天通志》即记载了很多这类词语，这里择取几例，以见一斑。

“疹” (shèn) ， 吓、使人惊恐害怕之意：屋子这么黑，怪~人的；

“秃鲁” (tū lū) ， 表示做事不履行，约不践言：定下来的事，就不能让它~；

“喇忽” (lǎ hu) ， 指遇事疏忽：他这人总是喇喇忽忽的，太不认真了；

“哈拉” (hā la) ， 指油一类的东西长期存放，或存放不当而变质，并有一种难闻的气味：这油放多长时间了，怎么有一股~味儿呢；

“特勒” (tè lè) ， 指衣冠不整：这个人可真够~，衣服脏成这样，也不知道洗一洗⁵⁰⁾。

46) 《斯大林全集》第11卷，人民出版社1955年版，第300页。以上转见梁志忠：《清代东北满族“国语骑射”

的保存与衰微》，《满族研究》1987年第3期，第76页。

47) (清)西清：《黑龙江外记》卷6，黑龙江人民出版社1984年版，第60页。

48) 刘爽：民国《吉林新志》，长白丛书本，吉林文史出版社1991年版，第180页。

49) 周振鹤：《现代汉语方言地理的历史背景》，中国地理学会历史地理专业委员会、《历史地理》编辑委员会：《历史地理》第9辑，上海人民出版社1990年版，第76页。

50) 以上所列词汇参见王树楠、吴廷燮、金毓黻：民国《奉天通志》卷110，方言，沈阳古旧书店1983年影印版，第2290~2317页。文中例句为笔者所造。

除了上述这些口头词汇外，现在东北地区的地名、山名、水名中仍保留着大量的满语词汇。据统计，仅吉林地区的满语地名就有五六百个，至于整个东三省就更多了。如：

“吉林”，吉林省松花江上游边陲重镇，满语“吉林乌拉”的简称，“吉林，

沿江之谓；乌拉，大川之谓”，吉林市即为沿江之市⁵¹⁾；

“哈尔滨”，黑龙江省省会，满语意为“晒渔网的场子”；

“齐齐哈尔”，黑龙江省一主要城市名，满语意为“天然牧场”；

“南杂木”，辽宁省抚顺境内镇名，满语意为“刺梅果”；

“马塘沟”，辽宁省抚顺境内镇名，满语意为“鼓起的丘陵地”⁵²⁾等等。

以满语作名字的山脉、河流，如：

“长白山”，满语为“果勒敏珊延阿林”，“果勒敏”汉译意为“长”，“珊延”

汉译意为“白”，阿林汉译意为“山”；

“黑龙江”，满语为“萨哈连乌拉”，“萨哈连”汉译意为“黑”，“乌拉”汉

译意为“水”⁵³⁾；

“图们江”，汉意为“万水之源”；

“松花江”，满语为“松阿里乌拉”，汉意为“天河”；

“牡丹江”，满语的音译，意为“弯曲的江”⁵⁴⁾等等。

可见，随着满汉民族的不断融合，汉语言中尚有许多满语的遗存，汉语吸收满语词汇无论是数量上还是范围上都是十分可观的，作为方言、地名，满语的一部分词语被保留了下来，被东北各族人民所接受，成为东北各族人民日常交际中不可缺少的基本词语。这使得满语原来以民族为主的文化特征转化成以地域为主的文化特征，这一文化迁移现象既是汉族传统文化被异化的表征，也是满汉民族互相融合的历史见证。

三、“新型关东文化”：东北地区的移民文化特征

如前所述，由于移民的大量涌入，东北区域文化发生了变异，一种新型的具有移民特色的文化形态——“新型关东文化”随之形成。所谓“新型关东文化”，是在汉族移民大量移入东北，中原文化与关东土著文化之间相互冲突、碰撞、吸收、融合之后形成的。这种新型关东文化具有如下特点。

51) 魏声和：民国《吉林地志》，吉林文史出版社1986年版，第8页。

52) 许皓光、刘延新：《汉语中的满语借词概述》，《满族研究》1996年第1期，第69页。

53) 杨锡春：《满族风俗考》，黑龙江人民出版社1991年版，第15页。

54) 刘厚生：《〈红楼梦〉与满语言文化刍议》，《清史研究》2001年第4期，第69页。

(一) 兼收并蓄、宽容大度、绝少排他性

从人口构成来说，东北人口以移民为主，移民大都来自天南海北，他们打破了“原有的宗族血缘关系，不同血缘的移民按照地缘混合杂居，劳动者之间唯有互相照应，共同和恶劣的自然环境作斗争”⁵⁵⁾才能生存。这样，在长期的开发过程中，当地的满、蒙、朝鲜等少数民族和汉族移民互相交往、互相学习，在这种融合的过程中，大量外来人口的移入使得人们不得不习惯于同各种不同的人群交往，大批离乡背井的移民涌入陌生的土地，他们无法原封不动地移植家乡的文化，不得不接受、学习各种不同的文化⁵⁶⁾。同时，外来的汉族人口大都没有很深的文化积淀，也不固守传统和不受制约，久而久之，铸就了关东文化博采众长，兼收并蓄，海纳百川的宽阔胸襟。这种精神豁达通融，往往能以开放的心态对待外来事物，没有狭隘的地域观念，也使东北人养成了不排外、不欺生、热情好客、乐善好施，喜欢交往的群体性格。在近代中国，外来移民（客民）与土著居民之间暴力或非暴力的冲突事件不绝如缕，成为一大社会问题。而在东北社会中，当地土著居民基本上能与山东等省的移民和平相处，并没有发生像其他地区那样的大规模械斗⁵⁷⁾。直到今天，在东北大地上，当地人对山东人、河北人、南方人都乐于容纳，一视同仁，友好相处，没有隔膜之感。这种状况与中原、南方某些地方大不相同。

此外，就生产方式来说，从游牧、渔猎过渡到农业，是人类走过的共同道路。中原很早就过渡到以农业为主的自然经济社会。东北地区则不然，东北的农耕社会主要是在移民的作用下，由南向北嵌入的，嵌入的方式又是分散的、自发的。因此，东北的农耕社会是在游牧渔猎社会的包围下逐渐形成的，在许多方面受到游牧渔猎社会的影响。时至今日，在东部山区和西部草原，这种农牧渔猎兼营的特点仍然存在⁵⁸⁾。因此，农业、渔猎、畜牧经济长期并存，渔猎文化、游牧文化、农耕文化互相混杂，彼此融合，使得东北文化的多元性、兼容性、包容性更加突出⁵⁹⁾。

(二) 东北社会没有建立起典型的传统伦理关系网络，人们的血缘观念淡漠，家族性弱化

从基层上看去，中国传统社会是一种典型的“乡土社会”，这种社会得以存在和维系的一个

55) 马毅、胡凡：《论关东文化》，《延边大学学报》1996年第2期，第38页。

56) 邴正：《探索吉林地域特色的文化精神》，《社会科学战线》2002年第6期，第182页。

57) 参见池子华：《中国近代流民》，浙江人民出版社1996年版，第174~175页；陈孔立：《清代台湾移民社会研究》，厦门大学出版社1990年版，第250~268页。

58) 参见邴正：《当代社会发展与中国东北社会结构的变迁》，马大正：《中国东北边疆研究》，中国社会科学出版社2003年版，第143~144页。

59) 刘国平、杨春风：《当代经济社会发展视界中的东北地域文化》，《社会科学战线》2003年第5期，第143页。

重要因素在于传统农业的定居性。正如费孝通先生在《乡土中国》中所言：乡土社会是安土重迁的，是“生于斯，死于斯的社会”⁶⁰。千百年来，这种对乡土的眷恋，弱化了农民摆脱土地羁绊的能力，使他们习惯于生活在血脉相连、彼此相亲的家族文化氛围中，造成了中国乡土社会“世代定居是常态，迁移是变态”⁶¹。这种变态的迁移实际上打破了传统社会的旧秩序，当移民来到新地区后，势必需要重新修复建立这种关系。

但在移民社会中，人们往往以祖籍地缘，而不是以血缘关系进行组合。这是因为，移民在迁移的过程中，往往不是以家族方式，而是以个人或小家庭方式进行的。移民的离乡他适，迫使他们脱离了故乡的那种既限制他们又给他们以精神寄托的家族关系。他们面对的是一个完全陌生的新环境，不免茕茕孑立，形影相吊。所谓“在家千日好，出门一日难”，为了生存，必求互助。这时，他们首先想到的可以依附的力量就是同一乡贯的人。乡土的自然环境，没有清晰的界限，在意识上也是很模糊的。然而，政治地域区划却可导致人们乡土观念的明晰化⁶²。因此，在移民集中的地方，人们首先就会在乡土观念的旗帜下形成一种各自为政的自我保护机制，这种自我保护机制不是首先出于政治、经济利益的考虑，最初它简直可以说是生存机制的自我本能⁶³。于是，在移民群体中，一种新的社会关系应运而生，这就是地缘关系替代了血缘关系，他们由对家族的依附转向了对乡亲的依附，乡音、乡俗、乡土神灵直至乡土建筑都可成为移民集合的纽带，从而显示出强烈的地域性。1918年《东方杂志》上刊载的一篇关于山东“闯关东”苦力的报道很好地说明了这一点，作者写道：

“此等出外之苦力，各有一定之系统，大抵以其所籍之乡里为范围。如其中一人，因事故必须返里时，必选其属于己之系统者，使代理之。其工头即把头，为一村中之有力者。所发命令，为彼等社会所崇奉。其制裁必实行，如有在工作之地，发见（现）罪恶之行为者，把头必立予制裁，此人遂不见容于乡里。故彼等社会，常受严重制裁之支配，且有多年养成之不成文法律，以维持其秩序焉”⁶⁴。

由此可见，以“乡里”为范围的组织系统，在移民社会里，不但充当着互相照应的角色，而且还承担着维持社会秩序的职责。

另一方面，东北移民社会的建立，系特殊的灾荒战乱所致，因此，当移出地的生存环境稍有改观，便会发生“移民回流”现象。这种频繁的迁徙流动，使得乡村的宗法伦理关系的修复和重建非常缓慢。因此，东北社会与中原及长江流域相比，“不是一个典型的原生型的乡土社会，而是一个变态的移民社会”⁶⁵。在中原地区，一个亲属集团往往长期同居共处，形成了统

60) 费孝通：《乡土中国》，北京大学出版社2002年版，第9页。

61) 费孝通：《乡土中国》，北京大学出版社2002年版，第7页。

62) 参见窦季良：《同乡组织之研究》，正中书局1946年版，第9~12页。

63) 王日根：《乡土之链：明清会馆与社会变迁》，天津人民出版社1996年版，第163页。

64) 高劳：《山东之苦力》，《东方杂志》第15卷第7号，1918年，第21页。

治一个个村庄的大家族。如山东孔氏，在曲阜地区生息繁衍了2,500多年。而东北地区则在持续的大规模的移民浪潮的影响下，形成了不同于中原农耕社会的独特结构方式，东北的血缘关系和家族统治比中原地区要薄弱得多⁶⁶⁾，没有建立起像关内地区那样典型的传统伦理关系网络。这种社会结构特点，对东北社会造成了深刻影响。反映在思想观念上，人们的家族、血缘观念淡化，受传统的束缚较轻，易于接受新事物；反映在经济的发展上，则造成了创业个体缺少家族、宗族等民间社群的支持。近年来，中国江南地区乡镇企业异军突起，生机勃勃，“在很大程度上就是利用了乡村社会传统的组织资源”，而东北乡村社会的此类资源则不甚丰富，这自然会对东北乡镇企业的启动和模式选择产生较大的影响⁶⁷⁾。

(三) 文化上的进取性与保守性并存

近代以来，关内人民“闯关东”⁶⁸⁾者日益增多。一个“闯”字，说明这是犯禁越轨的行为，同时也昭示了这是一个勇敢者的游戏，一种群体性的壮举。虽然历史上踏上“闯关东”路途的大多是当地为生活所迫的农民，但他们无疑是勇于开拓新生活的观念上行动上的强者。他们背井离乡，在东北这个地旷人稀、满目荒凉的世界里，他们忍受着艰苦的自然环境的考验、难耐的孤独寂寞，披荆斩棘，风餐露宿，在千古荒原和林海雪原中开拓垦殖，艰苦创业，把东北从一个半游牧半渔猎的社会开发成为一个农业社会。作为全国粮仓的东北，是移民们闯出来的⁶⁹⁾。艰苦的客观环境，逐渐培养和衍生出移民群体所共有的性格心理和文化意识。这就是：对生存的渴望，勇敢、坚韧的意志以及冒险开拓的意识。因此，在东北的地域文化中，在东北人的性格成分中，已经渗透进“齐鲁文化”和“燕赵文化”的成分，从而形成了近代东北人勇敢坚强、奋发进取的性格。这种精神在近代东北的开发建设及反抗外来侵略的斗争中都有所体现。

勇敢进取精神是“闯关东”的先民们留给东北人的宝贵财富，但在近代东北独特的社会环境中，这种精神在一定程度上发生了变异。清末民国以来向东北移民的数量虽然大大地增加了，但与关内狭乡之地相比，东北仍是地广人稀，加上自然资源丰富，土地肥沃，农业丰年有余。迁徙到此的移民，虽不会有大的发展，但凭借大自然慷慨丰厚的馈赠，维持生计却也不成问题。这对于那些颠沛流离，居无定所的贫苦农民来讲，很容易产生满足感。而寒冷的气候，又使得东北乡土社会形成了漫长的“猫冬文化”⁷⁰⁾。东北地区，冬季漫长，无霜期仅120天左右，户外活动受到很大的限制，因此，除了春秋两季较为忙碌外，东北人较其他地域的

65) 田毅鹏：《区域文化与社会发展》，《社会科学战线》2002年第6期，第189页。

66) 邴正：《振兴东北与振兴东北文化》，《社会科学战线》2004年第5期，第136～137页。

67) 田毅鹏：《区域文化与社会发展》，《社会科学战线》2002年第6期，第189页。

68)“闯关东”是关内人口向东北移民的俗称。

69) 邴正：《振兴东北与振兴东北文化》，《社会科学战线》2004年第5期，第133页。

70) 田毅鹏：《区域文化与社会发展》，《社会科学战线》2002年第6期，第188页。

人更为悠闲，常一年闲半年。优越的自然条件养懒了东北人，当年的移民在新的家园定居下来后，经过岁月浪花的淘洗，今天，在这些移民的后代身上，先祖们创业时的那股闯劲和冒险开拓的精神已经逐渐淡薄了。在生存压力不大的条件下，东北人对自然环境的态度往往是被动的、同时也是依赖的，因此所形成的文化必然是封闭的、保守的。表现出一种懒散的生活方式，小富即安的心态比较突出，社会惰性也较强，与中国南方发达省份在地域文化上形成强烈反差。改革开放以后，这种状况仍然没有多少改观。东北人仍墨守成规，不思进取，大钱挣不来，小钱又不愿去赚，不少人满足于“三亩地，一头牛，老婆孩子热炕头”的现状，宁可在家受穷，也很少外出打工，结果是，“流动者的后代大都缺乏流动”⁷¹⁾。

保守、封闭的观念一度束缚了东北人的创造力，也抑制了东北人的精神。在改革大潮的冲击下，在中国发展市场经济的今天，东北落伍了。在上世纪90年代初及中国加入世贸组织前后，东北地区部分产业工人下岗失业，黑土地上生产的粮食大量积压，出现了全国瞩目的两次“东北现象”⁷²⁾。造成“东北现象”的原因固然很多（如体制、机制等因素），但地域文化的保守性无疑是更深层次的原因。如何“振兴东北”？笔者以为，首要的是对东北文化进行重新塑造，实现地域文化的转型。激活“闯”的基因，剔除不利于经济发展的保守观念，让坚忍不拔、一往无前、敢闯、敢于开发的“闯关东”精神重新成为人们的精神支柱和人生信条，为振兴东北提供精神动力和智力支持。

综上所述，近代以来，由于移民的大量进入，东北区域文化发生了深刻的变化，东北地区的发展逐渐地接近内地文化水平，这一历史功绩虽然不能完全归功于汉族移民，但汉族移民作为边疆地区社会变迁历史合力中的一支分力，所起到的积极作用是不可低估的。同时，东北地区对中原文化也不是全盘接受，而是进行了优化整合，形成了既不同于关东，又不与中原地区一致的东北地区特有的文化，使得东北地区的文化由民族性特色到地方性特色的转化十分明显。此后，满汉之间的一致性愈益增多，旧有的显著差别陆续减少。正如史料所云：“东北地区因汉民寄居者日众，是以久而自化，满洲人亦皆用汉语，尽用汉字，驯至互相同化，互通婚姻，文化日进，畛域除焉”⁷³⁾，大大促进了汉族同少数民族之间的交流与融合，民族团结进一步加强，民族的凝聚力得到增强，对于统一的多民族国家的发展起到了重要作用。

71) 郝正：《振兴东北与振兴东北文化》，《社会科学战线》2004年第5期，第137页。

72) 20世纪90年代初，在由计划经济向市场经济转轨的过程中，作为中国老工业基地的东北三省出现工业经济效益下滑、工业生产步履维艰的困境，当时被称为“东北现象”；曾是中国重要粮仓的东北三省，近些年来特别是中国加入世贸组织前后，出现了传统优势农产品大量积压、农民增收缓慢、农业经济效益提高不大等较为尖锐的问题，被称为“新东北现象”。参见新望：《“新东北现象”与“中部塌陷”》，《中国改革》2003年第9期。

73) 杨学琛：《略论清代满汉关系的发展和变化》，中国社会科学院民族研究所：《满族史研究集》，中国社会科学出版社1988年版，第227页。

고종황제의 한일병합 저지계획과 노령지역 한인들의 독립운동(1909-1910)

최덕규(동북아역사재단)

■ 목 차 ■

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. 머리말 | 3. 고종의 러시아 망명계획과 한러공동방첩망
구축안 |
| 2. 고종의 대러접근정책과 노령지역의 한인
독립운동 | 4. 고종의 대러접근정책의 좌절과 한일강제병합 |
| | 5. 맺음말 |

1. 머리말

1909년 2월 8일 시어도어 루즈벨트(Theodore Roosevelt)대통령이 차기 태프트(W.Taft)행 정부의 신임 국무장관으로 내정된 녹스(P.Knox)에게 “미국의 안전과 국익에 가장 중대한 위협은 독일이 아니라 일본으로부터 닥쳐올 것”임을 경고한 편지를 발송한 것은 미국의 대외정책 수립뿐만 아니라 한국의 독립운동에도 커다란 영향을 끼쳤다는 점에서 주목할 만하다. 루즈벨트의 對日觀을 담고 있는 ‘일본의 위협(The Threat of Japan)’¹⁾이라는 제목의 이 편지는 일본과의 전쟁에 대비를 철저히 해야할 것임을 충고하고 있는 바, “일본은 매우 위협적인 군사강국이며 국민들은 특별한 전투능력을 지니고 있을 뿐만 아니라 호전적이기 때문에, 만일 전쟁이 발발한다면 그 재앙은 어마어마할 것”이라는 판단에 기인한 것이었다. 이에 그는 “우리(미국)가 비록 이긴다하더라도 대재앙이 될 가능성이 있기 때문에 전쟁을 초래할 수 있는 여건이 조성되지 않도록 해야 하고, 우리의 함대를 강력하게 무장시켜 전쟁이 일어나지 않게 하든가, 혹은 만일 개전하더라도 우리가 승리할 수 있도록 해야 할 것”임을 강조했다. 이는 향후 태프트 정부가 일본의 한반도 및 만주정책에 대한 견제정책을 강화할 것임을 시사하는 것으로서 해외에서의 항일독립운동을 활성화시킬 촉매제가 되었다.

1) Theodore Roosevelt-Knox, Feb. 8 1909. Papers of Theodore Roosevelt, Manuscript Division, Library of Congress, pp.120-126. 루즈벨트는 1909년 백악관을 떠나면서 자신의 외교정책을 후임 대통령인 윌리엄 태프트가 계승할 것으로 확신하고 자신의 입장과 견해를 명확하게 전달하기 위해 1909년 2월에 집중적으로 일련의 메모와 편지들을 작성했다.

1909년 2월 1일 미국 샌프란시스코에 본부를 둔 共立協會(1905년 4월 창립)가 하와이의 한인이민자협회인 合成協會와 통합하여 발족한 國民會는 이상설을 비롯한 애국지사들이 이러한 국제정세 변화에 기민하게 부응하기 위한 노력의 산물이었다. 이상설이 콜로라도주 덴버市에서 열린 애국동지대표회를 주도하여 미주지역 한인사회에서 통합운동의 계기를 마련하고 미주 한인사회 뿐만 아니라 해외한인사회 전체를 하나의 단체로 통합하여 독립운동을 조직적으로 전개하려고 하였던 것²⁾도 미일대립이라는 국제정세를 활용하여 적극적인 독립운동을 펼칠 수 있는 호기가 도래했다고 판단했기 때문이라 할 수 있다. 고종황제의 측근들이 1910년 초 미일간의 전쟁위기설이 확산되자 “미일간의 전쟁이 발발하면 한국은 해방될 것으로 믿고 있었고”³⁾ 고종황제 역시 동년 6월 러시아 블라디보스톡으로 망명을 준비한 것도 열강간의 세력다툼을 이용하여 연해주를 거점으로 적극적인 독립운동을 전개하려는 의도가 반영되어 있었다. 이에 이상설이 국민회 결성직후에 총회장으로 당선된 정재관을 대동하고 북미지방총회와 하와이지방총회의 공동결의로 원동에서 독립운동을 추진하는 중임을 맡고 미국을 떠나 연해주로 갔던 것이다. 그 결과 연해주는 1909년부터 헤이그특사의 수석대표인 이상설, 해외한인독립운동 단체의 통합조직인 국민회의 총회장 정재관 그리고 고종황제의 밀사들이 유기적으로 결합할 수 있는 접점이자 해외독립운동의 거점으로서 급부상하게 되었다.

이에 본 연구는 한일강제병합 직전 노령지역을 중심으로 전개된 고종황제의 한일병합저지계획과 이에 부응하여 노령지역에서 전개된 해외한인독립운동을 고찰하는데 목적이 있다. 이를 위해 다음을 밝히고자 한다. 첫째, 왜 고종황제가 대러접근정책을 통하여 한일병합저지 계획을 실현하고자 했는지를 고찰하고자 한다. 이는 고종이 국제정세에 대한 정확한 이해에 근거하고 있었는지에 대한 질문과 관련되어 있다. 둘째, 고종황제의 대외인식은 구체적인 계획으로 실행에 옮겨졌는지를 검토하고자 한다. 대한제국이 보호국으로 국제적 지위가 변경된 것은 러일간에 체결된 포츠머스조약에 근거하고 있었는데, 보호국에서 식민지로 지위 변경되기 위해서는 포츠머스 조약을 체결했던 러시아의 동의가 있어야만 했기 때문에 이를 저지하기 위해 고종이 모색한 방안이 무엇인지 알아볼 것이다. 셋째, 고종황제가 러시아로 망명하여 독립운동을 전개하려 계획했다면 그것이 성사되지 못한 원인은

2) 김도훈, “공립협회(1905~1909)의 민족운동연구”, 『한국민족운동사연구』 제4권, p.51.; 이명화, “1910년대 재러한인사회와 대한인국민회의 민족운동”, 『한국독립운동사연구』 제11집, pp.3-4.; 반병률, “노령 연해주 한인사회와 한민족운동(1905-1911)”, 『한국근대사연구』 1997년 제7집, pp. 84-85.; 박민영, “국치전후 李相高의 연해주 지역 독립운동”, 『한국독립운동사연구』 제29집, pp.3-4.; 이현주, “도산과 초기 미주한인단체”, 『한국독립운동사연구』 제31집, pp.98-99.

3) История Кореи/Под ред. Ю.В.Ванин, М., 1974, С. 417.; 당시 국내언론에서도 미일전쟁 위기에 대해 이미 1909년 9월부터 보도되기 시작했다. 『대한매일신보』(1909.9.15)는 “미일전쟁의 풍설이 홍콩을 중심으로 확산되고 있으며 심지어 미일전쟁의 가상활동사진이 성황리에 상영되고 있는데 그 내용은 미국의 최후의 승리를 그리고 있다”는 내용의 보도를 했다. 또한 『대한매일신보』(1910.3.17)의 ‘미일전쟁론’ 기사에서는, “미국부자 싯푸씨가 미일전쟁은 불가불 된다고 주장한 이래로 미국사람이 일본을 배척하는 일이 일어났기 때문에 일본 동경 국제신문협회에서 미일전쟁이 이유 없는 것으로 결의”했음을 전하고 있었다.

무엇인지를 분석하고자 한다. 이는 노령지역 한인들에 대한 러시아당국의 정책이 국내뿐만 아니라 대외정책과도 밀접하게 맞물려 있기 때문이다.

이에 이 글은 기존의 연구업적을 바탕으로 러시아 역사문서보관소 (РГИА) 등의 비공개 자료를 활용하여 노령지역의 한인독립운동과 더불어 고종황제의 병합저지계획을 구명하고자 한다. 아울러 이 연구가 이제까지 알려지지 않았던 고종황제의 한일병합저지운동을 밝히고 나아가 노령지역의 한인독립운동이 국제정세에 기민하게 대응하여 세계적 규모로 조직되고 전개되었음을 밝히는데 일조할 수 있기를 기대한다.

2. 고종의 대러접근정책과 노령지역의 한인독립운동

제국주의 시기 한반도를 둘러싼 러시아와 일본의 관계는 대립과 타협의 양극을 진자 운동하는 특징이 있다. 시베리아 횡단철도의 해양출구와 태평양함대를 위한 부동의 해양기지를 획득하기 위한 최적의 항구를 한반도에서 획득하고자 한 러시아와 러시아의 남하를 저지하고 대륙진출의 교두보를 확보하고자 한 일본에게 한반도는 양국의 이해가 충돌하는 갈등의 핵이기도 하였고 아울러 타협의 대상이 되기도 하였다. 이러한 대립과 타협의 분기점은 러일전쟁인데 前期는 양국이 한반도에서 자국의 이해를 실현시키기 위해 군사적으로 대립했던 시기이며, 後期는 군사력이 아닌 협상의 방식으로 이해를 조정하는 시기라 할 수 있다.

러일전쟁의 패전국인 러시아가 동아시아에서 자국의 이익을 수호하기 위해 군사력이 아닌 타협과 협상의 방식을 채택한 것은 쓰시마해전(1905.5.28-29)에서 제2태평양함대 (발트함대)가 거의 전멸한 사건과 관련이 깊다. 이러한 러시아해군력의 공백상태는 연해주의 방위뿐만 아니라 발트해에 연해 있는 수도 페테르부르크(С.Петербург)의 안전까지 위협받는 상황을 초래했다. 따라서 러시아는 군사력을 복원할 때까지 대외전쟁은 회피해야만 했던 바, 이는 국제무대에서 러시아의 영향력을 급속히 저하시켰다. 이러한 현상은 동아시아뿐만 아니라 유럽에서도 재현됨으로써 동아시아에서의 문제들이 유럽의 그것들과 연동되어 전개되기 시작했다. 요컨대 러일전쟁 이후의 세계사는 러시아제국의 붕괴과정이었으며 그 징후는 제국의 외곽을 이루던 근동과 극동에서 나타났는데, 발칸반도와 한반도가 그 중심에 있었다.

러시아와 민족적, 역사적으로 긴밀한 관계를 맺고 있던 발칸반도에 위치한 보스니아-헤르체고비나(Bosnia-Herzegovina)가 오스트리아 제국에 의해 병합(1908.10.6)되었음이 선포4)된 지 半年도 되지 않은 1909년 3월 말, 일본의 고무라(小村壽太郎) 외상은 가쓰라(桂太郎) 수상에게 한국병합방침안을 건의하고, 4월 10일 이토(伊藤博文) 통감이 이에 동의한

4) История внешней политики России конец XIX-началоXX века,(М:Международ. Отношения), 1997. С. 233-245.

후 일본정부는 동년 7월 6일 각의에서 이를 확정지었다.⁵⁾ 이는 오스트리아의 보스니아병합이 일본에게 한국병합의 단초를 제공했음을 의미하고 있는데 보스니아와 한국은 네 가지 측면에서 공통점을 갖고 있었기 때문이었다. 첫째, 보스니아는 1878년 베를린조약(Treaty of Berlin)에 의해 오스트리아가 관리하고 있는 상황이었고, 한국 역시 포츠머스 조약에 의해 일본의 보호국으로 있다는 점이며 러시아가 양대 조약의 주요채약국이었다는 점이다. 둘째, 오스트리아와 일본이 각각 무력점령하고 있는 보스니아와 한국을 병합시키기 위해서는 지위변경의 절차가 필요한데 점령지를 제국의 일부로 병합하기 위해 러시아의 동의를 구했다는 점이다. 셋째, 오스트리아는 러시아의 약세를 틈타 보스니아-헤르체고비나의 병합을 기정사실로 한 후, 러시아의 동의를 구함으로써 후자는 이를 저지시키기 보다는 단지 동의에 대한 대가에 만족해야만 했다.⁶⁾ 일본 역시 제2차러일협상 과정에서 한국병합을 기정사실화함으로써 러시아는 이를 저지하기 보다는 그 반대급부로 북만주와 몽골에 대한 러시아의 권한을 일본으로부터 인정받았다. 넷째, 러시아가 오스트리아와 일본에게 병합문제에 대해 묵인하게 된 원인은 발트해와 연해주의 안전을 고려한 군사적 측면이 강했다. 러시아는 보스니아-헤르체고비나의 병합을 묵인하는 대가로 오스트리아로부터 러시아군함의 흑해해협 통과를 금지한 베를린조약을 수정함으로써, 흑해함대를 발트해로 이동시켜 쓰시마 해전에서 전멸하다시피 한 발트함대를 복원시키고자 하였다.⁷⁾ 한편 한반도의 경우, 러시아는 연해주 방위와 동청철도의 안전에 위협이 되는 한러국경지역에 일본의 군사력 증강을 저지하고자 했다. 전후복구가 제대로 이루어지지 않은 상황에서, 러시아가 일본의 한국병합을 묵인하는 전제 조건은 연해주 및 극동러시아에 대한 일본의 군사적 위협의 중단이 될 것이었다.

그렇다면 한국의 입장에서 병합문제를 둘러싼 러일간의 타협을 저지하기 위한 방법은 무엇인가? 이는 외교적으로 러시아황제에게 직접 제2차러일협약(Russo-Japanese Agreement in 1910)을 체결하지 말아줄 것을 호소하는 친서를 보내는 것이고, 군사적으로 연해주와 러시아극동의 방위를 강화하기 위해 한인 의병들이 러시아 군대를 도와 대일 방첩망을 구축하려는 계획으로 구체화되었다. 그리고 이들 계획의 배후에는 고종이 있었다.

이같은 고종의 대외인식은 1909년 2월 13일자 프리아무르주 총독부 산하 외교담당관 보고야블린스키(Н.Богоявленский)가 외무성 부외상 차리킨(Н.В.Чарыкин)에게 보낸 보고서에 잘 나타나있다. 보고서에 따르면, 고종황제의 심복이자 전직 한국군 장교 김인수가 하바롭스크를 방문하여 폐위된 황제(고종)는 러시아로 부터의 지원에 대한 기대를 버리지 않고 있으며 한국의병에게 군부대를 설립하고 노령지역에서 무기를 획득할 수 있도록 허락해줄 것을 희망하고 있다고 전해왔다는 것이다. 김인수의 전언에 따르면, “고종은 한국

5) 방광석, 「메이지정부의 한국지배정책과 이토 히로부미」, 『한국과 이토 히로부미』, (선인:2009), 68-71쪽.

6) 3. История Дипломатии. Т.П(Дипломатия в новое время 1871-1914) М., 1963. С.649-658.

7) Там же.

의 상황이 호전될 수 있는 러시아와 일본간의 새로운 전쟁을 예상하고 있다”는 것이었다.⁸⁾ 대한제국이 일본의 보호국으로 전락한 계기가 러일전쟁이었다면, 일본의 군사강점 상태에서 벗어나 독립국으로 자립할 수 있는 전기 또한 제2차 러일전쟁이 될 것이고 조국의 독립을 되찾기 위해 고종이 기대하고 협력할 수 있는 나라는 러시아일 수밖에 없었다.

이에 1909년 2월 24일 주서울러시아총영사 소모프(Сомов А.С.)가 러청은행 (Russo-Chinese Bank) 블라디보스톡 지점장에게 보낸 기밀서신은 고종이 연해주에 망명하여 항일 독립운동을 지휘하려고 계획했다는 생각을 갖게 하는 실마리를 제공한다.⁹⁾ 이는 소모프가 러청은행 지점장에게 이 은행에 예치된 고종의 비자금 규모가 얼마인지를 문의했기 때문인 바, 이 자금은 고종이 러시아로 망명하여 그곳에서 독립운동을 지휘하려 한 계획과 깊은 관련이 있었기 때문이다. 소모프의 기밀서신에 따르면, 퇴위한 한국 황제는 현재 일본관헌에 의해 엄격한 감시를 받고 있는데, 다음 두 가지에 대해 러청은행 지점에 문의해 줄 것을 제3자를 통해 소모프에게 은밀하게 부탁해왔다: 첫째, 황제가 이 은행에 예치한 예금의 이자를 원금에 합쳐놓을 것과 둘째, 한국황제는 가까운 시일 내에 일본측이 마치 고종이 건넨 것처럼 서류를 위조하여 돈을 찾으려고 시도할 것으로 예견하고 어느 누구에게도 자본금 혹은 그 일부라도 지급하지 말 것을 요청하였다. 이에 소모프는 고종의 이러한 부탁을 지점장에게 전달하면서 총영사관에는 비자금에 대한 어떠한 자료가 없다는 명분으로 지점장이 그에게 개인적으로 비밀리에 고종이 언제, 얼마의 금액을 은행에 예치했는지를 알려줄 것을 부탁했다.

소모프가 고종의 비자금에 대해 관심을 가진 또 다른 이유는 고종의 심부름꾼들에 대한 불신이었다. 고종이 일본의 감시를 받고 있을 뿐만 아니라 직접 고종과 만나 이를 확인할 수 없는 상황은 소모프로 하여금 고종의 사신임을 자칭하는 자들의 언행에 대해 의심해 볼 수 밖에 없었기 때문이었다. 이에 소모프는 황제의 금전문제에 대한 정확한 상황을 알고 있어야만 고종의 이름을 빌어 나를 방문하는 인물에 대해 신뢰의 정도를 가늠해 볼 수 있다고 판단하기에 이르렀다. 예를 들어 고종의 사자가 자본금에 대해 10만 루블이라고 말하지만, 실제 은행에는 4만 루블이 예치되어 있다면, 소모프는 그가 고종이 보낸 사자가 아님을 쉽게 눈치 챌 수 있기 때문이었다. 이에 주서울러시아총영사는 러청은행 블라디보스톡 지점장에게 기밀을 유지하기 위해 우편으로 답신을 전달하지 말고, 포장을 하여 주서울러시아총영사관에 보낼 외교문서용 우편행랑에 넣어 발송할 것이라고 적어서 블라디보스톡 체신국장 라데츠크 (И.М.Радецк)에게 전달해 줄 것을 요청했다.¹⁰⁾

그러나 1910년 2월 29일 러청은행 블라디보스톡 지점장은 소모프에게 보낸 기밀서신에서 고종 명의의 비자금은 한 푼도 없음을 회신했다. 지점장은 사안의 중요성을 감안하여

8) АВПРИ. Ф. Тихоокеанский стол. Оп.493,1910.Д.1096 Л.85-87.Частное письмо Н.Богоявленского о Н.В.Чарыкову от 31 января(13 февраля) 1909 г.// Б.Д.Пак, Россия и Корея, М., 2004. С.406.

9) РГИА. Ф.560. Оп.28. 1908 г. Д.230. Л.120-121об: Секретное письмо Сомова Директору Русско-Китайского Банка во Владивостоке. 11 февраля 1909 г.

10) Там же.

러청은 블라디보스톡 지점에는 귀하가 언급한 인물의 자산은 어떤 것도 없으나, 혹시 다른 지점 가운데 한곳에 예치될 가능성을 염두에 두어 귀하의 편지를 페테르부르크 본점에 전달하여 귀하께 직접 답변하도록 하겠다고 덧붙였다.¹¹⁾ 이에 1909년 3월 16일 페테르부르크 소재 러청은 본점에서는 러시아재무성 관방국과 주서울러시아공사관에 보낸 공문에서 러청은 한국의 국내외 지점 어디에도 한국황제의 예금은 없다고 통보했다.¹²⁾ 하지만 이 공문은 고종의 비자금 자체가 존재하지 않는다는 것인지 아니면 그 비자금이 한국황제의 명의로 예치된 것이 아니라 제3자의 명의로 되어있는지에 대해 확인해주지 않고 있다.

고종이 러시아당국에 노령지역에서의 한국의병활동을 지원해 줄 것과 주한러시아총영사에게 러청은 블라디보스톡 지점에 예치한 비자금의 보호를 요청한 상황에서 헤이그밀사 수석대표로서 명망이 높았던 이상설이 국민회 총회장으로 당선된 정재관을 대동하고 1909년 4월 22일 블라디보스톡을 향해 미국을 출발했다. 이상설은 국민회의 전권을 행사할 ‘전권대표’로서의 임무가 부여되었고 정재관은 원동의 한인사회를 통합하는 임무를 담당하기 위하여 공립협회 회장과 공립신보 주필직을 사임하였다. 이상설과 정재관은 유럽을 거쳐 1909년 7월4일 블라디보스톡에 도착하였고 한인들의 뜨거운 환영을 받았다.¹³⁾

연해주에 도착한 이상설이 가장 먼저 착수한 독립운동사업이 蜂蜜山 독립운동기지 개척이었다. 북만주의 밀산부 관내에 있던 봉밀산은 러시아와 중국의 접경지대인 항카(興凱)호 부근에 위치해 있었고 광활한 황무지가 펼쳐져 있던 곳이었다. 미주 국민회에서는 연해주에서 봉밀산 해외독립운동기지를 건설하던 이상설을 지원하기 위하여 5,000루블의 자금을 우송해옴으로써 국민회는 프리아무르주로 영향력을 확대한다는 이념적 측면뿐만 아니라 물질적으로도 이를 지원했다. 그러나 독립운동기지 개척을 위해 매입한 봉밀산 인근의 토지는 중국의 국유지임이 밝혀져 황무지를 개척한 한인농들은 개간지를 몰수당함으로써 독립운동기지 개척사업은 소기의 성과를 거두지는 못했다.¹⁴⁾

그럼에도 불구하고 프리아무르주에서 국민회는 급속도로 조직을 확장해 갔다. 1909년 12월 22일자 《新韓民報》의 보도에 따르면, 1909년 첫째 하와이에 56개 지회를 설립하고 멕시코 한인들을 가입시켰으며, 프리아무르주에 12개(블라디보스톡, 니콜스크-우수리스크, 이만, 하바롭스크, 치타 등)의 지회가 설치됨으로써¹⁵⁾ 노령지역의 한인들과 미주 한인들간

11) Там же. Л. 122.:Письмо Директора Русско-Китайского Банка во Владивостоке Сомову. 16 февраля 1909 г.

12) Там же. Л. 118,123.:Письмо Русско-Китайского Банка в Общую канцелярию Министра Финансов и Сомову. 3 февраля 1909 г.

13) 반병률, “노령 연해주 한인사회와 한인민족운동(1905-1911)”, 『한국근현대사연구』, 1997년 제7집, pp.86.

14) Записка корейскому вопросу профессора Г.В.Подставина, Приложение к Донесению Начальника Хабаровского розыскного пункта Ротмистра Бабыча от 19 марта за 751 из дела за 1915 год 171(Государственный архив Иркутской области фонд 600. Опись 1. Дело 886. Листы 1-11.) Владивосток 13 декабря 1911 года Г.Подставина

15) Там же. 현지 한인들의 전언에 따르면, 상기 이외에도 국민회의 지회는 블라도베센스크, 스투첸스크와 이르쿠츠크에 있었다.

의 교류가 활성화되기 시작했다. 이는 국민회가 설립되기 전, 블라디보스톡, 수찬, 하얼빈에 북미한인협회, 즉 공립협회의 지회가 존재했었던 경험에 힘입은 바 컸는데 미국으로부터의 지시에 따라 이들 지회들은 즉시 국민회의 지방조직으로 명칭을 변경했기 때문이었다.

그러나 미국의 정치제도를 본뜬 연방공화제를 채택한 국민회는 조직이 급속도로 확장되었고 자체의 강령에서 이미 쇠락한 정부를 계승한 자격있는 ‘臨時政府’로 자임하였음에도 불구하고 노령지역에서 굳건히 뿌리내릴 가능성은 미약했다. 블라디보스톡 동방학대학의 포드스타빈(Г.В.Подставин)교수가 프리아무르주의 한인단체에 대해 보고한 자료(1911. 12.26)에 따르면, “국민회의 사상을 이식시키려는 다양한 시도들은 당초에 국민회가 어떠한 성공의 청사진을 가지고 있었다더라도 결국에는 실패하고 말 것이 틀림없는데, 이는 한인지식인들이 극히 제한적이고 대다수는 무지한 노동자들로 구성된 프리아무르주 한인사회의 특징에 기인한다”는 것이었다. 따라서 그는 “처음에 노령지역으로 보내진 1,000부의 국민회 회원 증명서가 부족하여 1909년 말 중앙위원회에 5,000부를 추가로 보내달라는 요청서가 발송되었지만, 지회에서 그만큼의 회원을 모았는지는 알 수 없고 이에 대한 더 이상의 자료도 없는 바, 결국 국민회 회원의 총규모는 알 수 없었다”고 평가하고 있었다.¹⁶⁾

따라서 국민회는 모든 애국세력을 통합한 임시정부로서 토대를 굳건히 하고 세력을 확산하기 위해서는 새로운 전기가 필요했다. 또한 국제정세의 변화 역시 국민회의 근본적인 체질개선을 요구하고 있었는데, 연방공화제와 상충되는 保皇派까지 아우르는 애국세력의 총집결을 서둘러야 할 만큼 한국의 독립이 절박한 상황에 처했기 때문이었다. 1909년 11월 미국무장관 녹스(P.Knox)가 일본의 만주독점 기도를 좌절시킬 대안으로 “만주철도의 중립화안”을 제기하자, 만주에서의 기득권세력이었던 일본과 러시아가 자국의 특수이익을 옹호하기 위해 상호 접근이 모색되기 시작했던 것이다.¹⁷⁾ 이는 만한문제를 둘러싼 미·일·러 3각 구도가 한편으로는 미국이 다른 한편으로는 일본과 러시아의 공조체제로 분리되는 양대 구도로 전환되기 시작했음을 의미했다. 만주철도의 상업적 이용에 관한 포츠머스 강화조약 제7조와 루트-다카히라 협정의 상업상의 기회균등 규정에 의거, 녹스가 제안한 ‘만주철도의 상업적 중립화안(The Neutralization of all the railways in Manchuria)’은 국제자본신디케이트가 만주철도를 매입하고 이를 열강이 공동 관리하자는 구상이 그 핵심이었는데, 그 본질은 남만주와 북만주를 각각의 세력권으로 확보하고 있던 일본과 러시아를 축출하고 달러외교를 통해 미국이 만주철도를 관할하려는데 있었다. 일본은 미국의 “만주철도 중립화안”이 러일전쟁에서 막대한 희생을 치르며 얻어낸 사실상의 유일한 전리품이었던 남만주가 열강이 공동관할하는 중립지대로 변모될 것을 우려했던 반면, 러시아는 미국과 협력하여 만주를 중립화시킬 경우, 일본의 북진정책의 방향이 만주가 아닌 연해주로 전환

16) Там же. Л.4об.-5. 국민회 회원이 10,000명에 이른다는 현지 한인들의 진술을 고려하지 않는다 면, 프리아무르주의 지회 소속 회원은 약 3,000명 정도이나 이들 대부분은 러시아국적의 한인들이 아니라 미국에서 거주했거나 최근에 노령지역으로 이주한 연해주의 울진지방 수찬현 거주 무국적의 한인들이라는 것이다.

17) 최덕규, “간도문제와 일본의 한국병합(1909-1910)”, 『한국사연구』 145호(2009.6), pp.180-182.

될 것을 우려하였다. 아울러 동청철도가 중립화될 경우, 러시아본토와 연해주를 연결하는 주간선 노선의 상실을 우려하여 미국보다는 일본의 접근을 받아들이게 되었다. 따라서 청국이 미국의 대청차관을 통해 만주의 모든 철도를 매입하고 이를 순수하게 상업적으로만 이용하자는 녹스의 계획은 만주에서 기득권을 보호하려는 러일 양국의 이해를 일치시키는 결과를 초래하고 말았다. 1910년 1월 21일 러일 양국은 각자 ‘만주철도중립화안’에 대해 거부 의사를 표명한 각서를 미국에 전달하면서 제2차러일협약 체결의 토대를 마련하기에 이르렀던 것이다.¹⁸⁾ 러시아가 녹스의 제안을 거부했다는 소식은 이미 1910년 1월 17일자 뉴욕타임즈지를 통해 보도된 바 있었다.¹⁹⁾ 이에 1910년 2월 9일 연방공화제를 표방한 국민회가 보황적 계열의 대동보국회와 통합을 이루어낸 것²⁰⁾도 바로 이러한 긴박한 국제정세의 변화와 맞물려 있었다.

포드스타빈이 극단적 반일투쟁단체로 명명한 대동보국회(Great National Preservation Union)는 고종황제의 강제퇴위 이후 샌프란시스코에서 발족되었고 1907년 7월 24일 정미7조약에 서명한 한국각료들을 암살하려는 계획을 수립한 보황적 단체였다. 상하이 주재 러시아상무관 고이에르가 작성한 스티븐스의 암살과 관련한 해외한인정치단체에 대한 보고서(1908.4.21)에 따르면, 이 단체는 한국에서 일본을 축출한다는 정치적 슬로건 하에 구성된 대부분은 구한국군출신 장교들이며 황실에 충성을 다하고 조국의 독립과 자유를 위해 극단적으로 투쟁할 준비가 되어 있는 사람들을 중심으로 결성되었다고 한다. 스티븐스의 암살도 이 단체 회원에게 부여된 사명이었으며 상하이에 거주하고 있는 한국인 23명 모두 이 단체의 회원이었다. 이들은 미국선교사를 초빙하여 기독교의 원리와 일반교과목을 배움으로써 합법성을 갖춘 단체로 위장하고 있었고 상하이 지회장은 바로 현상건(玄尙健)이었다. 1909년 1월 국민회의 전신이었던 공립협회는 대동보국회와 통합에 실패한 바 있었으나, 이제 통합에 성공함으로써 1910년 5월 10일 국민회는 회명을 대한인국민회로 개칭하였고 명실상부한 해외한인 독립운동의 최고기관임을 자임할 수 있게 되었다. 이러한 해외한인 독립운동 단체들의 통합움직임은 고종황제의 적극적인 병합저지 운동의 토대가 되었다.

3. 고종의 러시아 망명계획과 한러공동방첩망 구축안

고종황제의 구체적인 러시아파천계획이 러시아당국에게 알려진 것도 바로 이 무렵이었다. 1910년 6월 중순 전 한국군 대위 현상건이 얼마 전 상하이에 도착한 이갑(李甲)을 대동

18) Телеграмма А.П.Извольского И.Я.Коростоветцу об американском предложении “коммерческой и нейтральной трассировки” железных дорог в Маньчжурии, 21 января 1910 г. Россия и США: Дипломатические Отношения, 1999. С. 155-156.

19) The New York Times, 1910.1.17. “Russia Against Knox Plan”.

20) Записка корейскому вопросу профессора Г.В.Подставина, Государственный архив Иркутской области фонд 600. Описание 1. Дело 886. Лист 4.

하고 상하이주재 러시아 상무관 고이에르(Агент Министерства Финансов в Шанхае Гой е р)고이에르를 방문하여 고종의 러시아망명 계획을 통보한 것이 그 계기가 되었다. 1910년 6월 22일 고이에르가 이갑과 면담한 후 주일러시아대사 말레프스키-말레비치 (Малевский -Малевич Н.А.)에게 보낸 보고서는 한일강제병합이 임박한 시점에서 이루어진 고종의 외교활동 및 러시아파천계획 그리고 러시아 극동군과 한국의병과의 한러 연합작전 계획이 자세히 보고되어 있어 자료적 가치가 매우 크다.²¹⁾ 보고서에서는 항일독립운동에서 이갑의 위상과 그와 고종의 관계를 다음과 같이 서술하고 있었다. 이갑은 한국북부의 3도(평안도, 함경도, 황해도)에서 西北學會라 불리는 규모가 큰 교육단체를 창립한 인물로서 이갑이 설립한 교육과정을 이수한 젊은이들은 거의 5만 명에 이른다. 그 자신이 북부지방 출신으로 그곳에서 상당한 영향력을 발휘하고 있다. 잘 알려져 있다시피, 한국에서 오랫동안 지속되었던 관례에 따르면, 북부지역 출신들은 매우 보잘 것 없는 직급 이상의 요직에 임명될 수 없었는데 이러한 제한은 고종이 이갑의 청원을 받아들인 결과 폐지되었다. 그 후 그는 한국북부의 전역에서 거의 국가영웅에 버금갈 정도로 명성이 높아졌다. 1909년 11월 그는 일본관헌에 의해 이토의 암살을 모의한 비밀조직의 일원으로 지목되어 체포된 바 있었다. 그를 감옥에 가둔지 3개월이 지났음에도 불구하고 그에 대한 혐의를 찾지 못했기 때문에 일본관헌은 그를 석방했다. 그러나 일본은 이갑에게 처벌을 면해주고 자유의 몸으로 풀어주는 대신 서북학회를 일본에게 우호적인 청년연맹으로 변모시키든가 아니면 이 학회의 성향을 완전히 바꾸기 어려울 경우, 그의 개인적인 영향력이 매우 강한 한국북부의 3도에 친일성향의 새로운 단체를 설립하라는 조건을 제시했다. 이갑은 일본당국이 요구하는 바를 들어주기로 약속했으나 그 후 얼마간 서울에 머물다가 단체를 설립한다는 명목으로 북부로 향할한 후 국경을 넘어 도주했다는 것이다.²²⁾

이어 고이에르는 이갑으로부터 전해들은 고종의 망명계획을 다음과 같이 보고하고 있다. 그는 서울에 머물고 있었던 4월과 5월에 고종과 수 차례 만났고 나에게 매우 믿을만한 소식을 비밀리에 전달했다. 즉 고종은 도주하기로 결심을 굳혔으며 조만간 그 희망을 실천에 옮기려는 준비를 하고 있다는 것이다. 이제까지 고종이 망명계획을 미룰 수밖에 없었던 사유는 두 가지인데 첫째, 해외체재 자금마련을 위해 가명으로 예치된 자신의 비자금을 인출하려 노력해왔고 둘째, 일본에 불모로 가있는 영친왕의 모친이자 왕비역할을 하던 엄비(嚴妃)가 아들의 신변안전을 이유로 이를 만류했던 복잡한 가족문제 때문이었다.

그러나 고종이 러시아로의 망명계획을 실행하기로 결심하게 된 것은 자금과 가족문제에 더 이상 연연하지 않기로 마음먹었기 때문이었다. 보고서에 따르면, “이제 상황이 일변하였다. 고종은 자기재산의 전부가 아닌 일부만을 되찾더라도 자신의 생활은 보장될 것으로

21) Донесение Агента Министерства Финансов в Шахае Гой ера послу в Токио от 9 июня 1910 г., „Корея глазами Россиянин(1895-1945). М., 2008. С.119-223.

22) Там же.

믿게 되었는데, 비밀조직을 구성하고 있는 해외거주 한인들이 있고 그 조직의 수장이 고종이기 때문에 이들 모두가 그의 망명생활 비용을 지원할 것으로 판단했다”는 것이다. 가족 상황 역시 고종과 엄비간의 불화가 깊어져 고종은 아들의 목숨이 위태로울 것을 두려워한 엄비가 일본의 영향하에 있다고 판단하여, 최근 들어 망명계획에 대해 엄비에게 비밀에 부쳐두고 있었다. 따라서 황제는 망명의 실행 역시 엄비에게 알리지 않고 단독으로 감행한다는 것이었다.

그렇다면 고종이 일제의 감시를 따돌리고 궁궐을 빠져나가 러시아 연해주로 파천할 수 있다고 판단한 근거는 무엇인가? 이는 고이에르가 매우 흥미로우면서도 신뢰할 만한 정보라고 평가한 궁내외 근황세력의 지원에 대한 고종의 확신 때문이었다. 1910년 5월 20일부터 임시내각총리대신 사무를 맡게 된 박제순(朴齊純)이 내부에서 그 계획을 돕고 있는 주요인물이며 고종은 이범윤(李範允)과 함경도지역 의병의 도움을 받을 수 있는 북쪽으로 혼자 도망쳐 궁극적으로 러시아국경을 넘어 안전한 블라디보스톡에 머물고자 한다는 것이었다. 만일 최악의 경우, 러시아가 고종을 정치범으로 취급하더라도 그는 러시아에 대한 믿음을 가지고 있기 때문에, 마치 러시아의 정치범들이 일본에서 도피처를 찾듯이, 그 역시 러시아 영토에서 도피처를 찾을 수 있다고 판단하고 있다는 것이다. 더욱이 고종의 파천계획과 관련하여 적절한 대책을 마련하기 위해 이미 몇몇의 사람들이 블라디보스톡으로 미리 출발해 있었다.²³⁾

또한 고종은 특별히 이갑에게 두 가지의 임무를 부여하였는데 그 하나는 러시아 황제 니콜라이Ⅱ세(Николай II)에게 보내는 고종의 도장이 찍힌 친필서신을 전달하는 것이었고 다른 하나는 노령지역 한인들이 한반도 북부의 일본인들의 동향을 감시하는 일에 있어 연해주 경비군 참모부에 협력하는 문제였다. 고종의 친서는 러시아와 일본이 각각 몽골과 한국을 자국의 세력권으로 교환하기로 합의한 제2차러일협약을 체결하지 말아줄 것을 짜르에게 요청하는 내용이 그 핵심이었다.²⁴⁾

고종은 일본이 만주와 한국문제에 개입해 온 미국을 축출하기 위하여 1910년 초부터 적극적인 대리접근을 통해 성사직전에 이른 제2차러일협약의 체결을 무산시켜줄 것을 짜르에게 다시 한번 간곡히 요청하고 있었다. 고종황제의 친서의 내용은 다음과 같았다: “황제 폐하 한국의 슬프고 불행한 상황으로 인해 폐하께 다시 한번 폐를 끼칩니다. 하지만 백성들의 가여운 상황에 너무나 애통하여 입을 다물고 있을 수만은 없습니다. 일본은 한국을 그들의 보호를 받는 국가, 나아가 점령한 식민지가 아니라 아예 노예국가로 취급하고 있는 바, 나와 나의 백성들은 변함없이 폐하께 기대어, 폐하께서 우리를 원수의 명으로부터 해방시켜줄 날이 올 것이란 기대를 갖고 살아가고 있습니다. 이제 한국을 통째로 먹어 삼킬 시간이 가까워지고 있습니다. 일본은 얼마 되지 않는 친일배신자들을 매수하여 한국의 대

23) Там же.

24) Там же.

일병합을 청원하도록 부추기고 있습니다. 그러나 일본은 지금까지 이러한 결정을 내리지 못하고 있는데 전국적인 소요를 두려워하고 있기 때문입니다. 최근 유포되고 있는 소문에 따르면, 러시아와 일본 사이에 협정이 체결될 예정이고 그 조항의 하나가 한일병합에 대해 러시아가 동의한다는 것입니다. 나는 이 소문을 믿을 수 없으며 폐하께서 한국의 보호자라는 생각을 떨쳐버릴 수 없으며 불쌍하게 노예가 된 백성들에 대한 연민 때문에 폐하께서 이들을 절멸시키는데 동의하지 않을 것이라 믿고 있습니다. 일본인들은 이 소문이 한국에 어떤 영향을 끼치고 외국인들에게 어떤 인상을 남길 것 인지를 확인해볼 요량으로 이를 퍼뜨리고 있다고 생각합니다. 최근 내 마음은 너무나 많은 상처를 입고 있는 바, 러시아도 그러한 조치를 취할 수도 있다는 생각에서 나의 백성과 나라를 위한 마지막 기도로써 폐하께 간절히 부탁드립니다. 이 편지를 나의 심복인 이갑에게 건네주어 귀국정부의 대표들을 통해 폐하께 전달하도록 지시하였습니다. 폐하의 통치가 오래도록 행운이 깃들도록 기도 드립니다.”

그러나 이갑이 고이에르에게 고종황제의 친서를 러시아황제 혹은 외무상에게 전달할 것을 부탁하였으나 고이에르는 이를 거절했다. 고이에르의 판단에 따르면, 고종의 친서가 러일협약 체결을 준비중인 주일러시아대사를 곤경에 빠뜨릴 빌미가 되지 않을까 우려했기 때문이다. 이에 고이에르는 이갑에게 친서를 전달하는 일은 자신의 권한 밖의 일이라 해명하기에 이르렀다. 그러나 이갑은 좌절하지 않았다. 이 문제를 현상건과 논의한 이갑은 블라디보스톡을 거쳐 상트페테르부르크로 가서 고종이 그에게 부여한 임무를 완수하기로 결정했음을 고이에르에게 통보했던 것이다. 이갑이 청도로 출발하여 블라디보스톡을 거쳐 페테르부르크의 러시아 외무성을 방문할 것이라는 고이에르의 보고는 고종이 마지막까지 병합을 저지하고 독립을 지키기 위해 필사의 노력을 다하였음을 반증해 준다.

고종이 이갑에게 부여한 두 번째 임무 역시 이미 상당한 성과를 내고 있었다. 한반도 북부의 일본인들의 동향을 감시하기 위해 러시아의 연해주 군당국과 협력하여 대일첩보 및 방첩망을 구축할 것을 지시 받은 이갑은 블라디보스톡에 머물면서 이를 준비하고자 하였다. 그는 자신이 설립한 서북학회의 회원들을 통해 한국과 만주의 남동부에 있는 일본인들의 일거수 일투족을 예리하게 감시할 수 있는 조직을 구축할 계획이었다. 이에 그는 중국에 있는 이범윤 및 여타 의병장들과 긴밀한 연락망을 유지하여 러시아와 국경을 접한 한국북부 전역에서 반일봉기를 조직함으로써 한러국경으로 진출하려는 일본에 타격을 가할 구체적인 계획을 고이에르에게 설명하고 후자의 지원을 요청했다.

고이에르의 보고서에 따르면, 이갑은 돈을 위해 일하는 것이 아니라 조국을 구하려는 애국심과 일본에 대한 강렬한 적개심을 가슴에 품고 일하는 사람이며, 일본에서 고등군사교육을 받은 자로서 일본어를 모국어처럼 구사하며, 매우 능력 있는 사람이라는 인상을 심어주고 있다는 것이다. 따라서 이갑의 애국심과 러시아군에게 자신이 힘을 보태려 한다는 그의 말에 감명 받은 고이에르는 연해주 군당국자들과 이갑을 연결시키고자 하였다. 그는 군

사적인 측면에서 한국을 감시하는 임무는 러시아 프리아무르주 군관구 참모부와 관련이 있다고 판단하고 이들을 연결시키기 위해 주일러시아대사관의 무관에게 이 계획을 전달해 줄 것을 요청하기에 이르렀다.²⁵⁾ 따라서 1910년 중반부터 러시아 극동지역의 방위를 위해 연해주 이주한인들을 적극 활용하려는 계획이 러시아 육군성을 중심으로 본격적으로 논의되기 시작했다.

1910년 5월 24일 러시아 육군상 수호플리노프(В.А.Сухомлинов)는 각료회의 의장 스톨리핀(П.А.Столыпин)에게 보낸 편지에서 한국의 상황을 극동의 방위에 활용하자는 의견서를 제출했다.²⁶⁾ 육군상의 견해에 따르면, 일본의 대륙팽창 계획과 일본과의 충돌에 대비하기 위해서는 모든 수용 가능한 수단들을 강구해야 하는데 그 가운데 가장 현실성이 있는 것이 한국의 현 상황을 이용하는 것이었다. 이는 평시에 일본의 힘과 자원을 의병투쟁에 쏟게 하고, 러시아의 지휘를 받는 한인정보망은 일본의 대한군사전략에 대해 고급 정보를 제공하고 러시아의 영토에서 대일방첩활동에도 유용하기 때문이었다. 또한 전시에 일본군의 후방인 한국에서 대규모 봉기를 일으킴으로써 한국의 전략적 유용성은 명약관화하다는 것이었다. 이에 육군상은 이 문제를 소홀히 할 경우, 국가방위 목적으로 한국을 이용할 가능성이 영구히 사라질 수 있음을 지적하고 우수리강 이남지역에 정착해 있는 한인들에 대한 지방당국의 탄압을 중지하고 한국에서 러시아의 위상을 강화시킬 방안 마련을 촉구하고 나섰다.

이에 수호플리노프는 스톨리핀으로 하여금 프리아무르주 총독에게 극동의 방위에 한국을 이용하기 위한 바람직한 여건조성을 훈령하도록 요청하고 나섰다. 바람직한 여건이란 러시아 정부당국이 우수리남부지역에 정착한 한인들의 요구와 이해 부합되는 관심 표명으로 표출될 것인데 이 지역에 한인이주민들에게 영향력 있고 러시아에 충성스러운 정치이민자가 적지 않기 때문이었다.²⁷⁾ 이에 육군상은 자신의 논거를 강화하기 위해 극동지역의 정보장교로 활약하고 있던 엔켈 중령(О.К.Энкель)의 보고서를 첨부하였다.²⁸⁾

수호플리노프가 “결론이 매우 논리정연하다”고 평가한 엔켈 중령의 보고서는 러시아의 첩보임무에 도움을 준 한인들과 지난 2년간 접촉한 결과를 전시와 평시로 구분하여 그 역할을 분석하고 있었다. 연해주 이주한인들의 항일운동을 분석한 이 보고서는 한국이 “정치적 독립을 상실한 것이 이들에게 애국심과 민족자의식을 고무시켰고 이토의 암살이 사기를 충천시킴으로써 일본으로부터 조국의 해방에 대한 기대를 갖게 했다”고 평가했다. 이에 엔켈중령은 미국이 이미 한국의 반일운동을 자국의 동아시아정책에 적극 활용하고 있음을 고려하여 러시아 역시 노령지역 한인에 대한 지원책 마련을 서둘러야 한다는 견해를 피력

25) Там же.

26) РГИА. Ф.1276. Оп.6.1910г. Д. 514. Л.1-2: Секретное письмо Сухомлинова Столыпину, 11 мая 1910 г.

27) Там же.

28) Там же. Л.3-6: Копия докладной записки подполковника Энкеля, полученной в Главном Управлении Генерального Штаба

했다. 그가 미국 샌프란시스코에 중앙위원회를 두고 있는 “국민회”가 항일운동의 주도권을 쥐고 막대한 자금을 바탕으로 미국, 하와이, 중국 한국에서 신문을 발행한다고 지적한 것도 한국에 대한 관심을 증대시키려는 교육책이었다.

이에 앵겔은 블라디보스톡에 체류중인 샌프란시스코 한인신문 편집인 정재관과 이상설을 면담하면서, 한인들의 현재 희망과 분위기에 대한 다음과 같이 보고하였다. “러일전쟁 후 미국정부는 한국과 만주 그리고 중국 일부의 통상시장이 일본에 의해 점취될 것으로 판단하고 가능한 한 이를 어렵게 만들고 한국을 결정적으로 병합하는 것을 용납하지 않으려고 노력하고 있다”고 전제한 후, 미국거주 한인들을 따뜻하게 환대하고 약 200명의 선교사를 한국에 파견하여 선교라는 명목하에 의병활동을 지원하고 있음을 지적했다. 아울러 미국은 한국인들 사이에 매우 인기가 높고 미국의 선교사를 적극적으로 맞아들여 장로교로 개종하고 있다고 보고하였던 것이다. 따라서 병합위기에 직면한 한국의 반일분위기를 자국의 동아시아정책에 활용하려는 미러양국의 경쟁은 오히려 연해주를 항일운동과 고종의 파천의 거점으로 활용할 수 있는 가능성을 고조시키고 있었다.

이에 앵겔은 연해주 한인들의 사회경제적 여건을 개선시킴으로써 한인이주자 및 정치망명자들을 극동의 방위에 활용하려는 계획에 박차를 가할 것을 촉구했다. 왜냐하면 미국의 선교사들이 블라디보스톡의 한인촌에 한국인 성직자 최관홍을 파견하여 선교활동을 벌이고 있는 바, 새롭게 개종한 한인들은 모두 국민회 회원이 되었고 그 지부는 블라디보스톡 이외에 라즈돌린, 니콜스코-우수리스크, 하바롭스크, 하르빈 및 수찬에 개설되었기 때문이었다. 앵겔은 이러한 미국의 장로교 선교사들의 선교활동을 정치적으로 해석하여 그것이 연해주한인사회에 끼친 폐단을 강조하고 나섰다. 미국의 선교사들은 한인들에게 학교를 지어주고 성직자를 파견하여 자선단체를 조직하고 있으나, 젊은이들에게 러시아를 혐오하도록 가르칠 뿐만 아니라 러시아를 “반야만제국”으로 부르고 나아가 러시아정교를 믿는 한인들을 무시하며 “몽매한 사람”이라 부르기 때문에 노령의 한인들은 이를 수치스럽게 생각한다는 것이다.

더욱이 일본의 통감부 역시 연해주 한인에 대한 영향력을 강화하려는 시도를 노골화함으로써 노령지역은 러,미,일의 각축이 재현되는 한반도의 축소판으로 변모하고 있었다. 1909년 9월 블라디보스톡을 다녀간 조선통감부 외사국장 고마츠(小松綠)은 “만일 러시아에 거주하는 한인들이 일본의 한국보호국화를 인정한다면, 한인들에게 여권 수수료에 대한 특혜를 얻어줄 것이라 공언한 바 있었다. 즉 한인들은 거주권 취득을 위해 5-7루블을 내는 것이 아니라, 일본인과 마찬가지로 75 코페이크를 내도록 하겠다고 말함으로써 한인들의 환심을사려 했다. 또한 블라디보스톡 주재 일본영사관은 한인들에게 학교설립자금을 지원하겠다고 제의해왔고, 일진회는 산하기관인 철도항만노동자 조합에 한인회원을 가입시키기 위한 회원모집 활동을 시작했다. 따라서 해외 항일투쟁의 근거지로 성장하게 될 연해주한인사회를 둘러싼 장로교와 러시아정교신자간의 마찰과 일진회의 개입은 한인사회

의 분열로 귀결될 가능성이 높아졌고 결국 현지의 애국지사들은 한인들을 통합할 수 있는 한인단체설립의 필요성을 절감하기에 이른다.

이에 이상설과 정재관은 앵겔중령에게 한인단체의 정관을 러시아당국이 인준해줌으로써 극동전역에 지부를 개설할 수 있는 권리를 부여해 줄 것을 요청했다. 또한 한인 아동들이 공화주의 사조에 물드는 것을 방지하기 위해 한국인 교사가 가르치는 학교의 설립을 허가해 줄 것과 모국어로 예배를 볼 수 있도록 한인 러시아정교 성직자를 파견해 줄 것을 요청했다. 그리고 이상설과 정재관은 보다 많은 러시아정교 선교사들을 한국에 파견해줄 것을 부탁하면서 모국에서 정교회를 믿는 한국인과 연해주에서 동일한 종교를 가진 한인들이 교류한다면 일본의 정책에 대한 보다 구체적인 정보를 얻을 수 있을 뿐만 아니라 일본과 전쟁이 발생할 경우, 이들이 한국에서 러시아에 유리한 정보를 제공할 수 있다고 설득했다. 아울러 상당수의 한인들이 살고 있는 수찬지역에 군사학교를 설립하여 약 1만명 정도의 의용군을 준비시킴으로써 전시에 이들을 유용하게 활용할 수 있음을 앵겔 중령에게 주시시켰다. 요컨대 이상설과 정재관은 향후 연해주로 망명해 올 고종을 수장으로 하는 한인독립운동단체를 조직하고 러시아당국과 협력을 도모함으로써 안전한 항일독립투쟁의 해외거점을 구축하고자 하였다.

따라서 앵겔은 한인들의 참여 없이는 대일방첩망 구축이 불가능하다고 판단하고 연해주 한인들의 처우개선을 정부당국에 적극 개진하고 나섰다. 그는 러시아에 충성스러운 한인들이 연해주에서 다른 어떤 외지인보다 천대받고 있는 현실을 개탄하면서 그럼에도 불구하고 이들이 전시에는 훌륭한 지휘관 휘하에서 연해주와 국외에서 훌륭한 첩보원으로 활약할 것임을 확신하고 있었다. 육군참모본부에 보내는 보고서에서 그는 한인들을 통합하고 러시아편으로 끌어들이어 상술한 과제를 완수하기 위해 무엇보다 1) 국민회의 정관을 승인하고 2) 학교를 지어주고 한국인 선생과 성직자를 파견할 것을 건의하였다. 나아가 이러한 한인단체 설립을 허락해 줄 경우, 이 단체가 반일 음모를 꾸며 한국에 의병들을 파견함으로써 결국 러시아를 바람직하지 않은 외교적 곤경에 빠뜨릴 수 있다는 우려는 근거 없다고 결론지었다.

이와 같이 고종이 이갑에게 지시한 일본에 대한 한러공동방첩망 구축안은 러시아 육군성의 커다란 호응을 받음으로써 연해주를 거점으로 항일독립운동을 전개하고자한 고종과 근황세력의 계획은 성공 가능성이 높아 보였다. 이제 극동지역 정보장교 차원의 보고서가 중앙정부에서 어떻게 수렴되는지가 고종의 망명계획의 실행여부를 가늠하는 척도가 되었다.

4. 고종의 대러접근정책의 좌절과 한일강제병합

1910년 6월 21일 러시아 각료회의 의장(Председатель Совета Министров) 스톨리핀은 프리아무르주 총독 운테르베르게르 (П.Ф.Унтербергер)에게 육군상의 제안을 전달하

면서 러시아정부 차원에서 극동방위를 위해 한인들을 이용하는 문제가 본격 논의되기 시작했다.²⁹⁾ 스톨리핀은 우수리남부지역의 한인들을 방위에 이용하기 위해서는 지방당국 차원에서 이들의 요구사항을 적극 수용할 필요가 있음을 주장한 육군상의 건의에 대해 운테르베르게르의 의견을 구했다. 운테르베르게르에게 보낸 기밀서신에서 스톨리핀은 한인이 주민들 가운데 매우 영향력 있고 러시아에 충성스러운 정치적 망명자들이 많다는 점은 인정했지만, 육군상의 제안은 과거에 비해 시의성이 떨어진다는 점을 지적하면서 다음의 사항에 대해 총독에게 주의를 환기시켰다. 첫째, 러시아와 일본은 새로운 관계설정을 앞두고 있다는 점이다. 제2차러일협약 체결을 앞둔 시점에서 우호적인 대일관계를 해치지 않으면서 연해주 한인문제를 신중하게 처리할 수 있는 방안을 고려해야 한다는 것이다. 즉 한인 문제는 우호적인 러일관계 수립의 종속변수라는 것이다. 둘째, 극동지역으로의 황인종 유입을 금지시키기로 한 극동이주위원회의 결정을 고려해야 한다는 점이다. 우수리 남부지역의 한인들의 처우개선과 권리보장은 극동지역으로 한인들을 대규모로 유인할 수 있기 때문이었다. 따라서 노령지역에 황인종의 유입을 방지한다는 극동이주위원회의(Комитет по заселению Дальнего Востока) 결정(1910년 4월 22일)이 제1의 국가적 과제임을 감안한 한인이주민 정책이 필요하다는 것이다.³⁰⁾ 결국 스톨리핀이 제시한 연해주 한인문제 해결의 가이드라인은 극동지역의 방위를 위한 한인들의 활용계획과 사실상 양립 불가능한 것으로서 극동현지와 중앙정부간의 한인문제에 대한 현격한 인식 차를 드러내고 있었다.

이는 외무상의 의견서에서 재확인된다. 6월 22일 육군상이 극동 방위의 목적에서 한국을 활용하기 위한 토대구축의 필요성에 대한 의견을 요청해오자, 외무상 이즈볼스키 (А.И. Извольский)는 그의 회신공문에서(1910년 6월 30일)이를 정면비판하고 나섰다.³¹⁾ 한국 문제에 대한 그의 기본시각은 불개입정책이었다. 결국 러일전쟁의 원인도 한국문제를 둘러싼 양국간의 오해에서 비롯되었다고 판단한 그는 포츠머스 강화회담에서도 일본전권 대표는 한국 문제에 대해 일체의 타협도 거부했다는 점을 부각시켰다. 따라서 전쟁 후 5년간 러시아가 일본정부와 신뢰관계를 수립할 수 있었다면, 이는 전적으로 한국에 대한 일본의 정책에 일체의 간섭을 하지 않았기 때문이라는 것이 그의 일관된 신념이었다.³²⁾ 이러한 그의 신념은 일본과의 전쟁재발을 막기 위한 해법은 극동의 군사력강화가 아니라 대일접근을 통한 외교적 타협에 있다는 그의 실용주의적 외교관에 근거하고 있었다. 이에 1909년 11월 미국의 녹스(P.C.Knox) 국무장관이 일본의 만주독점정책에 반대하여 '만주철도중립화안'을 제안했을 당시, 그는 미국과 공조하여 일본의 만주침략을 저지하기 보다는 오히려

29) РГИА. Ф.1276. Оп.6.1910г. Д. 514. Л.14-14об.: Секретное письмо П.Стольщина Унтербергеру, 8 и юня 1910 г.

30) Там же.

31) Там же. Л.17-18.: Копия Секретного письма Министра Иностранных Дел от 17-го июня 1910 г. На имя Военного Министра.

32) Там же.

일본과 공동으로 녹스의 계획에 반대했던 것이다. 러일간에 전쟁이 재발하면 미국이 러시아를 도우려 만주에 군대를 파병하지 않을 것이라 확신한 이즈볼스키의 대일접근 외교는 마침내 러시아의 동아시아정책은 일본과 공동보조를 취하는데 있다고 천명한 니콜라이 II 세의 지지를 이끌어낼 수 있었다. 그 결과 러시아는 일본과의 협약체결을 통해 태평양 연안의 연해주에 대한 영토보전과 북만주에 대한 러시아의 우월권을 일본으로부터 승인 받을 수 있었던 것이다.

이에 외무상은 향후 극동지역의 안정은 일본과의 우호관계 유지에 달려있다고 판단하고 일본의 아킬레스건인 한국문제를 건드리지 않는 것이 바람직하다는 견해를 피력했다. 그는 일본에게 민감한 한국문제를 건드리는 것이 한국문제에 무관심해서 얻는 이익과는 비교할 수 없다고 주장하고 한국에서 소요사태를 조장하고 이를 이용하는 것에 대해 회의적인 입장을 표명했던 것이다.³³⁾ 아울러 러시아가 한국에 요원들을 파견하여 폭동을 지원하거나 노령지역에 이러한 소요사태를 원격 지원하는 거점을 만드는 것에 대해 반대입장을 분명히 했다. 이는 일본과의 협약정신을 훼손하고 동아시아정책 방향과도 어긋난다는 것이 그 논거였다. 이에 이즈볼스키는 국가방위의 측면에서 한인들에게 특혜를 주어 우수리강 남부지역에 정착시키는 계획과 노령지역으로 한국인들의 유입을 저지하고 한려 국경지역에 러시아인들 만을 정착시키는 계획 가운데 어느 것이 더 나은지 판단하는 일은 육군성의 몫이라고 결론지었다.³⁴⁾

이는 향후 동아시아에서 제2차 러일전쟁은 없다는 외무성의 인식과 러일전쟁의 패전을 설욕하기 위해 제2차 러일전쟁 가능성을 열어두고 있던 육군성의 인식간의 대립인 바, 러일전쟁(1904-5)이 한반도의 운명을 결정하였다면, 외무성과 육군성의 의견대립은 항일독립운동의 거점으로 연해주를 선택한 고종의 구상의 성패와 맞물려 있었다. 연해주 한인들을 극동의 방위에 활용하려는 문제에 대해 이즈볼스키가 강력한 반대입장을 표명하자 육군상은 한발 물러서기는 했지만 결코 이를 포기하는 입장은 아니었다. 1910년 7월 4일 육군상은 러시아 각료회의 의장 스톨리핀에게 보낸 기밀서신에서 한인이주민들을 극동방위를 위해 활용하자는 계획에 전적으로 찬성하지는 않지만, 남부우수리지역에 거주하는 한인에 대해 전폭적으로 지원해야만 하고 모국에 대한 그들의 충성심을 러시아로 돌리게 하는 것은 일본과 새로운 무력충돌이 발생할 경우, 러시아에 매우 유리하다는 신념에는 변화가 없다고 주장했다.³⁵⁾ 왜냐하면 이러한 조치들은 한국에서 봉기를 조종하는 거점을 구축하려는 것과 거리가 멀기 때문에 그것이 러일협약을 훼손시킬 수 있다고는 보지 않는다는 것이 그 논거였다.³⁶⁾ 요컨대 육군상은 외무상과 타협하고자 했다. 연해주 한인들을 러시아의

33) Там же.17об.

34) Там же.18.

35) Там же. 16-16об. : Секретное письмо Сухомлинова Столышину, 21 июня 1910 г.

36) Там же.

국익에 부합되는 범위에서 지원할 뿐이지, 일본과 외교적 마찰을 유발할 수 있는 항일독립 운동은 지원하지 않겠다는 것이었다. 이는 고종의 구상과는 거리가 먼 것이었다.

연해주를 합법적인 항일독립운동의 거점으로 삼기 위한 방편으로 러시아군과 협력하여 대일방첩망과 첩보망을 구축하고, 그 반대급부로 한인사회에 대한 러시아 당국의 지원과 권리보장을 획득하려 한 고종과 근황세력의 계획은 프리아무르주 총독 운테르베르게르에 의해 막다른 골목으로 몰려가고 있었다. 1910년 7월 16일 프리아무르주 총독은 스톨리핀에게 보낸 기밀서신에서 육군참모본부의 앵겔의 보고서에서 제안된 조치들은 극동이주위원회에서 결정된 황인종의 노령지역 유입방지를 위한 프로그램 이행에 방해가 되지 않도록 각별히 신중을 기해야만 한다고 보고했던 것이다.³⁷⁾

그는 다음의 논거를 제시하여 연해주 한인문제에 대한 육군성의 입장을 조목조목 반박했다. 첫째, 지방당국이 한인들을 억압하는 문제는 러시아국적을 취득한 한인에게는 해당 사항이 아니라 최근 급속도로 이주해오고 있는 러시아국적이 없는 한인에 해당되는 바, 모든 정부기관에서는 이들의 유입에 대해 우려를 표명하고 이를 억제할 대책마련의 필요성을 인정하고 있다는 것이다. 이에 한인들에 대한 지방당국의 억압은 없었으며 국익의 보호 차원에서 한인들의 유입을 막기 위한 대책들이 마련되었을 뿐이라고 해명하였다.

둘째, 프리아무르주 거주 한인들에게 민족단체조직을 허용하는 문제 역시 극히 위험한 발상이라는 것이다. “그 위험성은 러시아국적의 한인들이 러시아국적을 소지하지 않은 한국인조직과 긴밀한 연계를 가질 경우, 그들에 대한 감시는 경찰력이 부족한 상황에서 환상에 불과하며 한국어를 잘 아는 러시아인이 없다는 점에서 더욱 그렇다. 이런 상황에서 제안된 한국민족단체에 러시아에 해로운 불순분자가 침투하여 이 단체의 활동을 이용하여 우리에게 해를 끼치고, 특히 러시아의 적성국가가 이 단체에 관심을 가질 경우, 이를 제지하지 못할뿐만 아니라 엄청난 경비를 지출하는 사태가 도래하고 말 것”이라고 단언하였다.

이러한 그의 입장은 사회단체에 대한 감시체제 구축의 어려움과 더불어, 경제적으로도 한인민족단체의 수립은 러시아국익과 상충된다는 믿음에서 비롯되었다. 그는 대한제국에서 고위직을 역임하고 연해주로 이주한 정치이민자들의 진정성은 인정되지만, 이들이 설립하고자 하는 민족단체의 물질적인 토대는 매우 취약하다는 점에 주목했다. 즉 그들은 한인들을 러시아에 충성스러운 하나의 단체로 통합한다는 사상적인 목적을 추구하고 있으나, 정치이민자들이 러시아국적이 없고 황인종에 대한 이주제한 프로그램이 가동되는 상황에서 현지에 정착하는 과정은 비합법적으로 토지를 획득하는 방법밖에 없다는 것이다. 이는 궁극적으로 한인민족단체 구성원들의 경제적 이해와 러시아 국익이 불가피하게 충돌할 수밖에 없는 상황을 초래한다는 것이다. 따라서 운테르베르게르는 한인민족단체가 설립되면 “러시아는 개별적인 한인들 보다 조직을 갖춘 한인대중과 부딪혀야 할 더 어려운 상황에 직면하게 될 것”임을 경고했다.

37) Там же. 20-23об. : Секретное письмо Унтербергера Стольшину, 3 июля 1910 г.

마지막으로 프리아무르주 총독은 노령지역 한인들의 러시아에 대한 충성심에 대해 의문을 제기함으로써 연해주한인에 대한 지원과 권리보장에 관한 문제에 비판적인 의견을 제시했다. 그는 이상설과 전재관 같이 한러관계의 의미를 중시하여 앵겔 증령을 돕는 사람들도 있지만 심지어 러시아국적을 취득한 한인들도 러시아군대에 대한 협력을 거부한 사례가 있었음을 지적했다. 러일전쟁이 시작된 1904년 남부우수리지역에 거주한 러시아국적의 한인들이 러시아의 군사적 필요에 따른 짐마차 수송의 의무를 거부했고 이에 동조한 자들이 증가되어 결국 계엄령이 선포된 지역에 적용되는 규정에 근거하여 특별의무규정을 반포할 수 밖에 없었던 사례를 보고했다. 따라서 프리아무르지역 한인들에게 선생과 성직자가 딸린 학교를 제공하는 문제 역시 상술한 맥락에서 운테르베르게르에게는 결코 수용할 수 없는 사안이었다. 그는 러시아국적을 취득하지 않은 한인이주민들을 위해 러시아교회와 학교를 짓는 것은 러시아화가 시급한 러시아국적 한인에게 오히려 고유한 민족적 관습을 답습하고 강화시킬 고리에 불과한 것으로 인식하고 있기 때문이었다.³⁸⁾ 프리아무르주 총독의 이 같은 한인관은 인종주의적 편견과 황인종의 유입방지 대책을 관장하고 있던 극동이주위원회 의장으로서의 입장을 반영하고 있었지만, 해외항일독립운동의 본령으로서 연해주의 의미를 퇴색케 한 결정적인 계기가 되었다. 그리고 운테르베르게르의 이러한 입장은 국민회에 대한 대대적인 탄압정책으로 이어졌다.

1910년 7월 4일 러시아와 일본간의 제2차협약이 체결된 직후인 7월 16일 연해주군무지사는 지방관들에게 보내는 회람공문에서 국민회를 발본색원할 것을 지시하기에 이르렀다. 군무지사는 국민회를 러시아의 국체를 위협할 수 있는 불법비밀조직으로 간주하고 회원들이 지속적으로 증가하는 것을 차단하기 위해 연해주에서 이 단체를 축출할 것을 결정하였다. 회람문에 따르면, 국민회의 폐해는 첫째, 연해주에서 현지 한인들에게 선전활동을 하고 있는 국민회는 여기에 가담한 한인들에게 장로교로의 개종을 유도하고 있으며 둘째, 이 단체는 미국 샌프란시스코에서 발족하여 핵심간부는 미국의 공화주의적 정서 속에서 교육받고 성장함으로써 모든 기독교인들은 누구에게라도 복종할 수 없고 해서도 안되며 특히 고위당국 및 정부의 관리에게 복종해서는 안된다고 가르치고 있기 때문에 러시아의 국체에 위협이 된다는 것이었다. 이에 군무지사는 상당수의 한인들은 러시아에 우호적인 반면 국민회에 적대적이기 때문에, 이들을 활용하면 국민회 회원들을 색출하는데 도움이 될 것임 통보했다.³⁹⁾

더욱이 1910년 8월 15일 스톨리핀은 상술한 운테르베르게르의 보고서를 육군상에게 전달하면서 자신은 전자의 의견에 동의한다는 입장을 전달했다. 그리고 운테르베르게르의 의견과 외무상의 견해를 비교해 보라고 충고했다.⁴⁰⁾ 주지하다시피 이들 양자의 견해는 연

38) Там же.

39) Циркуляр военного губернатора Приморской области о деятельности общества Кун мин хой 3 июля 1910 г. г. Владивосток//Корей цы на Российском Дальнем Востоке, Документы и материалы. Книга 1, Владивосток, 2004. С.245-246.

해주 한인들을 지원하고 권리를 보장함으로써 이들을 러시아극동의 방위에 이용하려는 육군성의 계획에 강력히 반대하는 것이었다. 그 결과 일본에 대항한 한러간의 군사협력을 토대로 연해주를 거점으로 항일독립운동을 전개하고자 한 고종과 근황세력의 계획은 무산될 위기에 처하고 말았다.

한편 노령지역 한인들은 이러한 불리한 상황에도 불구하고 의병세력을 통합하는데 성공함으로써 대규모 항일전을 전개할 준비를 하고 있었다. 1910년 7월 21일 유인석과 이상설을 중심으로 이범윤의 의병세력을 주축으로 한 13道義軍이 편성되었다. 이상설은 十三道義軍都總裁 柳麟錫과 연명으로 7월 28일 상소를 올려 義軍參謀 兼 別通信이었던 전 군수 徐相津으로 하여금 전달케 했다.⁴¹⁾ 이 상소의 내용은 두 가지로 요약할 수 있는데 첫째, 국권회복을 위한 원대한 계획하에 십삼도의군을 편성했음을 밝히고, 부족한 軍備를 보충하기 위해 內帑金에서 軍資金을 보내달라고 간청한 것이다. 둘째, 고종황제로 하여금 노령의 연해주로 파견하여 망명정부를 세워 독립운동을 영도하라고 청한 것이다.⁴²⁾ 그러나 이미 6월 중순 고이에르에게 통보된 고종황제의 러시아 망명은 실현되지 못했다. 이는 7월 4일 러일협약 체결을 앞둔 시점에서 러시아와 일본은 한국문제에 관한 한 정보를 공유하고 있었을 가능성과 관련이 깊다. 예를 들면 앞서 언급한 1910년 6월 22일자 고이에르의 보고서에는 일본의 한국병합 방식에 대해 다음과 같이 언급되어 있다. “...나는 이감으로부터 몇 주전에 일본인들이 현 황제(순종:필자)를 일진회의 한국의 대일병합 청원에 가담하도록 설득을 시도하기로 결정했음을 알게되었다. 이감의 전언에 따르면, 현 황제는 통곡하면서 그러한 조치에 서명하기보다는 오히려 스스로 생을 마감하는 것이 더 낫다고 소리쳤다. 그때부터 일본은 더 이상 그에게 이런 제안을 하지 않았으나 다른 방식을 찾게 될 것이다. 데라우치가 통감에 임명되면서 일본의 주구들로 구성된 새로운 내각이 성립될 것인 바, 이들은 통감이 불러주어 받아쓴 법령에 서명하게 될 것이 분명하다”. 즉 고이에르는 적어도 6월 22일 이전에 7월 23일 한국에 부임하게 될 데라우치가 상술한 방식으로 병합조약을 체결할 것임을 이미 알고 있었던 것이다. 이는 고종의 러시아망명계획에 대해서도 러시아와 일본이 정보를 공유했을 가능성을 방증해주고 있는 것이다.

따라서 1910년 8월 25일 페테르부르크 주재 일본공사 모토노(本野)가 러시아외무성을 방문하여 프리아무르주의 한러접경 지역에 거주하고 있는 한인들이 한일병합을 계기로 봉기할 가능성을 제기하고 이를 저지해 줄 것을 요청한 것도 결코 우연이 아니었다. 모토노는 봉기가 발생할 경우, 현지거주 일본인들의 생명과 재산에 위협을 받을 경우를 대비해서 러시아 당국이 안전을 보장할 적절한 대책마련을 부탁했다.⁴³⁾ 이에 대해 러시아 정부는 8

40) Там же. 24-24об. : Письмо Столыпина Сухомлинову, 2 августа 1910 г.

41) 윤병석, 『增補 李相高傳』, 일조각, 1998.pp. 129-131

42) 위의 책.

43) Пак В.Д. Корей цы в Россий ской Империи, Иркутск, 1994. С.168-169.

월 30일 블라디보스톡의 한인마을을 전격 수색하여 이상설, 이범윤, 유인석 등 한인독립운동지도자 42명을 불법단체 가담혐의로 체포, 구금하는 조치로 화답했다. 러시아 내무성은 한일합방 선포에 즈음하여 계엄령을 선포하고 노령지역의 독립운동가들에 대한 대대적인 검거에 나섰던 것이다.⁴⁴⁾ 그 결과 연해주를 포함한 노령지역은 해외항일운동의 본령으로서의 의미가 퇴색되었고 만주와 상해로 그 중심지가 이전되고 말았다.

5. 맺음말

상술한 바와 같이 한일병합 직전 고종황제는 약 45,000명의 한인이주민들이 정착해 있던 노령지역으로 망명하여 항일독립운동을 지휘하려는 구상을 갖고 있었다. 이에 부응하여 해외한인애국단체들도 세력통합을 통해 전력을 기울여 병합을 저지하고자 하였다. 황제와 애국단체들은 국제정세의 변화에 기민하게 대처하며 연해주에 합법적인 항일투쟁 공간을 확보하고자 하였다.

고종의 러시아망명을 현지에서 돕기위해 연해주에 머물고 있던 이상설, 이범윤을 비롯한 근황세력은 노령지역을 해외항일운동의 거점으로 삼기위해 러시아군부와 대일군사협력체제 구축을 도모하였다. 고종의 지시에 따라 추진된 이 계획은 러시아육군성이 극동의 방위를 위해 한인들을 활용하려는 계획으로 발전되어 러시아각료회의 의장 스톨리핀을 비롯한 정부당국자들에 의해 심도있게 논의되었다. 러시아의 대일 방첩망 및 첩보망 구축에 협력하는 대가로 러시아당국으로부터 합법적인 민족단체 설립을 허가받고 종교, 교육 등의 분야에서 지원을 받음으로써 연해주를 장기적인 항일근거지로 자리매김하고자 한 이 계획은 러시아 외무상 이즈볼스키, 각료회의 의장 스톨리핀, 프리아무르주 총독 운테르베르게르의 강력한 반대에 부딪혀 좌절되고 말았다. 이들은 한인들을 러시아 극동지역의 방위에 이용할 경우, 우호적인 대일관계를 훼손하고 황인종의 노령지역 유입을 방지하는데 곤란함을 야기한다는 명분으로 육군성의 계획에 반대하였다. 그 결과 고종이 펼친 외교적, 군사적 독립운동은 실패하였고 오히려 이상설, 이범윤 등의 독립운동 지도자들이 러시아 당국의 탄압의 대상이 되고 말았다.

노령지역 한인에 대한 러시아 당국의 신뢰와 불신의 이중성은 동아시아 문제에 대한 그들의 자신감과 관련이 깊는데 적극적인 동아시아정책이 추진될 경우, 한인에 대한 신뢰가 고조되었고 소극적이고 수세적일 경우 불신이 심화되어 갔다. 이러한 패턴은 이후의 역사에서도 재현되었다.

44) РГИАДВ. Ф.1.Оп.10.Д.326.Л.74,74об,7979об,72,72об.73: Военное Губернатор Приморского области Главный штаб Приамурского военного округа. 20 октября 1910 г.

日本人満洲移民の生活世界

—その満洲経験 `戦後引揚経験 `そして「残留」経験—

蘭信三(일본 상지대)

目 次

- 1.はじめに；本報告の目的と課題
2. 20世紀前半期の日本人の国際移動と満洲移民
3. 満洲への日本人の移住
4. 満洲での開拓生活
5. 敗戦体験とその後のライフコース：引揚げと「中国残留」と
6. 想起される「満洲」 `想起される「日本」
7. 記憶の語りを聞き取ることの意味

1. はじめに；本報告の目的と課題

まず、2010年度の韓国満洲学会国際学術会議で報告する機会を与您にいただいたことに対して、貴学会に対して、心から感謝申し上げます。貴学会で報告できる名誉に相応しい報告を目指して頑張りたいと思っています。

(1) 報告の目的

本報告は、日本人満洲移民の戦前戦後を通じた生活世界、すなわちその語られる満洲体験と戦後体験に関する考察をおこなうことを目的としています。

(2) 報告内容

本報告の内容は、大体以下のようです。

まず、(1)日本人満洲移民の生活世界の考察です。それは、日本人満洲移民の渡満の経緯とその背景、「満洲」における生活実態の紹介、敗戦後の難民期とその後の集団引揚げ、中国残留についてそれぞれの生活実態を明らかにすることです。ついで、(2)想起される「満洲」と「日本」に関する考察を行います。具体的には、(a)集団引揚者の想起される「満洲」と(b)中国残留者の想起される「日本」です。前者は「8月9日ソ連参戦後の惨劇」と「満洲はよかった」という、悲惨さとノスタルジアの光と陰の意味についての考察です。また、後者は「残留」の経緯と祖国へ訴えられる語

り、とりわけそのなかでクローズアップされる日本人集団引揚げの際に残留した経緯を説明する際に語られる「母の物語」と「家族の物語」の意味についての考察を主に行います。

(3) 研究方法

さて、本報告の研究方法は、いわゆる実証史的な方法と視点ではなく、今日の視点から体験者によって想起され、語られる経験を題材として、それらに関する歴史社会学的な考察を行うことです。

想起され、語られる体験は、個人によって体験されたものですから、いわゆる「客観的」なものではありません。そこには、時代状況や、マスターナ・ラティヴ（社会での主要な語り）、モデル・ストーリー（集団で語られる主要な語り）など様々な規定要因があり、個人の語り体験が「そのまま」語っているとは想定していません。むしろ、語り手の想起された過去の体験への語り、マスターナ・ラティヴやモデル・ストーリーとどのように違っているのか、同じなのかによって、個人の語られた体験を解釈していくことに主眼を置くという方法です。

また、同時に、これは1960年代以降の「新しい歴史」の流れを汲んだ、下からの歴史であり、個人の生きられた歴史（小文字の歴史）から社会の主要な歴史（大文字の歴史）を問い直す作業でもあります。小文字の歴史の歴史には意外なものがあります、例えば、「満洲はよかった」という語りと、そのような語りを長らく抑圧してきたという事実です。これをどう理解するか、これが本報告の主要な課題でもあります。

(4) 本報告の課題

もう少し大上段に構えれば、本報告は以下の3点を課題としています。まず、(1)日本人満洲移民にとっての満洲移住によって生じた彼らの人生をどのように解釈しているのか、つまり満洲移民とは彼らにとってどのような意味があったのか、です。ついで、(2) 日本人満洲移民とは日本社会にとってどのような意味をもっていたのかについての考察です。最後に、(3)日本人満洲移民とは、東アジア社会にとってどのような意味を持つのかについての考察することです。(1)を中心にしながらも、(2)、(3)を視野に入れながら本報告をすすめていきたいと思えます。

2. 20世紀前半期の日本人の国際移動と満洲移民

(1) 20世紀前半期の日本人の国際移民史

現在、日本は200万人以上の外国籍のひとを受け入れているいわば「移民受け入れ国」ですが、つい半世紀ほど前まで主要な移民送出国のひとつでした。1868年の元年組、1882年以降のいわゆるハワイへの移民をはじめとして、アメリカ・カナダという北米への移民、そして1909年以降のブラジル、ペルー、アルゼンチンなど南米への移民等々、相当数の移民を送出していました。これらの移

民は、19世紀末からの日本帝国形成との関連よりも、日本国内の過剰人口問題と世界的な労働力移動の流れの一環で生じた移民でして、これは日本人の国際移民史 (history of Japanese transnational immigration) として捉えることが出来ます。広島、福岡、熊本、佐賀、鹿児島、沖縄など西日本地域から主として輩出されましたが、主として貧農層が中心となりつつも、そのなかには新しい世界へと飛躍を目指す中農層の子弟、新たな理想を目指す都市インテリ層も含まれておりました。北米、南米での新世界では、プランテーション農業の担い手として期待されての移住でしたが、かなりのひとは都市へと移り住み、第二次世界大戦中の「敵性外国人」というレッテルによる迫害がありました。戦後しばらくすると、子弟の高等教育就学によってそれぞれのホスト社会でモデルマイノリティとしてかなりの程度成功していきました。

(2) 20世紀前半期の日本人の植民史

他方で、アジアへの移民がありました。それは(a)ウラジオストックや上海など西欧列強の都市開発・植民地都市開発に伴う移住と、(b)日本帝国形成期の植民地や勢力圏への移住、そしてそれとは直接関係のない(c)フィリピン(ダバオ移民)やインドシナやニューカレドニアなどへの移民がありました。ここでは、(b)を中心に取りあげます。

周知のように、台湾への移民(1895年より植民地化)、樺太への移民(1905年より日本領)、関東州への移民(1907年より租借地化)朝鮮への移民(1910年併合)、南洋への移民(1919年委任統治領化)、そして満洲への移民が日本帝国の形成期・膨張期に生じた移民でした。これらの移民は、過剰人口問題と国際労働力移動とが結びついた移民と言うよりも、帝国の植民地支配に結びついた「植民(settler)」であったことは言うまでもありません。それは、国内の過剰人口問題対策でもありましたが、むしろ植民地での日本の利害を拡げる植民であり、そこでの特権を享受するものであり、さらには植民地に日本的秩序を植え付け、治安維持を担うひともたちでもありました。大まかに言えば、日本帝国の利害と植民者の利害はほぼ合致している存在でした。植民地支配の日本的特徴は、後発の植民地帝国として英米仏などの欧米列強に追いつくために、地理的近接生もあって、植民地の産業水準を本土化並にして行くという方針でありました。そこで、これらの植民者は農村への入植者と言うよりも、植民地官僚、鉄道などインフラ産業や重化学工業などのテクノクラートや、都市での小売店主などの小商業や中商業主としての移住者が主であり、いわゆる植民地の近代化、産業開発の担い手としての植民者であったのです。

(3) 北米南米移民と勢力圏への植民の連関性

では、南北アメリカへの移民と帝国の勢力圏への植民者はどのような関係にあったのかといえば、地域的な違いも少なく、高学歴のテクノクラート層を除けば、地域的には西日本、階層的にも中の下あたりの農民層であり、20世紀前半の南北アメリカ大陸への移民と帝国の植民地へ移住していった地域も階層もそれほど大きな違いはないということが最近わかりつつあります(木村健二)。しかしながら、ホ

スト社会での日本人としての地位には大きな違いがあったことは明らかです。北米には約37万人が渡り、南米には約19万人が渡り、双方合わせて約56万人の移民がありましたが、他方、植民地や勢力圏への移住は300万をゆうに超えており、やはり、帝国の膨張に伴って北米南米大陸への移民から帝国の勢力圏への植民へとシフトしていったことがわかります。

そして、その典型的な流れを、「ブラジル移民から満洲移民へ」という表現で表されることがあります。周知のように、「満洲国」は1932年3月1日に「建国」されました。ほぼ同時期の1934年にブラジルでは移民制限法が施行され、最盛期には年2万人をこえるという日本人のブラジルへの移民の行く先が模索され、結果として満洲移民がその受け皿となったというストーリーです。満洲移民は、従来の勢力圏への日本人植民者がほぼ植民地都市への移住であったのに対し、ブラジル移民と同じ農業移民である点がこのストーリーの強調される故でもあります。

では、いよいよ本題の日本人満洲農業移民へと話を進めていきましょう。

3. 満洲への日本人の移住

(1) 農村経済更生運動と満洲農業移民事業の展開

日本人満洲農業移民の発端は、1932年3月1日の「満洲国建国」にあったことは言うに及ばません。それによって、それ以前問題となっていた日中間の土地問題が解決され、日本人農民の入植を可能としました。むろん、これによって日本人満洲農業移民事業が展開したわけではありません。

ただ、反満抗日勢力の反抗に悩む治安当局（関東軍）が、反満抗日ゲリラが潜む北部東部満洲に日本人農民を入植させ、当該地域の治安と日本的秩序を確保したいというねらいがこの事業の根底にあったのは言うまでもありません。しかし、経済合理的に言えば、生活水準が低くコスト面で競争力がありかつ在来農法に長けている中国人農民や、農業技術力に長ける朝鮮人農民との国際競争力は無いに均しい日本人農民を入植させるのは難しいという議論が根強かったのです。ですから、初期の5年間は試験移民という位置づけであり、当時ブラジルに2万人の移民が送出されていた時に、500名の試験移民しか出せなかったのです。

しかし、二・二六事件で事態は大きく展開し、「満洲移民は可能か」という議論から「満洲移民はなさねばならない」という議論となり、しかもブラジル移民も難しくなったことが追い風となり、農村の過剰人口の輩出先として満洲が大きくクローズアップされたのです。折からの「大恐慌」（1929年）で農村は不況に襲われ（1930年～）、おまけに冷害が数度にわたって東北地方を襲い、負債にあえぐ農村の立て直しに農村経済更生運動が1932年より実施されてきました。そして、それが満洲移民と合体化したことは決定的でした。その結果、満洲移民事業は国策化され、試験移民から本格移民へと大きく展開されていったのです。具体的には、ひろく全国の農村に行きわたっている経済更生運動の一環として満洲移民事業は位置づけられ、補助金と結びついて大きく展開されていったのです。農村経

濟更生運動も滿洲農業移民事業も1932年から始まりましたが、農村經濟更生運動は農業經營や農家生活の合理化や節約などの經濟合理的な努力によって農村の建て直しをねらいましたが農村の苦境は打開されず、二・二六事件後に軍部ファシズムが強化されだす1937年になって、いよいよ両者が結びついたわけです。それに、1939年には滿洲開拓の基本政策である「滿洲開拓政策基本要綱」が策定され、滿洲農業移民事業はいよいよ本格化していくわけです。

(2) 滿洲農業移民事業の概要

試験移民期（1932年－36年）のそれは、「滿洲国の建国」（1932年）によって開始されましたが、反対論が強く文字通り試験的に行われましたが、「二・二六事件」（1936年）を契機として、翌年に七大国策化され、本格移民期（37年－41年）となりました。1939年には滿洲農業移民要項が策定され、いよいよ本格化されますが、皮肉にも過剰人口問題は日中戦争の拡大によって解決され、戦時景気のなかでむしろ労働力不足が浮上してきます。若者の徴兵、それを埋めるための女性の労働力化、戦時体制への經濟統制、植民地労働者の強制的な徴用、朝鮮人や中国人の強制連行へとエスカレーとしていきます。当然ながら、そのようななかでの滿洲への農業移民の送出は次第に難しくなっていきます。

そして、1941年12月8日の真珠湾攻撃を端緒とする太平洋戦争によって事態は泥沼化していき、翌年のミッドウエー海戦での敗北から帝国崩壊へと進み、滿洲農業移民事業はいっきに崩壊期へとなるのです。七大国策として「20ヶ年間100万戸計画」（500万人計画）が打ち出されましたが現実には遠く及ばず、13年間で27万人の送出が見られました。

(3) 滿洲農業移民事業に付与されたその性格

さてここで、滿洲農業移民事業に付与されたその性格を振り返っていきましょう。先ほど紹介しましたように、北米南米移民は農業労働者としての移民でしたが、帝国勢力圏への移民はほとんどが官僚や重化学工業のテクノクラート、都市の中小商工業者としての植民者でした。ですが、滿洲移民は農村への農業移民として送出されたことに大きな特徴があります。

そもそも日本人滿洲移民には、コッサク兵や屯田兵のような役割が本来的には期待されていました。滿洲農業移民事業は滿洲国建国をうけて、関東軍によって企画され、二・二六事件によって国策化されたことから明らかなように、それに反滿抗日ゲリラ地区への大量の入植に象徴されるように、滿洲国の治安維持、対ソ連への防衛、軍隊を支える兵站基地的な役割が主に担われたものでした。他方で、急増する都市の食糧基地として都市周辺へ入植させられた開拓団や総力戦下の食糧増産の要請のもと主に南滿への大規模な入植もありました。当初、それは日本内地では、日本農村の不況対策、土地不足に泣く日本人農民への福音、失業者による社会不安を解消するためのものとして提唱されていました。しかし、上に見ましたように、それら初期に言われたものは戦線の拡大の中で解消され、むしろ農村は労働力不足に陥っておりました。そのことによって、滿洲の治安対策としての農業移

民という性格が明確となっていったわけです。満洲における重化学工業等が産業開発を主眼としていたことは明らかに異なっており、日本人農業移民は日本の軍事支配や土地侵略を体現する植民者としての性格を色濃くしていきます。

(4) 様々に投影される満洲移民

さて、日本人満洲移民は中国人農民や朝鮮人農民から見たら日本の軍事支配や土地侵略を体現する植民者としての色合いが強かったでしょうが、日本人移民からしたら満洲農業移民として満洲に渡ることには、様々な動機や夢が投影されていました。1980年代に元満洲移民に満洲へ移住した動機について調べたことがあります。それはじつに多様でした。そこから、満洲移民は様々にひとひとの思いや社会の動きが投影されているものと判断しました。たとえば、満洲事変後（1931年）の社会に蔓延する「満洲熱」によって、閉塞している日常からの逃避であったり、それだけでなく将来への夢や野望や希望であったり、青少年層が主でありましたが「理想国家・満洲国」というプロパガンダによる理想としての満洲移民であったり、国策としてのそれであったり、という多様なものが揚げられます。同時に、先に見たように、過剰人口の輩出先としての満洲でもあり、ブラジル移民などでよく表象される「蒼氓の民」としての「棄民」とも通底している面がありました。そして、何よりも、「国策移民」としての側面は大きかったです。国策であるからこそ、「お国のために」と満洲に移住したわけですし、理想と希望をそこに見いだしたわけですから。

しかしながら、初期や中期は希望者によって移民団が構成されましたが、総力戦体制が行きわたり、労働力不足と言うよりも人手不足が厳しくなると、満洲への移民希望を待っては、「20ヶ年間100万戸計画」はもちろんのこと、年次計画も達成されません。そこで、当局は、年次計画に沿って各府県に人数を「割り当て」、府県は各市町村に「割り当て」、町村は部落に「割り当て」、部落では有力者を中心にして送出候補者をあぶり出していました。農村共同体の共同体規制を使っただけで、まさに「強制としての満洲移民」送出、あるいは「動員としての満洲移民」送出でした。それに、総力戦体制下の経済統制によって失業し転業を強いられた転業者たちも満洲移民へと向けられました。たとえば、東京転業開拓団は東京でも有名な商店街の中小商店主たちの転業によって組織された開拓団でした。

成人はそうにして満洲移民を確保していきましたが、総力戦体制のなか、兵隊の応招や軍需産業への労働力のシフトが重視され、次第に満洲移民希望者は枯渇し、移民候補者の確保が至難となっていきます。そして、その矛先は少年たちへと向かいました。それが、満蒙開拓青少年義勇軍でした。満洲移民は27万人と言われますが、じつはそのうちの約2割の約5万7千人が満蒙開拓青少年義勇軍でした。総力戦末期には、成年の兵隊の絶対数が不足し、志願した少年兵によって補充されていきますが、満洲開拓も同様でした。もっとも、満洲開拓団は徴兵を免除されるというかたちで宣伝されていたこともあり徴兵逃れとしての満洲移民もあったことは忘れてはならないでしょう。ところが、後述するように、1945年8月には「根こそぎ動員」というほとんどの成人男性が招集され、結果として彼らの多

くの「シベリア抑留」へと結びついたわけですが。

(5) モデルとしての分村移民・分郷移民

満洲移民は、当時の内地の小さな村程度の300戸で1開拓団として組織されることを標準とされてきました。当初は、全国から応募されたひとたちによって組織されていましたが、次第に同県、同郡、同村出身者から組織される開拓団へと向かっていきました。第5次の開拓団（1936年）でもっとも多数の移民を送出した長野県で単独の開拓団が組織されると以降は府県単位のそれが主流となりました。また1938年より分村移民が推奨され、長野県大日向村が単独の開拓団を組織して送出すると、このタイプの「分村移民」がモデルとなっていきました。同じく同郡から送出する開拓団を分郷開拓団といて、このタイプの開拓団が一般化していったのです。

先に述べました「割り当て」は、分村移民や分郷移民の際に大いに適用されました。というのは、それは母村の経済更生計画として「分村移民」や「分郷移民」による送出移民数が農村経済更生運動による補助金と結びつき、分村移民・分郷という地縁の結びつきによる開拓団（分村）の組織化が、「割り当て」の強化となり、満洲への移住が「強制」されていったわけです。このシステムは、母村と分村の連携による団員の定着と補充に便利で、内地の母村にも満洲の分村にも都合のいいシステムだったわけですが、それはまさに総力戦体制下の「動員」と同じ意味を持っていました。

さて、ここで思い出すのは、このように総力戦下の国策によって展開されていた満洲移民も、ハワイ移民からブラジル移民まで通底していた過剰人口問題対策があり、それに加えて満洲の治安維持と大恐慌から昭和恐慌によって深刻な失業問題とそれに影響された内地社会の社会不安の解消もあったことです。つまり、満洲移民事業は、「満洲国建国」によって企画された当時と総力戦下での本格化した時点と崩壊期ではその性格が異なっていくことです。

4. 満洲での開拓生活

(1) 開拓地での生活

満洲への日本人農業移民は、上述のように様々の動機と背景をもちながらも、その文脈から、結果として「帝国主義の尖兵」として入植しました。というのも、その入植地の6割もが既耕地への入植であり、しかもその土地は関東軍（後には満洲国当局）による不当な価格での強制買収であり、そこで耕していた中国人農民は辺鄙な土地へと追い払われていきました。当初の案では未耕地への入植と唱われていましたが、結果としては多くが既耕地への入植となりました。日本政府は、満洲移住への補助金を各戸当たり1000円、そして配分された土地は10町歩から20町歩でした。8割の家族は農家の二、三男の若い男性で、内地からめとった新妻との夫婦単位の核家族でしたので、全部の農地を耕すだけの労働力がなく、年雇いの中国人苦力をひとり雇いながらも、結局は中国人農民に小作に出すというパターンが一般的でした。もっとも、中年の夫婦に青年期の子どもを多く持つ大家族の場合は、

自分たちで耕作することが出来たようですが、それでも、農繁期にはたくさんの苦力を雇っての農家経営であったようで、雇賃の割合の高さが農家経営に与える負担は相当なものであったようです。

(2) 開拓生活の困難

役場と農協を兼ねたような役割を果たす開拓団本部を中心に、開拓団は、土地、生活物資はすべて配給で、食うに困ることはなかったようですが、それはパラダイスではありませんでした。開拓団での生活は、寒さへの適応や、水の違いや住居の違いなどが大きくて、生活環境の違いへの適応に大変苦労しました。先に述べましたように、若い夫婦家族は、労働力も農家経営の経験もなく、満洲での農業経験もまったくないという状況で、農業での黒字は望むべくもなかったようです。多くは、付近の材木伐採、農産品加工品の販売、出稼ぎ等で補っていました。もちろん、内地の農家も、農業だけで生活が成り立つ農家は少なく、ほとんどは、農業、農産加工品、手間稼ぎ、出稼ぎ等の組み合わせで生活を営んでいました。ですから、当時の内地での理想としての自作農主義を満洲での開拓団の生活に適用しようとしても、絵に描いたもちであったわけです。中には、営農に長けた団幹部を中心に、開拓団本部が直接経営する農地を小作に出し、農産品加工品で成功した開拓団もあったようであるが、農産加工品の販路も持たず、出稼ぎ先も開拓できず、満洲における日本人農業移民の成功は非常に難しかったようです。

極寒の寒さ、冬季は閉ざされた環境になすすべもなく、新たな環境に馴染めず、「屯墾病」という鬱病のような病気にかかって退団するひとたちも少なくなかったし、環境の変化で病気にかかったり、事故にあたりと、彼らの生活は生やさしいものではなかった。中国人農民の犠牲の上に成り立った開拓団も、入植したひとびとから見たら多くの犠牲を出していました。内地よりまだと思って移住してきたひとびとには、満洲の開拓地での生活は厳しいものでした。自作農が理想とされましたが、労働力不足、満洲での農業経験の不足などから、満洲に適した農業技術の不足、労働力への賃金の農業経営への圧迫から、結局は多くが自作農を諦め、次第に中国人農民や朝鮮人農民に土地を貸して地主化していきました。

(3) 近代家族の誕生、植民地での近代化

先ほど述べましたように未婚二三男の入植が主なパターンでしたので、その新妻すなわち「開拓花嫁」の招致が重要な課題でした。多くは出身地に一時帰国して近くで見合いをして結婚というのが一般的でしたが、開拓団の未婚男性との結婚候補の養成を目指して「開拓女塾」が開設され、そこから多くが花嫁となっていったわけです。満洲への移住を夢見て「開拓女塾」に自発的に応募するひともありましたが、その目的もよく理解せずに満洲へと渡り、結婚を強いられた場合もありました。

ともあれ、開拓地では舅も姑もない夫婦だけの家族という近代家族が誕生しました。これまでの仕来りや伝統から離れた夫婦と幼い子どもによる核家族の生活が営まれ、戦後の日本の夫婦とその子のみという家族生活を先取りしていました。

本来は、入植地に欠かせない農業指導員や会計指導員や医師や看護婦などは内地からの移住者（雇用者）でしたが、開拓団内で自前の後継者を育成することが期待されていました。国民学校を卒業したひとたちで、ゆとりのある家族の場合には、子どもを農学校や看護学校等に送り出して、資格を得て開拓団の指導員や看護婦さんとなった場合もありました。彼ら／彼女らは、内地にいれば得られにくかったような階層のひとたちが専門的な資格を満洲で獲得し、専門職として働く場を得たわけです。これらは、植民地的特権を生かしての近代的な資格を獲得した例でしょうか。彼らは、団経営や地域生活に欠かせない人材として開拓地の近代化に必要な人材となっていたのです。

（４）階級関係と民族関係と

先ほどから繰り返し述べていますように、満洲移民は自作農主義を理想としていました。しかし、結果として自作農から地主へと転じました。自作農として中国人農民や朝鮮人農民との友好的関係を構築することが期待されていたわけですが、言うまでもなく、多くの場合が日本人地主と中国人小作農民・朝鮮人農民小作・苦力労働者という関係になりました。つまり、中国人農民や朝鮮人農民に寄生した日本人地主という関係が出来てしまったわけです。民族関係と地主小作関係の二重の関係が重複してしまいました。元満洲移民にインタビューしますと、「われわれは中国人農民とも朝鮮人農民とも関係がよかった」と述べる場合が少なくないですが、それはこのような地主小作関係と、民族的な支配被支配関係の上に成り立つものであったという自覚は少なかった、と言えましよう。

（５）開拓生活の成否の分かれ目

北米や南米のプランテーションに農業労働力として移民したひとたち比べると、初めから自分の広大な土地、しかも既耕地を持ちながらの開拓生活は比べようもないでしょう。ですが、厳しい寒さや土壌の差、農業技術の違いなどの環境の変化に適應する困難は同じものがあつたと思えます。

しかし、入植から時間がたつと、地元への定着度が高まり、農業経験も蓄積され、農民層階層分解が進んで、小作地出しながらも自立できる農家経営を行えるひとたちや開拓団とが登場してきます。それは、多くは開拓団指導者の力量によって大きく差が出たようです。

それに、首都の新京（現長春）の成長に伴うその都市近郊に入植した開拓団などは蔬菜園芸の指導者が入植し、確実に大消費地を控えていたために、農業経営は軌道に乗っていたようです。開拓地では、農業収入よりも木材資源への依存や、農産加工品の工夫や振興に大きく依っていたようです。このように、早期に入植したり、きわめて恵まれた条件の開拓地であつたりした場合には、それなりに軌道に乗っていたようですが、そうでない多くの開拓団での農業経営は大変難しかったようです。

その根本に地元農村との関係性の構築がありました。差別的で植民者としての特権にあぐらをかいたひとたちはじり貧となり、地元との関係や雇用した地元農民との関係に配慮し、正当で対等なものにしていったひとたちは、地元の理解と支持を得ていたようです。

(6) 都市生活者との比較

満洲では、大連などの古くからの植民地都市に住んでいた日本人たちは、ほとんどがホワイトカラー層と中小商工業者で、近代的な植民地での恵まれた生活、植民者としての特権を十分享受した日々であったと言われます。しかし、農村での農業移民たちは生活環境の劣悪なかで、広い土地は持てたけどそれを有効利用できずに、苦闘した日々であったと言うことが出来ましょう。すなわち、満洲の日本人都市生活者は、植民地の近代的生活を謳歌したのに反し、開拓団の生活は、大土地所有という特典だけで、しかもそれも十分生かすことが出来ないものでした。

5. 敗戦体験とその後のライフコース：引揚げと「中国残留」と

(1) 8月9日以降の日々

- ソ連軍侵攻
 - 開拓地を離れての「死の逃避行」
- 9月以降の「収容所での生活」、引揚げまでの苦難
 - * 「死と生とが隣り合わせの生活」（約8万人が死亡：日本人農業移民の約30%）
- 団による入植形態、定着性、中国人農民・朝鮮人農民との民族関係
 - 8月9日以降の日々を規定

(2) 敗戦から引揚げまでの難民（漂流）期

- 初期は日本人居留民会による援助、その後は雑業でほぼ自活
- 「死の避難民収容所」から逃れて中国人農家へ入る女性
 - Cf) 子どもたちは養子か、売られるか、拾われるか、助けられるか（「中国残留日本人孤児」へ）

(3) 集団引揚げか、中国残留か

- 集団引揚げが始まったときには中国人農家に身を寄せていた多数の日本人女性が引揚げる
 - 集団引揚げ後も残った女性たち（「中国残留日本婦人」へ）
- 集団引揚げ事業
 - 前期集団引揚げ（1946年5月～1949年）大半はこの期に帰国
 - 後期集団引揚げ（1953年～1958年）残りのひとたちはほぼこの期に帰国
- 中国残留と「里帰り帰国」

(4) 満洲移民の類型 *ターニングポイントとしての集団引揚げ

- (a) 集団引揚者：終戦直後に集団引揚げで帰国したひとびと
- (b) 中国残留者：中国に「残留」し国交回復後に帰国してきたひとびと
- (c) いまだ中国に「残留」し続けるひとびと

* 訪日後中国に定住した人、訪日していない人もいるがここでは取り上げない

6. 想起される「満洲」、想起される「日本」

(1) 集団引揚者の戦後経験

集団引揚者は、命からがら祖国に引き揚げ、まずいったんは本籍地・母村に戻りました。そこで、ゆとりがあれば落ち着きましたが、基本的には戦後の食糧難のなか親兄弟や親戚の世話になるにも限度があり、恵まれたひとたちはそこに残ったり、分家したりしましたが、多くは母村を出て、戦後1946年から始まった戦後緊急開拓政策にもとづいて、国内入植地に入り、文字通りの開拓生活を始めます。そこに定着するひとたちは少なく、定着率は50%にも満たなかった。とうのも、国内開拓地は、山里離れた国有山野や飛行場などの国有地であったために、農業経営には難しかったからです。戦後の引揚げ直後はそこで糊口を凌ぎ、社会全体に経済的ゆとりが出てくると、高度成長期の労働力不足に乗って都市での職場に移動していきます。

満洲からの集団引揚者たちは、「人生で一番苦しかったのは満洲からの引揚げた後の国内での生活だった」、とよく言います。満洲から内地に引揚げるまでは「生きて帰れるか」という心配がもっとも大きな課題であったが、命からがら引揚げてきた後の郷里での日々は、命の心配はする必要はなくなったが、生活苦にあえぐだけでなく、満洲体験が理解されなかったこと、さらには引揚者への白眼視や差別がとてつらかったという。「せつかく生きて帰ったのに、祖国は冷たかった」、引揚げの際の悲劇を話しても、「植民地で散々いい思いをしておきながら、何をいまさら泣き言を言うのか」など、体験を理解されないことによる精神的な苦痛があったという。したがって、内地の郷土での生活よりも、体験を理解しあえる同じ開拓団同士による不便な山のなかでの開拓生活を望んだ場合も少なくありません。さらには、1953年にブラジルが移民受け入れを再開すると、再びブラジルへと旅だったひとたちもいたのです。

集団引揚者は長らく満洲での体験を語ることを避けてきました。それは彼らの体験が周囲によって理解されなかったことが大きい。戦場での極限の体験も理解を絶するが、時代によって戦争体験への注目は異なったが、それは「お国のため」のものであったのです。しかし、満洲での体験は戦闘と同じほど極限状態でありながらも、それらは、強姦被害も、子どもを捨てたり、売ったり、おいてきたりした話であり、一般に理解されるはずもないからです。それに、公的、私的な「語りの場」がないことも彼女ら彼らが語れなかったことの大きな要因だったのです。

したがって、彼らは戦後の日本でノスタルジアとしての満洲を想いだし、心を慰めたのです。しかし、満洲を思うことは、同時につらい思い出を避けて通る訳にはいかないのです。満洲を想起することは精神的な苦痛をとめないことです。ある集団自決の現場で生き残った男性が、当時15歳で自決の場で自分たちも数人を殺して、自分も自決を試みたが生き返ってしまったという過去があります。彼は、戦後ずっとこのことを語りませんでした。それは、同じ村内に死んでしまったひとたちの遺族がおり、話しても理解されないだろうし、互いに傷つけるだけだからだと思って沈黙してきたと言いました。しかし、このまま死んでしまうわけにはいかないと、語る決心をしたと言うのです。

このような過去を忘れ去ることも出来ません。でも、語ることも出来なかつたのです。そのようななかで満洲が想起されていたのです。口に出来ないような辛い思い出と、それ以前の夫婦水入らずの開拓生活という甘美な思い出とが錯綜した記憶こそが満洲の思い出なのです。

(2) 中国残留者の戦後経験

一方、中国残留者にとっての思い出は、日本にまつわる思い出です。その残留の経緯を聞くと、その思い出が理解されます。ソ連参戦後の逃避行が過ぎ、収容所での生活は死と隣り合わせのものであり、自分が、あるいは家族が生きるためには働いて自活するか、中国人家庭に世話になる（嫁になるか、妾になるか）しかなかったのです。多くの日本人満洲移民が中国人家庭に世話になりましたが、1946年以降の集団引揚げ時には、日本人と一緒に帰国したひとたちは少なくありませんでした。しかし、その時に中国に残ることを選ばざるを得なかつた人たちがいます。それは、子供が生まれており、その子を残しては帰れないという母親として残ったひとたちでした。祖国と子どもを両天秤に駆けるという難問のままで彼女たちは苦しみ苦しみます。ある女性は、帰るつもりだったが子どもに泣かれて断念した、しかし、その後しばらく寝込んでしまったと。それから、帰国を諦めて中国での生活を受け入れていったと言いました。母として子どもを選んだという語りは、いわば「母の語り」といえましょうか。

ほとんどの中国残留婦人は、中国残留の経緯を語る時に涙を流しますが、さらにその後の中国での生活で、「日本を思わなかつた日は一日もなかつた」と言います。そして、「帰れるようになったから帰国したのではなく、帰国をずっと思わない日はなかつた」と語ります。

もちろん、すべての残留婦人が同様であった言うことはありません。彼女らが住んだ地域によって、働いた職場によって、結婚した夫の家族によって、あるいは夫によってどのように受け入れられていったかによって、中国での生活は異なっています。すなわち、受け入れられたひとと、差別されたり、文化大革命期に迫害を受けトラウマとなつたりしたひとなどです。これらの経験によつても、想起される記憶は異なってきます。地域社会によつて日本人であると言うことが異なる意味を持っていたのです。

日中の国交が正常化（1972年）して以来、多くの一時帰国者と永住帰国者がいました。そして、日本社会向かつて、多くのひとたちが語り続けていますが、それらは「祖国に訴えかける物語」となつていきます。

(3) 満洲体験、中国残留体験が「記憶の語り」として構築された社会的文脈

* 加害と被害が錯綜した体験

- (a) 集団引揚者－戦後日本社会の屈折するまなざしのなかで構築された記憶
- (b) 中国残留者－想像された日本社会のまなざし
 - + 戦後中国社会の批判的なまなざし
 - + 帰国後日本社会 (+ 中国社会のまなざし)

7. 記憶の語りを聞き取ることの意味

(1) 満洲移民の満洲での体験、戦後体験を知ること

vs 中国残留日本人の満洲での体験、戦後中国での残留体験、帰国後の体験を知ること

- 満洲での体験だけでなくそこから今日までの人生をすべて対象とすること
- 満洲体験は戦争体験であると同時に戦後体験である
- 満洲体験→中国残留体験→日本への帰国体験

(2) 集団引揚者：「否定された満洲」にかかわった自己の人生を戦後日本社会のなかで、どのように位置づけ、解釈しているのか

(3) 中国残留婦人：「否定された満洲」にかかわった自己の人生を解放後の中国社会のなかでどのように位置づけ、解釈してきたのか、そしてそれを一時帰国や永住帰国後の日本社会のなかでどう語るのか（あるいは中国社会でどう語るか）

(4) 時代によって、語られる場によって変化する記憶の語りとMSとMNの関係を明らかにすることによって、記憶の語りの構造とそこにある論理と心情を明らかにする

(5) 中国残留体験は、集団引揚げ者の記憶の語りのなかに反映された戦後日本の満洲観を喝破する

結びにかえて－満洲体験、中国残留体験と戦後日本社会

(1) 総力戦への敗戦という体験が、戦後日本社会の方向性を規定

- しかし、そこには「記憶の裂け目」があった
 - 「悪い戦争」への反省 vs 「仕方がなかった戦争」という言い訳
- 戦後体制のなかでつくられた「戦争の記憶」
 - 「国民的想像力」（白石隆）としての「悪い戦争」、 「否定された満洲」
 - vs 集団的忘却としての中国残留日本人
- 戦後体制の変動のなかで提起される「歴史の再審」、 「認識の衝突」、 「語り直し」

(2) 「否定された満洲」に係わった体験の解釈

- 語ることの困難さ、語れない過去
 - 被害としての、ノスタルジアとしての、近代としての、理想国家としての満洲
 - MNへの反作用として、それぞれの集団・階層によって語られるMS
 - 中国残留体験によって批判される「否定された満洲」、満洲体験の「記憶の語り」
- (3) 満洲体験、中国残留体験のふたつの記憶の語りが照らし合わされた時
 - 語りのなかの裂け目や矛盾が露呈する
 - ←個人の体験の強さ、社会から半ば隔絶されて構築される記憶の語りの場合
 - ←MNやMSのなかの裂け目や矛盾、二つの国のMNに規定されて
 - 両方の記憶の語りの構造と社会的文脈の違いが明白になり、「語りの力」が発揮される
- (4) 地域社会で試みる体験の継承
 - 長野県「満蒙開拓を語りつぐ会」の試み
 - 地域社会にとっての意味－地域の歴史(MN)を再考し、地域の有り様を再考する
- (5) 満洲体験の空洞化と継続性
 - 体験者の高齢化によって空洞化する満洲体験
 - 日本への帰国による中国残留体験、帰国体験で継続される満洲体験の語りの継続性
 - 裁判のなかで2世3世によってよみがえり、追体験される満洲体験、中国残留体験

↓

これらの試みは、満洲体験・中国残留体験が戦後日本社会にとってどのような意味を持っていたか、戦後日本社会のなかにあるふたつの「記憶の裂け目」を問い続けている。

- (6) 東アジア社会にとっての日本人満洲移民の意味

【参考文献】

- 蘭信三[1992]「ある中国残留婦人のアイデンティティをめぐる」戦時下日本社会研究会（編）『戦時下の日本－その歴史社会学的考察』行路社
- [1994]『「満洲移民」の歴史社会学』行路社
- （編）[1998]『「中国帰国者」をめぐる地域社会の受容と排除に関する比較社会学的研究』平成7～9年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書
- [2000a]「満洲移民研究における社会学的方法の可能性」『社会情報』Vol.9, No.2（札幌学院大学社会情報学部）
- （編）[2000b]『「中国帰国者」の生活世界』行路社
- （編）[2002]「満洲移民の問いかけるもの」『環』vol.10、藤原書店（藤原書店（編）
- [2004]『満洲とは何だったのか』藤原書店、に再録
- （編）[2003]『「中国帰国者」の適応と共生に関する総合的研究』平成12～15年度科

- 学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果中間報告書
- (編) [2004] 『中国残留孤児の過去、現在そして未来—シンポジウム参考資料』 平成16年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)シンポジウム参考資料
- [2005] 「本当の「出会い」必要」 『信濃毎日新聞』 2005年5月29日
- (編) [2006] 『中国残留孤児の過去、現在そして未来—「残留孤児問題の総括と展望』 平成16年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1) 研究成果中間報告書
- [2007] 「中国「残留」日本人の記憶の語り—語りの変化と「語りの磁場」をめぐって」 山本有造 (編) 『満洲 記憶と歴史』 京都大学出版会
- (編) [2009] 『中国残留日本人という経験—日本と「満洲」を問い続けて』 勉誠出版
- 蘭由岐子[2004] 『「病の経験」を聞き取る—ハンセン病者のライフヒストリー』 皓星社
- 中国帰国者支援・交流センター (編) [2005] 『二つの国の狭間で 中国残留邦人聞き書き集 第1集』 同センター
- 趙彦民[2004] 『日本社会における「中国帰国者」に関する考察—「中国残留孤児」とその家族の生活史を中心に』 (名古屋大学大学院国際協力研究科2003年度修士課程学位論文)
- 江畑敬介・曾文星・箕口雅博 (編) [1996] 『移住と適応——中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究』 日本評論社
- 江成常夫[1988] 『シャオハイの満洲』 新潮社
- 呉万虹[2004] 『中国残留日本人の研究』 日本図書出版センター
- 反差別国際連帯解放研究所しが編[1995] 『語りのちから—被差別部落の生活史から』 弘文堂
- ホルスタイン, ジェイムズ & グブリン, ジェイバー (山田富秋ほか訳) [1995=2004] 『アクティヴ・インタビュー』 せりか書房
- 伊地知紀子 [2006] 「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第2号
- 加藤陽子[1995] 「敗者の帰還—中国からの復員・引揚問題の展開」 『国際政治』 第109号。
- 小関隆[1999] 「メモレションの文化史のために」 阿部安成ほか (編) 『記憶のかたち』 柏書房
- 厚生省援護局 (編) [1977] 『引揚げと援護 三十年の歩み』 厚生省
- 厚生省援護局 (編) [1987] 『中国残留孤児』 ぎょうせい
- 京都「自分史を書く会」 (編) [2004] 『落日の凍土に生きて—「我是誰」中国残留孤児の証言』 文理閣
- 満蒙開拓を語りつぐ会 (編) [2003] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集1』 飯田市歴史研究所
- (編) [2004] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集2』 飯田市歴史研究所
- (編) [2005] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集3』 飯田市歴史研究所
- (編) [2006] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集4』 飯田市歴史研究所
- (編) [2007] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集5』 飯田市歴史研究所

- (編) [2008] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集 6』 飯田市歴史研究所
- (編) [2009] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集 7』 飯田市歴史研究所
- (編) [2010] 『下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集 8』 飯田市歴史研究所
- 満洲泰阜分村満洲泰阜分村七〇年の歴史と記憶編集委員会 (編) [2007] 『満洲泰阜分村
七〇年の歴史と記憶』 不二出版
- 本島和人 [2006] 「満洲体験者と市民の出会いー地域で満蒙体験を語りつぐこと」 『日本オー
ラル・ヒストリー研究』 第2号
- 小川津根子[1995] 『祖国よー「中国残留婦人」の半世紀』 岩波書店
- ポール・トンプソン (酒井順子訳) [1978=2002] 『記憶から歴史へーオーラル・ヒストリーの
世界』 青木書店
- 坂部晶子 [2000] 「植民地の記憶の政治学ー日本人にとっての「満洲」経験」 『ノシオロジ』 137号
- 桜井厚[2002] 『インタビューの社会学』 せりか書房
- スターケン, マリタ (岩崎稔他訳) [1997=2004] 『アメリカという記憶ーベトナム戦争、エイズ、記念
碑的表象』 未来社
- 塚瀬進[1998] 『満洲国ー「民族協和」の実像』 吉川弘文館
- 上野千鶴子[1998] 『ナショナリズムとジェンダー』 青土社
- 山崎豊子[1991] 『大地の子』 新潮社
- 山田昭次 (編) [1978] 『近代民衆の記録 6 満州移民』 新人物往来社
- 山本慈昭[1981] 『再会ー中国残留孤児の歳月』 日本放送協会
- 山本有造 (編) [1993] 『「満洲国」の研究』 京都大学人文科学研究所
- 山本有造 (編) [近刊] 『満洲 記憶と歴史』 京都大学出版会
- 山室信一[1993] 『キメラー満洲国の肖像』 中央公論社
- 読売新聞大阪社会部 (編) [1986] 『満蒙開拓団』 角川書店
- 読売新聞大阪社会部 (編) [1982] 『中国孤児』 読売出版社

화북지역의 한인이주와 ‘생활체험’

김주용(독립기념관)

■ 목 차 ■

- 1. 머리말
- 2. 중일전쟁 이전 한인이주
 - 1) 한인사회의 형성
 - 2) 거주지의 외연 확대
 - 3) 생활실태와 직업구조
- 3. 중일전쟁과 한인사회의 변화
 - 1) 화북정권의 성립과 한인사회
 - 2) 직업의 차별화와 왜곡
- 4. 맺음말

1. 머리말

1918년부터 1936년 천진(톈진)에서 유년기를 보낸 영국인 브레인 포엘(Brian Power)은 증 문판 자서전을 내면서 천진에서 가장 훌륭한 스승을 만났다고 회고했다.¹⁾ 영국 조계에서 생활하면서 느낀 유년기 시절의 감상은 그로 하여금 천진에 대한 동경과 더 나아가 중국에 대한 동경으로 이어졌다. 그가 그리던 천진은 그러한 곳이었다.

천진은 지역상 화북²⁾에 속한다. 화북은 중국지역을 구분짓는 용어로 사용되었다. 화북, 화중, 화남 등은 일상생활뿐만 아니라 역사적 용어로서의 기능도 담당했다.³⁾ 화북으로 한인들이 이주한 것은 20세기 초부터였다. 북경, 천진을 비롯하여 내몽고지역까지 점차 그 범위가 확장되었다. 1919년 3·1운동 이후 독립운동가들이 형성했던 한인커뮤니티는 1937년 중일전쟁으로 일본 세력의 부식과 그에 따른 친일단체의 성립으로 변형되었다. 천진뿐만 아니라 내몽고 지역도 1920년대 독립운동기지를 건설하고자 했던 ‘이상향’이었지만 중일전쟁 이후 더 이상 향기를 느낄 수 없는 곳이 되었다. 침략과 저항의 한복판에서 한인사

1) 布萊恩·鮑爾, 劉國強 譯, 『租界生活(1918-1936)』, 天津人民出版社, 2007, 5쪽. 브레인 포엘의 부친은 천진시 세관의 세무사였다. 브레인은 19세까지 천진에 살았으며, 중국을 떠난 후 천진을 네 차례나 방문할 정도로 남다른 애착을 보였다.

2) 화북은 북경을 비롯해서 천진, 하북성, 산서성, 산둥성, 하남성 등을 일컫는데 본고에서는 산둥과 하남성의 한인이주에 대해서는 거의 다루지 못했다. 이는 필자의 게으름이 낳은 결과이다. 차후 별도로 처리할 것이다.

3) 1940년대 대한민국임시정부에서 한교 선무단을 조직할 때도 화북지역, 화중지역, 화남지역으로 구분하였다.

회는 또다른 굴종이 강요되는 사회로 바뀌어 갔다.

만주지역 한인 이주의 역사는 1860년대까지 거슬러 올라간다. 북간도를 비롯한 서간도 지역을 중심으로 형성되었던 한인사회는 한인(조선인)에서 조선족이라는 중국 공민으로 위상이 달라졌을 뿐 현재도 유효하다. 이에 비해 화북지역 한인사회는 형성시기와 현재 한인사회를 비교해 보면 만주지역과는 사뭇 다른 형태를 보이고 있다. 중일전쟁기 이주한인의 폭발적인 증가 양태는 두 지역에서 동일하게 나타났지만, 규모와 커뮤니티의 질적인 면에서는 달랐다. 해방 이후 화북지역 한인들이 대부분 귀환을 택하였다는 점, 그리고 그 공백상태를 한중 수교 이후에 한국인들이 메우고 있다는 점은 만주지역과 다른 상황임에는 틀림없다.

본고에서 다룰 화북지역의 한인사회는 단절된 이주한인사회를 복원하는 작은 작업이기도 하다. 지금까지 화북지역 한인이주와 관련해서는 주목할만한 논문들이 발표되었다.⁴⁾ 이는 주로 북경지역과 천진지역 등 대도시를 주제로 다루었으며 시기도 '만주사변' 이후에 집중되었다. 또한 주제 역시 한인들의 아편 밀매에 집중되었는데 이는 일본 세력이 화북지역으로 이동하면서 나타난 현상임을 밝히는 중요한 잣대임에 틀림없다. 다만 일본제국주의의 침략성을 밝히지 못하고 한인의 마약 및 아편문제만을 거론하는 것은 자칫 한국인의 습성 및 민족성에 큰 손상을 입히는 결과를 낼 수 있다는 점도 간과해서는 안될 것이다.

화북지역 한인이주와 만주지역 한인이주의 차이를 파악하는 것은 중일전쟁 이후 화북지역 한인이주의 현황과 특징을 밝히는 데 선결작업이라고 할 수 있다. 한인이주를 다룰 때 한인과 일본인만을 다루는 것이 일반적인 현상이었다. 한인이주의 실전무대는 중국이다. 중국이라는 엄연히 현실적 '생의 그라운드'를 고려하지 않은 한인이주에 관한 연구는 충실함을 담보하기 어려울 것이다. 따라서 본고에서는 이 점도 고려하면서 화북지역의 대도시인 북경과 천진뿐만 아니라 산서성과 내몽고 등에도 일정 부분 지면을 할애하고자 한다. 특히 독립운동가 『이자해자전』⁵⁾를 통해 1920년대와 30년대 화북지역의 생활체험을 일정하게 그려봄으로써, '나라잃은 망국노'가 이국땅에서 살아가는 삶의 형태를 생생하게 복원하는 것이 본 발표의 목적이기도 하다.

4) 김광재, 『중일전쟁기 중국 화북지방의 한인 이주와 '노동농장』, 『한국근현대사연구』 11, 1999 ; 김광재, 『중일전쟁 이후 북경지역의 한인단체 연구』, 『한국민족운동사연구』 23, 2004 ; 박강, 『화북 이주한인과 아편마약 밀매』, 『한국민족운동사연구』 55 ; 손영홍, 『북경지역 한인사회 연구』, 국민대 대학원 국사학과 박사학위논문, 2007 ; 손영홍, 『일제의 중국 화북 침략과 북경지역 한인의 마약문제』, 『한국독립운동사연구』 28, 2007.

5) 이자해의 본명은 이동필이다. 자해는 중국으로 망명한 후 개명한 것 같다. 『이자해자전』은 내몽고지역 한인사회와 독립운동을 엿볼 수 있는 사료적 가치가 있다. 『이자해자전』의 입수 경위와 그 가치에 대해서는 한시준, 『이자해자전 해제』, 국가보훈처, 2007 참조.

2. 중일전쟁 이전 한인이주

1) 한인사회의 형성

일제는 화북지역을 ‘北支’라고 칭했다. 공간적 개념으로 화북은 대개 북경, 천진, 산서, 산둥, 내몽고 등을 가리키는 광범위한 지역이다. 이곳에 한인이 본격적으로 이주한 것은 1910년대 이후이다. 흔히 만주와 대별되는 지역적 용어인 관내의 초입이 화북지역이다. 1911년 신해혁명 이후 화북은 정치세력의 각축장이 되었으며, 주체 역시 시기마다 다르다. 심지어 1928년 국민정부가 중국전역을 통일하고 수도를 남경으로 이전하면서 북경을 북평으로 명칭을 바꾸었듯이 정치세력의 헤게모니 싸움이 치열했던 곳이다.⁶⁾

화북지역으로의 한인이주는 1920년대까지는 주로 정치적인 측면이 강했다. 따라서 이주 루트 역시 동북에 거주하거나 그곳에서 독립운동을 전개하는 가운데 피치 못할 사정으로 관내로 이주하는 경우가 그것이며, 다른 하나는 바로 관내로 들어와 화북지역에 자리잡은 형태로 나누어 볼 수 있다. 1920년 일제가 만주지역 독립운동의 근거지를 ‘쇄토’하다는 명목으로 진행한 이른바 ‘간도출병’은 만주지역 한인사회를 요동치게 했다. 이때 저명한 독립운동가들이 활동무대인 만주를 잠시 떠나 북경행 열차에 몸을 실은 경우가 많다. 그 가운데 신팔균의 예가 대표적이다. 만주지역 독립운동가들이 화북지역에 정착하는 과정과 상황을 그려보고자 했다.

신팔균은 신흥무관학교 교관을 뒤로하고 북경행을 택했다. 그가 왜 북경행을 택했는지 명확하지 않지만, 1920년 가을부터 다음해 봄까지 지속되었던 일제의 만주침략 이른바 ‘간도출병’으로 서북간도 독립운동단체의 존립 자체가 불투명하였기 때문이 아닌가 한다. 물론 1921년 여름 이후 독립운동단체는 사태를 수습하면서 전열을 재정비하였지만 신팔균이 몸담고 있었던 신흥무관학교는 그 역사적 임무를 뒤로한 채 폐교하면서 역사의 한페이지를 장식하였다. 따라서 신팔균은 만주지역에서의 활동이 무리라고 판단하고 북경행을 택한 것 같다. 이때 신흥무관학교, 서로군정서와 인연을 맺었던 이세영(이천민)과 보조를 같이 하였으며, 후일 대한통의부에서의 활동시기도 이세영과 함께 하였다. 즉 신팔균의 북경행에는 서로군정서에서 활동한 육군무관학교 동문들의 영향이 컸던 것으로 짐작된다.⁷⁾

북경에 도착한 신팔균은 독립운동가인 이세영, 황학수 등과 함께 북경지역 거주 한인들의 교육과 자치를 위한 한교교육회를 조직하였다. 한교교육회는 1922년 8월 30일 이세영이 주축이 되어 북경에서 조직한 한인교육회이자 자치기관의 성격을 띠고 있었다.⁸⁾ 신팔

6) 1928년 중화민국행정구역도는 현재와는 상당히 다르기 때문에 본고에서는 가능하면 근래 통용되는 것을 따르고자 한다. 武月星, 『中國現代史地圖集』, 41쪽.

7) 신팔균, 황학수는 육군무관학교 동문으로 북경에서 새로운 독립운동을 추진하였다. 황학수가 김학소와 연대하려는 움직임도 같은 맥락에서 이해할 수 있다(한시준, 『황학수의 독립운동』, 한국독립운동사연구소, 2006, 79~80쪽).

균은 한교교육회의 규약을 제정하고 『부득이』라는 신문도 발행하였다. 이 교육회는 기호파가 주축이며, 선언서 등을 작성하여 중국인에게 배포함으로써 교육회 설립과 그 정당성을 홍보하였다. 임원으로는 신팔균을 비롯하여 성준용, 李光, 曹成煥,⁹⁾ 韓世良, 趙東隱, 黃鶴秀, 李世榮, 崔泰允, 金元植, 金承煥, 李社隱, 文秉武, 趙澗松 등이 있다.

한교교육회는 위의 활동 지침을 기초로 북경지역 한인사회의 정착을 위해 노력하였다. 그 구체적인 노력으로는 먼저 재정확보를 통해 보다 역동적인 한인자치를 실현하고 이를 독립운동과 연결하는 데 있었다. 그만큼 한인사회가 지닌 불안정성을 극복하는 것이 1차 목표였다. 뿐만 아니라 신팔균은 김해산¹⁰⁾, 박건병¹¹⁾ 등과 함께 북경한교구락부를 조직하였다고 한다.¹²⁾ 북경한교구락부와 한교교육회가 다른 것인지 또는 동일한 기관을 일체의 착오로 다르게 표기한 것인지 확실치 않지만 신팔균이 북경에서 한인교육 및 자치를 위해 중추적 역할을 담당하였음을 알 수 있다. 나아가 신팔균은 중한호조사에서도 활동하였는데, 그 구체적인 상황은 확실하게 드러나지 않고 있다.¹³⁾

내몽고의 대표적 독립운동가인 이자해¹⁴⁾ 역시 일본군의 간도침략으로 서간도에서 정치활동 및 최소한의 안정된 생활을 유지할 수 없다고 판단하고 북경행을 서둘렀다. 3·1운동 이후 서간도로 망명한 이자해는 요녕성 관전현에서의 생활을 청산하고 북경으로 이주하게 된다. 한 개인의 이주 경로를 통해 전체상을 재단하는 것은 무리이지만 『이자해자전』에 나타난 심양에서 북경으로의 행로는 당시 고단한 ‘망국노’의 설움을 보여주기엔 부족함이 없을 것이다.

이자해는 먼저 부친을 북경으로 보내고 본인은 서간도의 이주생활을 정리하고 길을 재촉했다. 심양역에 도착한 그는 여관 주인의 도움으로 북경행 표를 쉽게 구입하였지만 700km의 여정은 그리 녹록하지 않았다. 당시 상황을 보면 다음과 같다.

-
- 8) 『不逞鮮人カ組織スル教育會ニ關スル件』, 『不逞團關係雜件-朝鮮人ノ部-在支那各地(2)』(高警 제3194호, 1922년 10월 9일)
 - 9) 『평산신씨족보』(1992), 317쪽에는 신팔균의 장남 현충의 부인으로 조성환의 딸이 게재되어 있다. 이들이 실제 결혼한 것은 아니지만 족보에 올릴 정도로 밀접한 사이였음을 간접적으로 알 수 있다.
 - 10) 김해산의 본명은 김정묵이며, 김국빈으로 불렸다. 1888년 경북 선산출신으로 1918년 만주로 망명한 후 1919년 북경으로 가 북경한교회를 설립하는 데 주력하였으며, 1926년 북경에서 발표한 대한독립당 북경축성회 조직선언서 발기인으로 활동하였다(『大獨立黨組織 北京促成會ノ宣言書發表ニ關スル件』, 『不逞團關係雜件-朝鮮人ノ部-在支那各地(4)』(朝保秘 제1458호, 1926년 11월 17일). 특히 의열단 북경 특파원으로 일체의 주목을 받기도 하였다(『容疑朝鮮人』, 97쪽).
 - 11) 박건병은 강원도 칠원출신으로 1919년 상해 임시정부에도 관여 했으며, 북경 군사통일준비회 준비 위원으로서 활약했다(『北京에서의 不逞鮮人の 軍事統一會議』, 『不逞團關係雜件-朝鮮人の 部-在支那各地(2)』(高警 제23049호), 1921년 7월 23일).
 - 12) 국사편찬위원회, 『韓國獨立運動史 資料』 37, 2001, 122쪽.
 - 13) 『北京在住朝鮮人ノ最近狀況報告ノ件』, 『朝鮮人ニ對スル施政關係雜件-一般ノ部(2)』(公第92호, 1924년 3월 6일).
 - 14) 이자해는 의사로서 자신의 고향인 평북 중강진에서 개업의로 일하다가 3·1운동 이후 서간도로 망명한 인물이다.

드디어 열차시간이 되어 차에 오르기 시작했으나 검표를 마치고 차에 오른다는 것은 거의 불가능했다. 어떤 사람은 차창으로 물건을 들여보냈고 또 어떤 사람은 차창으로 엮드려 기어 들어가면서 유리를 파손하여 벌금을 내기도 했다. 이런 살벌한 가운데서도 나는 안간힘을 다하여 비록 차에 오르긴 했지만 빈 좌석이 없어 어쩔 수 없이 서 있었다. 승객들이 계속해서 올라오면서 열차 안은 이미 포화상태가 되었다. 차 안의 공기는 나빠지기 시작했고 각종 악취가 코를 찔렀다.¹⁵⁾

약 15시간을 지나 도착한 북경 豐臺역에 하차하여 다시 마차로 근교인 海甸¹⁶⁾에 여장을 풀면서 이자해의 북경지역 생활이 시작되었다. 하지만 그의 말처럼 ‘망국노의 삶’의 환경이니 참아야 한다’라는 현실적 중압감은 쉽게 떨쳐 버릴 수 없었다.¹⁷⁾ 특히 만주지역과 비교해서 한인사회의 규모가 훨씬 작았던 화북지역에서는 한인들이 적응하는데 불리하였다. 이자해가 북경으로 이주할 당시 일제측에서는 북경에 도착한 한인들이 일본관헌에게 거주 신고를 해야 한다고 했지만 일부만이 귀국할 때 필요한 재류증명서를 받았을 뿐 대부분 신고하지 않았다. 이자해가 태원에서 의료활동을 전개할 당시 張家口 일본영사관에서 일본거류민 보호조례에 따라 달마다 의료행위 및 전염병 등에 관한 보고를 의무적으로 해야 한다고 했지만 이자해는 자신이 중국 국적을 획득했기 때문에 그러한 보고를 할 수 없다고 거절했다.¹⁸⁾ 특히 1922년 12월 여행증명서제도 철폐 이후 북경에 진출한 한인 가운데 거주신고서를 제출한 자는 거의 없었다.¹⁹⁾

또한 화북지역에 이주하는 한인들은 아주 적은 이주비용을 지참하였다. 이것은 바로 생활의 곤궁함으로 이어졌다. 북경의 경우 대표적 독립운동가인 우당 이회영 부인은 그 생활이 참담했다고 했다. 1922년 일시 귀국해서 북경으로 올 때 100원도 지니지 못함을 탄식했을 정도로 생활의 곤궁에 맞닿아 있었다.²⁰⁾ 따라서 일반인의 이주비용 역시 100원을 초과한 경우가 많지 않았을 것이다.

한편 만주에서 재이주를 하지 않고 바로 국내에서 이주한 경우에는 보통 천진을 거치는 경우가 많았다. 천진은 북경으로 들어오는 입구이자 대륙에서 나가는 출구이기도 하다. 천진에는 일찍부터 일본 기업이 진출하고 있었으며, 조계지도 형성되었다. 천진은 산동을 제외하면 화북지역의 유일한 항구이자 무역업자가 가장 많은 곳으로, 일본선박회사로는 대판상선회사, 삼정양행, 동흥양행, 기선회사 등이 있었고, 대련·일본·청도·대만간에 선박을 운행하는 무역업자의 금융기관으로서 정금은행·정음은행·조선은행·천진은행 등 여러 은행이 있었다.

15) 國家報勳處, 『李慈海自傳』, 2007, 151쪽.

16) 오늘날 海澱區에 속하는 데 정확한 지점을 현재 확인할 수 없다.

17) 國家報勳處, 『이자해자전』, 153쪽.

18) 위의 책, 215~216쪽.

19) 손염홍, 『북경지역 한인사회 연구』, 44쪽.

20) 李恩淑, 『民族運動家 아내의 手記』, 正音社, 1983, 46쪽.

당시 천진으로 이주한 한인에 대해 천진영사관에서는 조선내에서 경제적 불황으로 생존 경쟁에 실패한 조선인이 그 활로를 해외에서 구하기 위해 이주했다고 진단했다. 그 일부분을 정리하면 다음과 같다.²¹⁾

이주조선인 대부분은 조선내에서 생존경쟁에 실패한 자들로 조선내에서는 어떠한 전문 지식 혹은 기능이 없기 때문에 그 호구를 지속할 수 없었다. 이들은 조선내에서 선주자 혹은 여행자 등의 과장된 담화관찰 등에 따라 당 지방을 동경하여 내주자의 다수는 어떠한 자금을 가지지 못하였으며, 점차 목적지에 도달할수록 여비만을 소지하여 도래한 자들이다. 도착 후 바로 일상생활에서도 궁핍하여 연고가 있는 자 내지는 지인 동향의 자들과 의탁하여 기식 후禁제품인 물핀 등을 밀매하는 방법을 습득하여 독립하기에 이른다. 내주자의 일부분은 조상전래의 전답을 매각하여 100원 내지 500원의 자금을 휴대하고 도래하여 물핀을 파는 일에 종사하고 있다.²²⁾

일제로서는 한인들의 화북이주가 정상적인 현상이라고 판단하기에는 무리라고 인식했다. 특히 아편 밀매같은 '부정업'에 종사하기 때문에 한인들에 대한 현지인들의 평판이 좋지 않았으며, 이것이 일본인에 대한 인식으로 이어지는 것을 경계했다.

화북지역 한인 이주의 통계는 정확하지 않지만 북경의 경우 1927년 일본공사관의 조사에 의하면 북경지역 한인수는 약 500 여명에 지나지 않았다.²³⁾ 그 수는 1937년 중일전쟁 이전까지 급격하게 증가하지는 않았다. 천진지역의 경우 1932년 말 700여 명, 1933년 말 1,400여 명이였다. 한인커뮤니티의 규모가 작았기 때문에 외부 충격에도 요동칠 수밖에 없는 상황이었다.

2) 거주지의 외연 확대

화북지역 한인 이주는 북경을 중심으로 이루어졌다. 북경에 이주한 한인들은 오늘날 望京(왕징)처럼 한인타운을 형성하지는 못했다. 또한 천진이나 상해처럼 조계지가 없기 때문에 이를 중심으로 거주지를 개척해 나갈 수 없었다. 한인들은 일반적으로 중국인과 같은 지역에 혼재하여 거주하였다. 특히 상인의 경우 신속한 이동과 빠른 자금력이 관건이기 때문에 주로 여관을 이용하였다. 이들이 가장 많이 이용했던 여관은 正陽門 밖에 위치하였

21) 일제는 한인 이주원인을 한인의 내재적인 측면에서만 찾았다. 하지만 보다 근본적인 원인은 자신들에게 있음을 애써 외면하고 한인들의 경제상황에 대해 초점을 두고 각 지역 이주에 대해 평가하고 있음을 알 수 있다. 1930년대 특히 만주사변, 중일전쟁 등 국제정세의 변화로 한인이주가 일시적으로 크게 증가하는 현상을 보이고 있다. 이 부분에 대한 일제의 판단은 애매모호하기까지 하다. 물론 자신들의 역린을 건드릴 수 없다는 한계를 드러내놓고 있기 때문에 나타난 현상이라고 할 수 있다.

22) 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년.

23) 『北京在留民戶口調査表(1927)』, 『管内狀況報告』, 국사편찬위원회 소장자료. 일본공사관에서 조사한 내용이기 때문에 독립운동가들에 대한 부분은 누락되었을 것이다. 따라서 이것을 포함해서 산출하면 북경지역 한인수는 이 보다 많을 것이다.

다. 이곳을 이용하는 상인들은 일반인들보다 활동면에서 훨씬 자유로웠다.²⁴⁾ 일반 민박을 이용하는 경우 중국 관헌의 감시와 마찰이 불가피하게 발생하는 경우가 종종 발생했기 때문에 상인들은 여관을 주로 이용하였다.

독립운동가들 가운데 이회영의 집은 회합의 장소이자 독립운동의 근거지였다. 하지만 북경주재 일본공사관의 감시로 자주 거주지를 이전해야 했다. 이회영은 처음 후고루원 골목에 집을 얻었는데 북경지역 독립운동가들의 거점으로 바뀌면서 거처를 서직문 이안정으로 옮겼다. 여기에는 신채호, 김창숙, 유자명, 정화암, 이을규, 이정규, 백정기 등이 왕래하였으며,²⁵⁾ 특히 아나키스트의 활동 거점이 되었다.²⁶⁾ 신채호의 거주지는 당시 석등암이었으며, 일정 거주지역에 집단적으로 거주하지는 않았다. 일제 정보문서에 의하면 ‘동가식 서가숙’하는 경우가 많았다고 한다.²⁷⁾

북경지역에서 일정한 집거구를 형성하지 못한 한인들은 주변 지역 예컨대 해전, 산서성 大同 등으로 거주지를 이전하였다. 이회영 처럼 독립운동을 전개하기 위해 북경과 천진을 오가면서 거처를 정한 이들도 있지만²⁸⁾ 대체적으로 거주지는 경제적인 원인 및 주변 환경의 영향으로 이전하는 경우가 대부분이다. 대표적으로 이자해의 경우, 북경을 떠나 해전에 정착하였다. 해전에 정착한 이자해는 북경에서 병원을 개설하기 위해 영업허가증을 발급 받으려고 성 안의 유관기관을 찾아갔지만 그 과정에서 중국 관리의 부정부패에 직면했다.²⁹⁾ 결국 우여곡절 끝에 의료사업 허가증을 발급받은 이자해는 亞新醫院을 개설하여 병원 진료를 시작했다.³⁰⁾ 이자해는 의료사업과 함께 해전농장, 즉 자구원³¹⁾ 경영에도 관여하였다.

해전농장은 안창호가 1910년대부터 추진했던 독립운동기지 건설 가운데 하나로 설치되었던 곳이다.³²⁾ 해전농장의 경영 주체는 안창호, 안정근, 김승만, 이동필 등 4인이었으며, 주로 수수 등을 파종하여 수확물을 거두었다.³³⁾ 하지만 해전농장이 소기의 목적을 달성하지 못하고 북경대학에 매각되면서 그곳에 종사한 20여 명의 한인들은 새로운 직업과 거처를 마련해야만 했다. 이자해의 부친은 해전농장이 해체되자 국내로 역귀환하였다.³⁴⁾

24) 손염홍, 『북경지역 한인사회 연구』, 43~44쪽.

25) 유자명의 경우에는 그가 천진으로 가기 전 한동안 우당 이회영 집에서 생활하였다(유자명, 『한 혁명자의 회억록』, 98쪽).

26) 국가보훈처, 『독립유공자 증언자료집』 1, 141쪽.

27) 『北京天津及附近朝鮮人ノ狀況報告書進達ノ件』, 『朝鮮人ニ對スル施政關係雜件一般ノ部(3)』, 1925년 3월 20일.

28) 정화암, 『이 조국 어디로 갈것인가』, 69쪽.

29) 國家報勳處, 앞의 책, 157쪽.

30) 『安昌浩及海甸農場ニ關スル件』, 『不逞團關係雜件-朝鮮人ノ部(在支那)』 3, 1924년 8월 2일.

31) 치구원이라고도 함(위의 자료)

32) 안창호는 1910년대 밀산의 십리와를 비롯해서 치치하얼 북서쪽에 위치한 용강현에도 농장을 설치하여 독립운동기지로 건설하려고 했다.

33) 『安昌浩及海甸農場ニ關スル件』, 『不逞團關係雜件-朝鮮人ノ部(在支那)』 3, 1924년 8월 2일.

34) 國家報勳處, 앞의 책, 173쪽.

북경을 중심으로 형성된 화북지역 한인사회는 점차 張家口와 대동으로 그 영역을 넓혀 갔다. 장가구는 내몽고 및 시베리아에서 북경으로 올 때 거치는 교통의 요지이다. 북경과 장가구간 철도는 1902년에 부설되었고, 1921년 이후 포두까지 이어졌다. 장가구는 일찍이 1911년 독립군들이 이곳을 거쳐 내몽고로 이주하였으며, 특히 1924년에는 서북군관학교가 설치되면서 한국독립운동가 10여 명이 수학하였다.³⁵⁾ 장가구에는 金仁國이 十金醫院을 운영하고 있었다.³⁶⁾ 이곳에서 그는 중국인과 몽고인, 일본인까지 진료했으며, 많은 자산을 확보했다고 한다.³⁷⁾ 한인사회의 규모를 정확하게 가늠하기 어렵지만 장가구는 내몽고와 북경지역을 잇는 중간지역이기 때문에 거주지가 집약적으로 형성되기 보다는 경유지로서의 기능을 한 것 같다.

이에 비해 綏河省(현 내몽고자치구 일부) 包頭는 황하의 수운으로 농업 용수가 풍부하고 토지가 비옥하여 일찍이 안창호와 박용만 등이 주목했던 곳이다.³⁸⁾ 1923년 안창호는 포두에 독립운동기지를 건설하고자 조병준과 申禹鉉을 파견하여 농장을 개척하였다.³⁹⁾ 이 농장을 배달농장이라 하였다. 위의 두명 이외에 강우진, 최준, 허선 등 5명이 주축이 되어 자금 3천원으로 포두에서 약 60km 서쪽에 자리를 잡았다.⁴⁰⁾ 당시 농장 경영에 참여한 한인은 100여명에 달하였다.⁴¹⁾ 이 농장은 1937년까지 운영되었으며, 중일전쟁 이후 일제에 의해서 한인들이 구축하였다. 이 뿐만 아니라 천진에서 이주한 金光이 세운 靑山의원과 경성에서 온 김진성이 세운 濟衆의원이 중국인과 한인을 상대로 영업을 하였다.⁴²⁾ 포두지역의 한인사회는 독립운동가들의 독립운동기지 개척으로 형성되기 시작하였으며, 1920년대말까지 이주한인의 행렬은 지속되었다.⁴³⁾

천진의 경우, 거주지의 외연확대가 명확히 보이지 않는데, 천진지역은 1900년 8개 연합국이 점령한 후 6개의 조계지가 형성되었다. 하지만 제1차세계대전 패전국인 독일과 10월

35) 『在北支朝鮮人概況』, 55쪽.

36) 『北京天津及附近朝鮮人ノ狀況報告書進達ノ件』, 『朝鮮人ニ對スル施政關係雜件一般ノ部(3)』 1925년 3월 20일.

37) 북경에 거주한 백정기가 장가구에서 찾은 의원이 바로 김인국이 운영하는 의원이 아닌가 싶다(정화암, 앞의 책, 72쪽).

38) 『北京天津及附近朝鮮人ノ狀況報告書進達ノ件』, 『朝鮮人ニ對スル施政關係雜件一般ノ部(3)』 1925년 3월 20일.

39) 『동아일보』 1923년 11월 28일자. 「내몽고포두에서 신한촌 경영」

40) 2005년 독립기념관 실태조사시 확인. 내몽고조선족연구회 명예회장 廉皓 선생(74세)의 사전 현지답사 결과 중탄일대에서는 조선족의 거주 흔적을 전혀 발견할 수 없었다. 거기서 남쪽 황하 방향으로 8km 쯤 내려가 趙家마을이라는 곳에 조선족 일가가 살고 있다는 사실을 확인하였다. 현지에는 조병준의 동생 趙秉涉의 손자가 되는 趙東春씨(63)를 비롯해 3대 6식구가 함께 살고 있었다. 조동춘씨는 집안의 족보를 비롯해 할아버지의 유품을 간직하고 있었는데, 그의 증언에 의하면 조병준 선생 유족들은 해방후 모두 귀국하고, 형 東哲이 백혈병을 앓는 관계로 자신의 부모와 3형제만이 남았다고 한다. 조씨 일가가 과거에 살던 배달농장 자리는 조동춘 씨의 집에서 서쪽으로 2km 쯤되는 지점에 있는데, 현지 주민들은 그곳을 ‘上海地’라고 부르고 있었다.

41) 『內蒙古包頭鎮地方ノ狀況ニ關スル件』, 『不逞團關係雜件-朝鮮人ノ部-在滿洲ノ部(37)』(1923년 11월 12일)

42) 위의 자료.

43) 『包頭附近鮮人狀況ニ關スル件』, 『滿蒙各地ニ於ケル鮮人ノ農業關係 雜件(1)』(1928년 5월 10일)

혁명 이후 러시아가 조계를 취소하면서 프랑스·영국·일본·이탈리아 4개 조계지가 존속하였다. 천진지역 한인 거주지는 주로 조계지를 중심으로 형성되었다. 이회영과 같은 독립운동가 및 유학생들은 주로 프랑스 조계에 거주하였으며, 상업에 종사하는 한인들은 일본 조계에 거주하는 것이 일반적인 현상이었다.⁴⁴⁾ 독립운동가 유자명이 1923년 겨울 천진에서 정착한 곳도 프랑스 조계였으며, 이곳을 기점으로 거류민단을 조직하고 도산 안창호를 초청하여 한인들에게 독립운동을 고취시킨 곳도 프랑스 조계라고 할 수 있다.⁴⁵⁾

하지만 정착과정은 순탄하지 않았다. 당시 거주 가옥의 임차 및 매입은 현지법에 의해 적용되기 때문에 이주 한인들이 정착 초기에 많은 난관에 봉착하는 것이 다반사였다.⁴⁶⁾ 일본인의 경우에도 토지가옥을 구입할 수 없는 경우가 많아 주로 동경토지건물회사 소유 가옥에 거주하거나 일부는 중국인 소유 가옥에 거주할 정도로 거주환경이 좋은 편은 아니었다.⁴⁷⁾

3) 생활실태와 직업구조

1920년대 화북지역 이주한인들의 곤궁함은 이루말할 수 없었다. 자산가 및 일시적인 거주자들은 비교적 생활상태가 양호했지만 대부분의 한인들은 궁핍함을 벗어나지 못했다. 1927년 독립운동가 정화암은 북경에서 상해로 가는 도중 천진에 거주하고 있던 이회영의 집을 방문하였는데 당시 상황을 다음과 같이 묘사하였다.

南開의 우당 이회영의 집을 찾아 갔더니 식구들의 생활이 여전히 어려워 그 참상이 말이 아니었다. 끼니를 해결하지 못하고 굶어 누워 있었다. 학교에 다니는 圭淑이의 옷까지 다 팔아서 입에 풀칠할 정도여서 누구하나 나다니지도 못하는 형편이었다.⁴⁸⁾

이것은 비단 우당 이회영의 경우에만 국한된 것은 아니다. 이자해가 북경에 정착한 후 병원을 개업했음에도 불구하고 생활은 넉넉하지 않았다.⁴⁹⁾ 1920년대 화북지역의 화폐상황은 불안하기 그지 없었다. 이자해가 산서성 대동과 태원에서 진료할 때 진료비를 산서성 수표로 받았다가 이후 그 가치가 절반 이하로 폭락하면서 생활고가 더욱 가중되었다.⁵⁰⁾ 이렇듯 한인들이 생존에 필요한 자금을 확보하는데 군벌들의 역학관계가 중요한 변수로 작용하였다.⁵¹⁾ 당시 한인들의 생활 정도는 국내 농부의 처지와 크게 다를 바가 없었고 겨우

44) 유자명, 『한 혁명자의 회억록』, 100쪽.

45) 유자명, 위의 책, 101쪽.

46) 李恩淑, 『民族運動家 아내의 手記』, 62쪽.

47) 天津總領事館警察署, 『管内狀況報告』(1927년).

48) 정화암, 앞의 책, 73쪽.

49) 북벌이 진행되면서 화폐가치는 변동폭이 컸으며, 1928년 북벌 완료 후에 국민정부는 법정통화인 법폐의 성립을 선언했다. 그 해말 중앙은행이 설치되었지만 1930년대 중일전쟁이 발발하면서 화폐가치의 불확실성이 증가되었다(岩武照彦, 『近代中國通貨統一史』 上, みすず書房, 1990, 5쪽).

50) 國家報勳處, 앞의 책, 214쪽.

겨우 연명하는 수준이었다.⁵²⁾

불안정한 정세와 생활고 그리고 중국인들의 차별 또한 이주 한인들이 감내해야할 몫이었다. 독립운동가들은 중국인 유지와 각별한 관계를 유지하면서 다방면에서 독립운동의 지지를 끌어내기도 했지만⁵³⁾ 일반인들은 일본인들의 감시와 타협 속에서 중국인들과의 갈등 앞에 놓이게 되었다.⁵⁴⁾ 특히 안정된 직업보다 한시적인 직업군에 속한 한인들의 경우에는 현지 사회에 적응하는데 중국인들과의 반목은 치명적이었다.⁵⁵⁾ 1920년대까지 화북지역의 한인들 직업군 역시 제한적이었다는 데 더 큰 문제가 도사리고 있었다. 곧 전문성이 결여된 도시 생활은 도시 하층민으로 편제되는 수순임에 틀림없다. 다음은 중일전쟁 이전 화북지역 한인 직업과 상거래 기관을 정리하였다.

〈표 1〉 중일전쟁 이전 한인 직업 현황

북경(1933)			천진(1933)		
직업	호수	비고	직업	호수	비고
의사	2		의사	2	
치과의사	2		조계국원	5	
악기상	1		우육수출업자	1	
요리점	4		토목건축업	1	
백미상	1		자동차대부업	1	
양봉재봉업	1		매약상	1	
냉면업	2		상점원	2	
두부제조업	1		직공	6	
신문취급판매업	3		조계내요리점업	5	
골동상	3		작부	41	
인삼취급점	2		조계외특별1구 요리점	2	미군 대상
접대부	14		동국자 요리점	1	프랑스군 대상
무직	201		혼업부수	71	

* 北平警察署, 『1933년 管内狀況報告書』. 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년.

북경지역 의사, 치과의사, 요리업자, 악기상은 이미 중국인으로 귀화한 자들로 중국관헌의 허가를 받고 영업하였다. 또한 일정하게 독립운동가들을 지원하고 있었다.⁵⁶⁾ 특히 요리점을 경영하는 경우 주로 미군들을 대상으로 영업하고 있었다. 이자해의 지인 박실녀가 운

51) 國家報勳處, 위의 책, 205쪽.

52) 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년.

53) 손염홍, 앞의 글, 54쪽.

54) 北平警察署, 『1933년 管内狀況報告書』.

55) 『在北支朝鮮人概況』 참조

56) 北平警察署, 『1933년 管内狀況報告書』.

영한 ‘경성식당’과 도산의 지인 김우경이 운영한 식당도 미군을 상대로 영업하였다.⁵⁷⁾ 당시 1920년대 북경에는 미군들이 상주하고 있었으며 그들을 상대로 한 사업이 많은 이득을 보았기 때문에 가능한 일이었다. 1933년 말 당시 자산 1만원 이상 보유자는 4명이며, 1천 원 이상은 11명이었다. 특히 500원 정도의 자산을 가진 자들은 헤로인 등 마약류에 손을 대는 경우도 있었다.⁵⁸⁾ 무직 가운데 극빈자는 40호 정도였다.

천진지역은 북경과는 달리 조계지역이 존재하고 있었기 때문에 이곳을 무대로 활동하는 직업군들이 나타났다. 하지만 1933년 천진 거주 한인의 80% 정도가 무직이며 이들 대부분은 아편과 같은 금지품목을 취급하였다는 점에서는 북경과 유사하다.⁵⁹⁾ 특히 천진은 무역이 급격하게 발전하면서 유흥업에 종사하는 한인작부들이 북경지역에 비해 많은 편이었다.⁶⁰⁾ 천진 역시 정업 종사자 보다 부정업 종사자가 많다는 것은 한인사회가 불안하게 형성되었음을 의미한다. 1929년 말 천진지역 한인 가운데 몰핀 중독자가 20% 정도로 생활의 궁핍함뿐만 아니라 희망조차 포기한 경우도 없지 않았다.⁶¹⁾ 일본 정보문서에 의하면 경제적 어려움 및 정착지 부적응자를 천진영사관에서 국내로 송환시키려고 하는 한인들이 달마다 30여 명을 헤아린다고 했다.⁶²⁾ 따라서 이주 한인들을 경제적으로 안정시키기 위해 해당 영사관에서는 거류민단과 협력하여 한인들의 보호에 적극 나서야 된다는 논리를 폈다.⁶³⁾

사회적 고립 속에서 한인들은 또다른 의지처를 찾게 되었다. 바로 일본인거류민회였다. 1933년 북경지역 일본인 거류민회의 회원은 502명이었으며 그 가운데 한인은 84명이었다.⁶⁴⁾ 전년에 비해 한인은 56명 증가하였다. 한인이 일본인거류민회에 가입하게 된 동기는 무엇보다도 생활안정이며, 아동교육을 위해서이다. 1929년 천진지역 총영사관에서도 한인간의 친목과 조화를 내세워 일본 조계 내에서 조선인친목회를 개설하였다. 일본영사관의 지휘를 받으면서 무전여행자, 극빈자 구제, 국내 송환 업무를 추진하고 있었다.⁶⁵⁾ 하지만 일제는 일본 거류민회의 입회뿐만 아니라 친목회를 경영하기 위해 한인 유치원을 설치하였다고 선전했는데, 이는 식민지 교육의 연장선상에서 ‘충량한 신민’의 양산을 위한 조치였다고 볼 수 있다. 왜냐하면 천진 조계지를 중심으로 형성된 한인사회에서 한인을 ‘준일본인’으로 만들기 위한 가장 적합한 방법이 교육이었기 때문이다. 당시 천진에는 일본인 민단과 연계된 한인 취학 학교들이 증가하였다. 그 가운데는 천진상업학교에 8명이 재학하였으며 천진일본고등여학교

57) 國家報勳處, 위의 책, 170. 177쪽.

58) 北平警察署, 『1933년 管内狀況報告書』.

59) 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년.

60) 1927년 조사 당시에는 50여명의 한인 작부가 있었다(天津總領事館警察署, 『管内狀況報告』(1927년)).

61) 『警察事務概況報告ノ件』, 1931년 2월 7일.

62) 위의 자료.

63) 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년.

64) 北平警察署, 『1933년 管内狀況報告書』.

65) 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년. 구제 및 송환인원은 70인이며, 구제액은 430원이었다.

에도 7명이 수학하였고 가장 많은 곳은 천진일본소학교 심상과로 89명이었다.

일본거류민회 입회로 한인들은 중국인들과의 마찰을 피할 수 없었다. 중국의 이른바 '구망운동'이 전개되면서 화북지역을 비롯한 중국 전역에서 일본 거류민단을 공격하는 일이 자주 발생하였다.⁶⁶⁾ 일제가 1932년 5월 천진에 주둔하고 있던 군대를 북경시내로 파견한 것도 이와 같은 맥락에서 비롯된 것이다.⁶⁷⁾ 일제의 만주침략과 중국 구국운동의 확대로 이주한인은 이중적 곤란을 겪게 되었다.

3. 중일전쟁과 한인사회의 변화

1) 화북정권의 성립과 한인사회

중국을 둘러싼 열강들의 세력균형은 1937년 7월 7일 중일전쟁을 기점으로 파열음을 냈다. 북경을 침략하면서 개시된 중일전쟁으로 중국 국민당 정부는 그 동안 소극적으로 전개했던 항일전을 전면적으로 확대해 나갔다. 노구교에서 시작된 전쟁은 북경 전체로 확대되었으며, 북경이 전란의 소용돌이에 빠지자 한인의 상당수는 일본 관현에 의탁하여 생활했다.⁶⁸⁾ 하지만 대규모의 피난민이 발생하고 만주 및 국내에서 대규모 이주가 진행되면서 규모면에서는 이전과는 비교할 수 없을 정도로 확장되어 갔다.

중일전쟁 이전에는 화북에 기찰정권과 기동자치정부가 존재하였고 일본과 밀접한 관계를 맺고 있었지만 전쟁 이후 기찰정권은 송석원 등 29군의 패퇴에 따라 자연스럽게 궤멸되었으며, 정권 책임자가 부재하여 치안도 어지러운 상황이었다. 이로 인해 천진에는 전국 무총리 高凌霨를 위원장으로 하는 천진치안유지회가 성립되었으며,⁶⁹⁾ 북평에는 江朝宗을 위원장으로 하는 북평치안지원회가 만들어졌다.⁷⁰⁾ 일제는 현지 안정을 위해 관동군 1개 사단을 동원하였다.⁷¹⁾ 이로써 1937년 7월 29일 북경이 함락되었으며, 일제에 의해 북평시 지방유지회가 조직되고 새로운 시정부가 수립되었다. 그리고 그해 12월 괴뢰정부인 중화민국임시정부를 수립하여 화북지역을 국민정부에서 분리시키려고 했다.⁷²⁾ 일제는 빠르게 점과 선을 연결하는 대륙침략정책으로 1940년 3월 남경에 왕정위를 내세워 중화민국임시정부를 수립하였으며, 북경은 '화북정무위원회'로 이름이 바뀌었다.⁷³⁾

66) 天津總領事館警察署, 『警察事務統計等報告ノ件(管内狀況)』, 1933년.

67) 손염홍, 앞의 글, 132쪽.

68) 손염홍, 『북경지역 한인사회(1920~1948) 연구』, 국민대 박사학위논문, 2007, 167쪽.

69) 『每日申報』, 『天津治安維持會 委員長에 高凌霨氏』, 1937년 8월 2일자.

70) 『更生支那의 建設報』 『在滿朝鮮人通信』 69호, 28쪽.

71) 中央檔案館, 『華北事變』, 中華書局, 2000, 852쪽.

72) 손염홍, 앞의 글(2007), 168쪽.

73) 화북의 신정권은 1937년 12월 14일 성립, 중화민국임시정부로 북경에서 성립, 국민정부가 항일과 용공을 정책으로 함에 대하여 임시정부는 당연 친일과 방공을 기치로 하였다.

화북지역에서의 산업개발은 새로운 중국을 건설하는 데 초점을 맞추었다. 일제와 화북정권은 1939년 3월 王國敏을 회장으로 하는 ‘日支經濟協議會’를 발족시켰으며, 임시정부에서는 실업제 구제부를 따로 설치하여 엔블릭 경제의 걸림돌을 제거하려 했다.⁷⁴⁾ 당시 협의된 구체적인 내용은 1941년까지 제1기로 하는 경제계획 5개년 계획을 실시하여 석탄개발 등 광업자원 개발 및 교통 통신설비의 정비와 물가수급, 또 일제로서는 가장 시급한 문제인 치안문제를 해결하는 것이었다.⁷⁵⁾ 한편 일제가 세운 통합기관인 중화민국연합위원회는 1939년 9월 22일 북경에서 성대한 성립전례식을 거행하고 그 회의에서 공통정무인 체신, 금융, 해관, 납세, 염무, 문교 및 사상 대책 등의 사항에 대한 방침을 정하였으며, 그 일환으로 은행 발행권을 통일하여 새로운 지폐를 발행하는 동시에 구통화관리관법을 공포하였다.⁷⁶⁾

대륙 낙토라는 선전을 믿고 만주지역에서 재이주한 한인들로 북경지역 한인사회는 중일전쟁 이전과는 달리 그 증가세가 두드러졌다. 이들은 주로 안정적인 직업을 갖지 못했다. 중일전쟁 소용돌이 속에서 일제가 치안을 장악했지만 한인들은 손쉽게 돈벌 수 있는 이른바 ‘한탕주의’에도 몰두하였다. 중일전쟁 이후 북경의 한인들은 사업규모 면에서도 일본인에 비해 영세한 편이었지만 한인들은 전쟁 특수 속에서 비교적 자금 회수율이 빠른 소매업에 종사하였다.⁷⁷⁾ 중일전쟁 이후 화북지역 한인이주 증가세는 두드러졌다. 일본군의 전선 확대로 한인들은 그 노선을 따라 이주하는 경우가 많았다.

1940년 화북지역 한인이주 현황

지역	호수	인구	전체인구대비(%)	비고
북경	6,029	17,218	25.2	
천진	4,452	18,421	26.9	
장가구	1,179	3,166	4.6	
석가장	1,843	8,624	12.7	
태원	1,745	6,305	9.1	
호화	319	985	1.5	내몽고 호화호특
제남	1,009	3,569	5.2	
청도	627	2,582	3.7	
서주	1,956	7,060	10.3	
지부	179	532	0.8	연태
합계	19,338	68,462	100	

* 『在北支朝鮮人概況』, 1940, 15~16쪽.

* 지역은 대사관 및 영사관 설치지역임

74) 『北京益世報』, 『臨時政府各會部救濟失業人士』, 1939년 5월 3일자.

75) 『北支建設 1周年의 足跡』, 『在滿朝鮮人通信』 62호,

76) 『華北建設에 並行하는 新幣制의 確立完成』, 『在滿朝鮮人通信』 65, 25-26쪽

77) 김광재, 『중일전쟁 이후 북경지역의 한인단체 연구』, 『한국독립운동사연구』 23, 234쪽.

중일전쟁 직전 북경과 천진의 인구가 각 1,500명 내외였음을 감안하면 중일전쟁 이후 화북지역의 증가세가 더욱 두드러졌음을 알 수 있다. 동북지방에서의 재이주, 국내에서의 이주가 급속하게 증가하였다. 북경과 천진은 한인 이주민이 50% 이상을 차지하였으며, 장가구와 석가장 지역을 합치면 하북지역에만 70%의 한인이 집중되어 있음을 알 수 있다. 이러한 가운데 독립운동세력들은 일제의 침략을 피해 새로운 거주지를 찾았다. 이자해의 경우 산서성 대동이 일제에 의해 함락되자 10년 생활을 청산하고 내몽고 포두로 이동하였다.⁷⁸⁾ 당시 상황을 보면 다음과 같다.

우리의 목적지가 포두이기 때문에 수원역에 도착한 후 다시 차를 갈아타야 했다. 그러나 차량부족으로 인해 우리는 차를 탈 수 없었다. 많은 사람들과 함께 역 근처에 머물며 무기한으로 기다리고 있을 때 마침 이곳에서 열차 역 책임자와 아주 친한 친구를 만났다. 다행히 그의 도움으로 작은 군용차를 타고 순조롭게 포두에 도착했다. 포두에 도착한 우리는 잠시 모 친척집에 머물렀으나 사람이 너무 많고 늘 잡음이 생겨 결국 며칠만에 부근에 있는 방을 빌려 이사했다.⁷⁹⁾

포두로 이동한 지 한달만에 일본군이 포두를 점령하자 이자해는 다시 河套와 五原으로 근거지를 이전하였다.⁸⁰⁾ 이자해는 직업이 의사이며 또한 대한민국임시정부와 연결되었기 때문에 일본군을 피해 더 깊숙한 곳으로 이동할 수밖에 없었다. 중일전쟁 이후 화북지역 한인 의사수가 66명으로 적지 않은 수임에도 불구하고 일제로서는 화북지역의 전선확대와 함께 전선의 중환자를 치료하기 위해 많은 수의 한인 의사가 필요하다고 판단했고 조선총독부의 촉탁의의 증설과견을 검토하기까지 했다.⁸¹⁾

한편 중일전쟁이 발발하면서 조선총독부는 자신들의 세력을 이식하기 위해 북경 조선인회를 적극적으로 활용하였다.⁸²⁾ 북경조선인회는 1933년 창립되었으며, 주로 조선총독부의 영향 아래에 있었다. 초등학교를 설립하여 황국신민 교육을 실시하였으며, 한인에 대한 위생, 구호 등의 사무를 담당했다. 1938년 일본 민단법과 내선일체의 방침에 따라 해산되기까지 한인 지배 강화정책의 하부기관으로서의 역할을 수행하였다. 이밖에도 대일본국방부인회 조선분회, 화북반도인협회, 북경협려회, 금요회 등의 사회단체가 설립되었는데 대부분 일제의 영향에서 자유롭지 못했다. 독립운동단체들이 거의 와해되거나 다른 곳으로 이전한 상태에서 북경의 한인들은 일본군의 전쟁에 협력하는 경향을 보였다. 물론 이 와중에도 일부는 독립운동세력과의 끈을 놓지 않은 경우도 있었다.

또한 일제는 중일전쟁 이후 새롭게 재편되는 중국의 새로운 질서에 대하여 한인의 역할을 강조하였다. 이에 따라 조선총독부에서는 화북방면으로 조사반을 파견하여 당지의 문

78) 國家報勳處, 앞의 책, 248~249쪽.

79) 위와 같음

80) 國家報勳處, 위의 책, 250쪽.

81) 『在北支朝鮮人概況』, 31쪽.

82) 북경지역 한인단체에 대해서는 김광재, 앞의 글, 242~256쪽 참조.

화, 경제, 산업 전반에 걸쳐 조사를 실시하였으며, 향후 한인의 대륙진출에 초석을 마련해야 한다고 강조했다.⁸³⁾ 일제로서는 이주한인들이 화북지역에서 활동해야 하는 당위성을 흥아성업의 완성에 있다고 선전했다.⁸⁴⁾

봉천의 興亞協會에서는 만주지역 한인뿐만 아니라 국내 한인들이 본격적인 ‘대륙진출’이라는 거대한 역사적 사명앞에 직면해 있다고 하였다.⁸⁵⁾ 즉 일제는 한인이 개척자임을 강조하면서 화북으로의 이주를 더욱 독려했다. 특히 한인들이 ‘제국의 신민’으로서 품위를 지키면서 화북 각지에 ‘친일세력’의 부식을 위해 힘쓸 것을 강조했다. 창씨개명은 그것의 연장선상에서 비롯된 것이다.⁸⁶⁾ 이처럼 한인이주는 자율과 강제가 혼용된 형태로 나타났다.⁸⁷⁾ 1945년 내몽고 포두와 수원에만 한인 청년 2,000여 명이였다는 사실에서 자발성 보다는 강제성이 이주의 더 중요한 동력이었음을 알 수 있다.⁸⁸⁾

2) 직업의 차별화와 왜곡

중일전쟁 이후 새롭게 재편된 한인사회는 먼저 일본군의 영향력 아래에 놓이게 되었으며, 한인들의 직업 역시 이와 연계되어 있는 경우가 많았다. 화북지역 한인사회의 가장 큰 비중을 차지하고 있는 북경과 천진지역은 직업면에서도 중일전쟁 이전과는 그 다양화에서 크게 차이가 난다. 먼저 한인사회가 팽창하면서 직업군 역시 다양한 형태로 나타났다. 전 시경제 속에서 특수를 잡은 자본가들도 등장하였다. 화북지역에서 10만원 이상의 자산가들은 북경 9명을 비롯해 26명이었다. 그 가운데 50만원 자산가도 5명이나 되었다.⁸⁹⁾ 金(子)政雄은 광업에 종사하면서 50만원의 자산을 보유하고 있었으며, 김연수와 같이 만주와 화북에서 일본세력의 협력을 받아 자산을 형성하는 경우가 대부분이다.⁹⁰⁾ 즉 군과 기업체의

83) 『在滿朝鮮人通信』 62, 91쪽.

84) 『朝鮮總督府에서 中日戰爭에 대한 認識』, 『在滿朝鮮人通信』 66호, 23쪽. 65호 통신 40쪽. 흥아협회에서는 일본의 화북지역 통치 목적을 다음과 같이 평가했다. 먼저 일본민족국가의 산업고도화의 목표 아래 첫째 일본중공업 건설을 위하여 중국중공업자원의 개발, 둘째 일본중공업재편성의 과정에서 내지농산물 감소를 만주와 중국에서 보충, 셋째 일본의 경공업의 설비는 중국에 이행하게 하고 일본의 소비품의 수요를 중국 산업에 구하는 것 등이다. 그리고 동아의 국방을 위한 협동이란 목표 아래 첫째 동아권을 일체로 하여 국방을 완성케 하기 위해 日滿支는 군사적으로 인적, 물적 방면에 협동, 둘째 방공을 위한 지역에는 각기 국방시설 설치, 셋째 동아의 지역에서 노동생산가치가 서구의 그것과 평등하게 교환되는 체제하에 세계경제에 日滿支의 요구를 제기 할 것 등이다.

85) 흥아성업과 동아민족의 단결이라는 구호는 언론을 통해 화북지역으로 퍼져 나갔다(『新天津報』, 1943년 7월 9일자).

86) 『在北支朝鮮人概況』, 51~52쪽. 1940년 6월 현재 북경을 비롯한 한인들의 창씨 개명은 10% 정도였다.

87) 손염홍, 앞의 글, 2007, 172쪽.

88) 國家報勳處, 『이자해자전』, 336쪽. 1939년 5월 박영희, 김동인, 임학수 등이 북경을 비롯해 화북지방에 일본군을 위로한다는 명목으로 여행한 후 좌담회를 통해 화북상황을 자세하게 소개하였다. 여기에서 이들은 일본군의 전황을 소설로 창작할 것을 담담하게 말했다(『文壇使節 歸還報告, 皇軍慰問次 北支에 단여와서』, 『三千里』, 11권 제7호, 1939).

89) 『在北支朝鮮人概況』, 17~18쪽.

유착관계가 당시 사업체를 운영하는 데 일반적인 현상이었다. 1940년 화북지역 한인 직업 현황을 보면 다음과 같다.

〈표〉 화북지역 한인 직업현황(1940년)

직업	호수	인구	비고	직업	호수	인구	비고
농업	1,079	4,390	노대농장 포함	신문판매	5	15	
어업	290	652		두부제조	4	7	
금융업	28	101		광산업	4	17	
보험종사원	7	26		간판업	11	24	
질옥업	92	353		관상업	2	6	
인쇄업	27	122		연와제조업	8	18	
사진	133	467		다방업	4	16	
운송	28	207		하숙대여	33	116	
창고	12	102		식료제조	5	13	
세탁	78	338		주유업	12	29	
이발	34	112		면화상	2	2	
대서	13	30		초자상	7	31	
제과	56	193		유기장업	1	5	
곡물판매	169	1,391		제화피혁	10	44	
철공소	3	24		자전거	10	37	
안경시계	43	148		군위안소	11	38	
악기상	9	29		직물업	4	4	
천막상	1	33	공장	정미업	7	56	
가구상	18	38		수육판매	12	39	
전기자구상	19	63		콜크스	1	2	
문방구	12	61		석유판매	1	2	
재목상	20	132		도기상	1	2	
금물상	6	32		이물상	1	1	
약종상	70	260		재봉업	4	4	
고물상	66	211		섬유공업	2	4	
석탄상	19	74		전신전화종사원	9	25	
양품잡화상	97	343		선박종사원	20	83	
식료잡화	871	2,716		면타업	3	13	
황물잡화	227	763		해산물상	20	133	
잡화행상	235	447		채소종자상	3	12	
여관업	107	421		측량사	1	4	
중개업	10	54		고력공급	2	7	
누제조업	6	28		도장업	6	13	

90) 『在北支朝鮮人概況』, 39~40쪽.

무역상	92	416		석림제조	1	3	
안마	2	7		철도종사원	2	2	
미용원	1	5		음식점	150	628	
기계판매	8	44		작부	363	1,530	
광고	1	4		요리점	258	820	
제승	4	20		예기		98	
카페	29	122		여급		263	
의사	56	223		목사	10	35	
관리	253	633		공리	277	641	
은행회사원	1,490	3,821		토목종사원	17	22	
운전수	47	56		여중	4	7	
견습간호부		1		치과견습생	1	1	
요리인	11	27		창기	130	282	
과자직인	4	6		이발직인	2	2	
교원	45	88		의사조수	4	8	
점원	1,160	2,921		군종사원	585	1,302	
전공	4	7		대공좌관	214	469	
양복직인	9	19		일용직	435	903	
직공	189	634		외교원	2	2	
토공	5	7		기타	881	2,882	
무직	4,331	14,199		토목건축	196	494	
자동차	44	267		양복상	119	533	
홍행업	6	33		산과업	3	5	
통역	3	5					

* 『在北支朝鮮人概況』, 1940, 10~17쪽.

화북지역의 다양한 한인 직업군 가운데 농민이 가장 많은 수를 차지하고 있으며, 은행종사원과 식료품 잡화상, 잡부 순이다. 농업 부분이 많은 것은 주변에 노대농장과 같은 대규모 농장이 설치되었기 때문이며, 작부 등 유흥업에 종사하는 자는 일본군 전선을 중심으로 증가하였다. 또한 무직자가 14,000여명이 있다는 것은 화북지역 한인사회에서 직업의 불안정성을 여실히 보여주는 것이라 할 수 있다. 화북지역에서 한인 무직자와 부정업자의 비중이 증가하자 북경, 천진총영사관 및 기동정부에서는 이들의 처리 문제에 고심하였으며, 노대농장은 그 결과물의 하나였다.⁹¹⁾

한편 아편은 한인사회의 가장 큰 골칫거리의 하나였다. 고단한 ‘타향살이’를 벗어나기 위해 일확천금을 노린 한인들이 쉽게 접근한 것이禁제품 즉 아편과 같은 중독성 물질이었다.⁹²⁾ 물론 아편이 한인사회의 문제만이 아니라 전 중국의 문제라고 해도 과언은 아니지

91) 『在北支朝鮮人概況』, 31쪽. 노대농장의 설치와 운영 등에 대해서는 김광재의 앞의 글(1999) 참조. 부정업자의 전향에 초점을 맞추었다는데 점에서 만주지역 안전농촌과 노대농장의 차이를 명확하게 알 수 있다.

만 한인 아편취급자들의 행태는 중국인들의 눈에도 결코 호의적인 모습으로 비추어지지 않았다. 이에 따라 부정업자의 정업전환에 대하여 조직적으로 선전할 정도였다. 심지어 일본인과 단순 비교해서 한인들의 나쁜 습성이 마치 원래부터 우리 민족의 습성임을 강조하여 이에 대한 쫓기 대회를 개최해야 한다는 주장이 제기되기도 했다.⁹³⁾ 『재만조선인통신』에 실린 기행문의 일단을 보면 당시 상황의 심각성을 알 수 있다.

내가 처음으로 산해관을 지날 때 몹시 느낀 것은 기차가 비좁으리만치 드러안즉 조선인 소부의 행군이였다. 곁에 안저서 그들의 하는 말 사투리를 들으면 조선13도가 거진 모인 모양이였다. 황군의 진출하는 곳마다 값없는 우슴의 꽃이 피어나는 모양이다. 민족의 수치를 더할 뿐으로 그다시 명예될 것도 없는 것이다. 외국인의 안목으로 본다면 조선어머니는 딸을 길러서 모조리 매소부로 내여 돌린 것 같이 보일 것이다. 그다음 둘째로 느낀 것은 치안이 안정되지 않은 촌 구석에까지 동포가 진출하여 본토인을 상대로 양행을 경영하는 사실이였다. 만주사변 전후로 일시 만주에도 양행이 성행하여 부정업자를 다시 생산하였음은 자타가 공인하는 바였다. 그 반면에 견실하게 대지개척에 공헌한 동포가 다수 있었다는 사실을 잊어서는 안될 것이다.(중략) 금일과 같이 재지 동포가 전혀 본토인의 나쁜 습속에 승하여 그 고향을 착취하기에 여념이 없고 뒤에 오는 동포야 어찌되든 상관할 필요가 없다고 하는 악성의 이기주의에 빠져 있는 가 하면 그야말로 동포의 적이요. 인류의 적이다. 화북에 먼저 왔다는 선발대가 양행방 구석에서 코를 골고 시찰오는 선배 역시 그 모양이니 추호만치라도 민족의 흥융을 희망하고 그 발전을 도모하려는 자라면 개탄의 눈물을 흘리지 않을 수 없다.⁹⁴⁾

일제로서는 한인들에게 새로운 임무를 부여했다고 하였다. 동아신질서의 구축과 '제국신민'의 영예로운 지위를 이주한인에게 부여하였다는 점이다. 특히 중국을 식민지화하려는 해양세력의 진출을 저지하고 동양평화를 수립하는데 결정적 동력으로서 한인의 역할이 강조되는 시점에 부정업과 같은 '악성이기주의'에 빠지는 것을 경계해야 함을 강조하였다.⁹⁵⁾ 한인의 자존을 지켜야 한다는 부정업에 대한 경계가 바로 시정된 것은 아니었다. 또한 간과해서는 안되는 점이 마약밀매 등에 일제의 '후원'이 간접적으로 작용했다는 것이다.⁹⁶⁾ 일제가 만주지역에서 한인청년들을 이용해서 '항일세력'을 제거하고자 했듯이, 화북지역에서도 한인들을 이용하여 중국인들에게 아편중독자를 많이 양산하게 했던 것도 이러한 맥락에서 이해될 수 있다. 일제가 침략과 통치 속에서 취했던 이주한인 정책의 일정한 패턴을 화북지역에서도 그대로 실행하고 있음을 한인의 부정업과 연결하여 그 일단을 볼 수 있다고 하겠다.

92) 『文壇使節 歸還報告, 皇軍慰問次 北支에 단여와서』, 『三千里』, 11권 제7호, 1939)

93) 『在滿朝鮮人通信』 62, 1939년, 111쪽.

94) 신민회 기동도 지도부 강영근의 글 북지에 오는 동포에 일언(『在滿朝鮮人通信』 64호, 39쪽).

95) 『支那事變과 朝鮮人』, 『在滿朝鮮人通信』.

96) 손염홍, 앞의 글(2007), 187쪽.

4. 맺음말

화북지역 한인사회는 만주지역과는 달리 1910년대 본격적으로 형성된다. 일제로서는 만주국과 인접해 있기 때문에 경제적, 정치적으로 가장 밀접한 곳으로 인식되어 왔다. 뿐만 아니라 화북은 한국독립운동과도 분리해서 생각할 수 없는 지역이기도 하다. 북경을 비롯해 천진과 내몽고 등에서 활동했던 독립운동가들은 이미 1910~20년대 한인사회 형성의 선구자 역할을 담당하였다. 하지만 1930년대 ‘만주사변’과 특히 중일전쟁을 거치면서 한인사회는 그 이전과는 다른 형태를 보였다. 특히 중일전쟁 이전까지 독립운동세력이 한인 커뮤니티의 주류였다면 이후에는 일제에 의해 부식된 ‘친일세력’이 주류였다고 할 수 있다. 이를 정리하면 다음과 같다.

첫째, 중일전쟁 이전 시기의 한인사회는 독립운동 세력이 형성했다고 해도 과언이 아니다. 화북지역 가운데 그 중심인 북경과 천진 지역은 상해지역을 비롯해 중국 관내에서 독립운동이 가장 활발하게 진행된 곳이며, 중국과의 협력을 이끌기 위해 선택된 곳이기도 하다. 그 유형은 만주지역의 정세불안과 3·1운동으로 국내에서 이주하여 독립운동을 전개한 유형으로 크게 구분해 볼 수 있다. 이들의 생활상은 넉넉한 편이 아니었으며, 심지어 대표적 독립운동가인 우당 이회영은 입에 풀칠하지 못할 정도였다고 한다. 그만큼 화북지역 한인들은 ‘망국노의 처지’를 그대로 감내해야 했다. 한편 북경과 천진뿐만 아니라 산서성 대동과 장가구, 내몽고 포두까지 거주지의 외연이 넓어지고 있었다. 그것 또한 독립운동가들의 필요에 의한 것이었지만 오늘날에도 여전히 유효한 측면이 있다.

둘째, 중일전쟁 이후 한인사회의 특징은 한마디로 침략과 굴종이라고 정리할 수 있다. 일제가 빠르게 화북지역은 점령하면서 한인들 역시 그 노선을 따라 거주지를 형성하였다. 하지만 일제에 의한 거주지의 외연 확대는 또다른 굴종의 모습으로 나타났다. 소자본가의 등장도 일제의 군수산업과 연계된 경우가 많았으며, 아편밀매와 같은 부정업자의 증가도 이와 무관하지 않다. 일제의 세력권 안에서 또는 일제 기관의 영향 아래에서 운영되었던 한인단체들의 성격은 새삼 논할 필요없이 일제의 그늘에서 자유롭지 못했다. 약 8년간 화북지역에서 보여준 한인들의 친일 형태는 어쩌면 당대 중국인들에게는 ‘고정된 거울’이었는지도 모른다. 특히 중국인들의 이주한인에 대한 인식은 해방 후에도 쉽게 극복될 수 있는 것은 아니었을 것이다. 다른 한편으로 해방 후 독립운동가들 가운데 일부가 화북지역에서 그대로 정착한 것은 어떠한 것으로 설명할 수 있을까. 이에 대해서는 추후 별도로 논의하고자 한다.